

瑞典スエデンボルグ原著

天界と地獄

英國スエデンボルグ協會發行

246
1
179



79W28922

目次

天界

序言……………一

主は天界の神なること……………二

天界は主の神格によりて成ること……………四

天界における主の神格とは主に對する愛、及び隣人に對する仁なること……………五

天界は二國土にわかるること……………八

三種の天界あること……………一〇

諸天は無數の團體より成ること……………一三

各團體は小形式の天界にして、各天人は極小形式の天界なること……………一六

全天界を統一して見るときは一個人に類すること……………一九

諸天界における各團體は一個人に似たること……………二一

故に各天人は圓滿なる人體的形式を具すること……………二三

天界の全般とその各分體とを舉げて一個人に類するは主は神的人格なるが故なること……二五

天界一切の事物と人間一切の事物との間に一種の相應あること……二九

天界と地上一切の事物との間に相應あること……三三

天界の太陽のこと……三八

天界における光と熱とのこと……四一

天界における方位のこと……四七

天界における天人の情態變化のこと……五一

天界における時間のこと……五四

天界における表像及び影像のこと……五六

天人着用の衣類のこと……五八

天人の住處及び家庭……五九

天界における空間のこと……六二

天界において會同と交通とを規制する形式のこと……六四

天界における統治制度のこと……六九

天界における禮拜のこと……七一

天界における天人の力のこと……七三

天人の言語のこと……七五

天人と人間との談話のこと……七九

天界における文字のこと……八四

天界の天人が有する認識のこと……八七

天界における天人の無垢なる情態のこと……九三

天界における平和の情態のこと……九七

天界と人類との和合のこと……一〇〇

聖言によりて天界と人間と和合すること……一〇五

天界と地獄とは人類より成ること……一一〇

天界における異教徒即ち教會外の人のこと……一一三

天界における嬰兒のこと……一一九

天界における達者と愚者とのこと……一二六

天界における富者と貧者とのこと……一三二

天界における婚姻のこと……一三八

天界における天人の職務のこと……………一四六

天界の悦樂と幸福のこと……………一四九

天界は廣大無邊なること……………一五八

精靈界

何をか精靈界と云ふこと……………一六三

人はみなその内分において一個の精靈なること……………一六六

死後の蘇生、及び永遠の生命に入ること……………一七一

人は死後圓滿なる人身を有すること……………一七四

人間は他生においても亦此世に在りたるときの如き感覺、記憶、想念、情動を有すること、及び死後此世に捨ておくは只物質的形骸のみなること……………一七八

人間死後の生涯は世に在りしときの如きこと……………一八六

各人の生涯に屬する歡喜は死後之に相應せる歡喜となること……………一九五

人の死後における情態第一……………二〇〇

人の死後における情態第二……………二〇三

人の死後に於ける情態第三、即ち天界に入るものが教誨を受くる情態のこと……………二一〇

何人も制約なき仁慈によりて天界に往くことなきこと……………二一四

天界に到るべき生涯を營むは人の信する如き難事にあらざること……………二一八

地獄界

主は諸の地獄を統御し給ふこと……………二二五

主は何人をも地獄に墮落させ給はざれど、精靈自ら此に墮落すること……………二二七

地獄にあるものは總て自己及び世間の愛より生ずる諸惡及び諸偽に住すること……………二三〇

何をか地獄の火及び切齒と云ふこと……………二三七

地獄に在る精靈が有する怨恨、及び凶惡なる術數のこと……………二四二

地獄の影像、位地、員數のこと……………二四五

天界と地獄との平衡のこと……………二四九

人間に自由あるは天界と地獄との平衡より來ること……………二五三

附録

スエデンボルグ小傳……………二五六

天界と地獄。

一。主、諸弟子の前にて、世界の終焉、即ち教會の末期につきて説き給へるとき、愛と信とに關して教會は種々の變遷をなすべきことを豫言し、其終りに言ひ給へるは、「これらの日の患難ののち直ちに日はくらく、月は光を失ひ、星は空より墜ち、天の勢震ふべし、そのとき人の子の徴、天にあらはる、また地上にある諸族は哭き哀み、且つ人の子の權威と大なる榮光とをもて、天の雲に乗り來るを見ん。又其使等を遣し、^{あつぱ} 籟の大なる聲を出ださしめて、天の彼極より此極まで、四方より其選ばれしものを集むべし」と。(馬太傳、第二十四章、二九、三〇、三一)これらの言葉を文字の意義にのみ從ひて解するものは、最後の審判と云はれたる世界終焉のとき、是等の事件、字義の如くに起り來らんと信する外なかるべし。是故に彼等は信せん、日月光を失ひ、星空より墜ち、主の徴天にあらはれ、又雲の中より籟をもてる天人と共に主の來るを見るのみならず、又他處に豫言せられたる如く、見限りの世界は悉く滅びて、此に始めて新たなる天地の出現を見得んと。今日教會に屬する人の意見は大抵此の如くなりとす。されどかく信するものは、聖言には微細の處に至るまで、密意を存せざるなきを知らざる也。何となれば聖言には殘る處なく一々内義なるものを有すればなり。而してその裡に

は、文字の如く解すべき自然的、世間的のことにはあらず、心靈的、天界的のこゝを含ま居れり。こゝは數多の文句を概括して解するときのみ然るにあらず、之を個々に分ちたるときも亦然るを見るべし。何となれば各個分立の文句のうちに、一々内義を含ましめんため、悉く相應の理によりて述べられたるもの、是れ即ち聖言なれば也。此意義の何ものなるかは「天道密意」の中に説き示せる處にて明白なるべく、又黙示録に記せる白馬の義を解釋せんとして纂めたる諸文句によりても明白なるべし。上に引用せる文中、主が太空の雲に乗りて來ること亦此の内義によりて會せざるべからず。即ち暗くならんと云ふ日は、愛の邊より見たる主を表はし、月は信の邊より見たる主を表はし、星は善と眞との知識、又は愛と信との知識を表はし、天上における人の子のしるしは、神眞の顯示を表はし、地上において哭き哀まんと云ふ諸族は、眞と善、又は信と愛とより來る萬事を表はし、天の雲より權威と光榮とをもて主の來らんと云ふは、聖言の中に主の現存するを表はし、かねて其黙示を表はし、雲は聖言の文字に顯はれたるを、而して光榮は聖言の内に潜める意義を表はし、又天人の籠をもちて大なる聲を出すに云ふは、神眞の由りて來るべき天界を表はす也。是の故に、主が宣へる如上の言葉は何の義なりやと云ふに、教會の終期に當り、信と愛と亦共に滅ぶるとき、主は聖言の内義を啓き、天界の密意を現はし給ふといふにあるは明白なるべし。次の諸章において、われは、天界と地獄の事、及び死後の生命に關する密意を現はすべし。是等の事は總て聖言の中にしるさるれども、今時の教會

者流は嘗て之を知らず。實に教會の中に生れたるものすら此事を否まんとするもの少なからず。其心に思へらく、「何者か能く彼の世より來りて是等の事を語れるぞ」と。此の如き非理を肯ふもの特に世智にたけたる人々の中に多きを見る。其毒の或は眞率純信の人に及び、遂にその壞亂を來たすことなきを圖らざるが故に、われは過去十三年の間、天人と相交り、之と相語ふこと、猶人間の如くなるを許され、又親しく天界にある諸事件、及び地獄の模様をも見るを許されたり。而してわが今これらの見たる所、聞きたる所を書き記すは、世の無明を照らし破り、不信を除き去らんがためなり。今日此の如き直下の默示ある所以は、是れ即ち主の來降を義とするものとす。

○主は天界の神なること。

二。まづ天界の神は誰人なるかを知らざるべからず、何となれば一切の餘事皆此に係ればなり。天界における神として、普く到る處に、認識せらるゝは唯主一人あるのみ。天界にあるもの皆云ふ、主と父とは一なり、父は主に在り、主は父に在り、而して主を見るものは父を見ると。又云ふ、一切の聖きことは皆彼より來る也。彼等の言ふ所はすべて主自が教へ給へる所の如し。(約翰傳、第十章、三〇、三八。第十四章、一〇、一一。第十六章、一三、一四、一五。)此事につきて、われ屢、天人と打語れり、彼等常に云ふ、天界に在りては、神格を分ちて三となすを得ず、何となれば彼等は神格の一な

ること、神格の主に在りて一なることを知得し、又感得すればなりと。彼等又曰ふ、神格三位の見えること、抱きて世間より来る教會の人々は天界に入るを許されず、何となれば彼等の心は神格中各別位の間に移り行けばなりと。又云ふ、心に三を念じて、而して口に一を言ふを得ず、何となれば天界に在りては人の言皆其心より出で、言ふ所は即ち思ふ所、思ふ所は即ち言ふ所なればなりと。是の故に世の人、神格を三分して、各位分立すと思ひ、これを一となして主の上に集中し得ざるものは、天界に入ることは能はず。そは天界にては一切の所念常に相交感するが故に、もし人あり、心に三を念じて、口に一と唱へんには、其人直ちに露現して天界より逐ひ放たれるべければなり。されど此に記すべき一事あり、即ち真と善、又は信と愛とを別物視せざりしものは、他世に入るとき、人に教へらるゝまゝ、遂に天界に行はるゝ見解を攝受して、主は宇宙の神なることを知るに至ることは是也。されど信と實際の生涯とを分ちて二となすもの、即ち實信の所解に従ひて其生涯を營まざりしものは、上の如くなる能はず。

三。教會内に在りて、主を否み、只父をのみ認めつ、此信條の上に安立せるものは、天界の外に在り。これらの人に對しては、主のみ崇めらるゝ天界より嘗て何等の内流あらざるが故に、彼等は次第に思索力を失ひ、何事につきても正當なる思念を有し得ざるに至り、遂に或は啞の如くなり、或は其言ふ所、痴呆の如くなりて、歩々定まらず、その手は垂れて、震ひ動き、その肢節全く力を失ひたらんが

如し。又ソシニア教徒の如く、主の神格を否みて、その人格をのみ認むるものも亦天界の外にをれり。かれらは稍、右側の前面に配置せられ、回みたる處に落在して、基督教より來れる自餘のものは全く別處に分居せり。されど彼の見るべからざる神格を信すと云ふものに至りては、宇宙の實在をこゝに認むとなし、一切萬法みな之より發し來るとなし、主に對しての信仰を拒絶するが故に、彼等は事實の上において神を信せざるものと謂ふべし。何となれば、彼等の見るべからざる神格は「自然」の第一義と云ふが如きものにて、思念の對境とならざるが故に、また信と愛との對境たることなければ也。此の如きは、「自然」信徒と云ふものゝ中に放ちやらる。されどかの教會以外に生長して、異教徒と名づけらるゝものに至りては、これと異なる處あり、そは下章において説き及ぶべし。

四。小兒は天界を三分して其一を保てり、彼等は天界に攝取せらるゝに従ひて、主は彼等の父なること、又一切萬物の主なること、故に天上地下の神なることを認得し、信受するに至る。下章において、己れは天界における小兒の生育、及び各種の知識に由りて、完成の域に進み、遂に天人的智慧と證覺とを得ることを説くべし。

五。主は天界の神なりと云ふことは、教會に屬するものゝ皆疑ひ得ざる所なり。何となれば、主自ら教へ給へる所によれば、父に屬する一切のものは亦主に屬し、(馬太傳、第十一章、二七。約翰傳、第十六章、十五。第十七章、二。)又天上地下、一切の權力は皆主のものなればなり。(馬太傳、第二十八

章、一八。主が天上地下と云ひ給へるは、天上を統御するものは、亦地下をも統御するに由る。何となれば彼此相依ればなり。天上地下を統御すると云ふは、愛よりする一切の善と、信よりする一切の眞、即ち一切の智慧と證覺、従ひて一切の幸福、概して言へば、永遠の生命いのちを主より受くることの義なり。主は下の如く説きて此旨を教へ給へり。曰く、「子を信するものは無窮の生命を獲、子を信せざるものは生命を見ざるべし。」(約翰傳、第三章、三六。)又曰く、「われは復活なり、生命なり。われを信するものは死ぬることも生くべし。すべて生けるもの、われを信せば、決定して死することなし。」(約翰傳、第十一章、二五、二六。)又曰く、「われは途なり、眞なり、生命なり。」(約翰傳、第十四章、四。)

六。一類の精靈ありき、其尙世に在るや、父を認めたれども、主に對しては尙餘の人類の如き感を抱けるにより、主が天界の神なることを信せざりき。是故にかれらは其心に任せて、彼處此處に放浪し、到る處に尋ねて曰ふ、「主が統御し給へる外に天界なるものなきか」と。彼等は數日を費やして之を求めたれども、遂に得ざりき。かれらは天界の幸福を以て光榮と威力とに在りと思へるものなり。彼等は其願ふ所を得ず、却りて天界はかゝる快樂の所感にあらずと諭されて、彼等は怒れり、而して其心に思ふやう、願はくは他の天界に往きて、人を制抑すること、猶ほ地上におけるときの如く、かくして光榮の極に達するを得んと。

○天界は主の神格によりて成ること。

七。天人を總攝して之を天界と云ふ、そは天界は彼等によりて構成せらるればなり。されど天人と共に流入し、天人によりて攝受せらるる一物あり、之を主より起り來るところの神格しんかくとなす。是に由りて天界の全體成り、箇々の分體亦成る。主より起り來る所の神格しんかくとは愛の善、信の眞、是也。故に天人の天人たる所以は、主より善と眞とを攝受するによりて定まり、而して天界は是等の天人の構成する所とす。

八。在天のものは、皆下の如き道理を知り、且つ信せり、否、實に之を見得せり。曰く、「其志す所、爲す所の善なる所以は、自家よりするにあらず、その思ふ所、信する所の眞なるも亦自家よりするにあらず、皆神格しんかくによりてのみ然るを得、即ち主によりてのみ然るを得。而して其自家より起り來るものは、善も善にあらず、眞も眞にあらず、そは這裡、神格しんかくよりせる活力をかけばなり」と。最奥の天界に住める天人は明かに此内流を見得し、又感得せり、而して彼等は此内流を攝受する限り、天界の人たるを得るを自覺せり、何となれば此攝受によりて、始めて彼等は愛と信とにをり、智慧と證覺との光明中に入りて、これより生ずる天上の悅樂を享け得ればなり。此くの如く是等の事すべて主の神格しんかくより出で來り、天人はこのうちにありて天界を有するが故に、天界の成るは主の神格しんかくによりて、天人

自家の所作と相干渉せざるを明め得べし、聖言の中に、天界をもて主の所住となし、主の玉座となし、又天界に在るものは主に在るなりと云ふは、是がためなりとす。されど神格の如何にして主より起り來りて、天界に充塞するかは、下に説く所を見るべし。

九。天人は自家の證覺によりて、更に歩を進めて曰ふ、「たゞに一切の善と真とのみ主より來るにあらず、生命を擧げて亦皆主より來る」と。彼等が此義を確むるは下の理によれり、曰く、世に自在孤存のものあることなし、必ずや自家以前の存在を所依となす、故に一切のものは元始に由りて存在す、而して天人は此元始をもて一切生命の眞實在と云へり。彼等又以爲らく、萬物の恒在し得るは亦同一の理によるこ、何となれば恒在とは永遠の存在の義にして、もし一種の連鎖によりて元始と不斷の連結をなさざるものは、必ず直に滅びて全く散し盡くべければなり。彼等又以爲らく、生命の源頭は唯一なり、而して人間の生命は此源頭より來る一流なり、もし此流にして絶えず源頭よりの支給を受けざれば、直ちに枯れ果つべしと。又曰ふ、此生命の唯一源頭となるものは主なり、而して此より起り來るものは神善と、神眞とならずと云ふことなし。而して各自の運命は如何に之を攝受するかによりて定まるものとす。即ち信と生命とに在りて之を享くるものは、其中に天界を現出し、神善と神眞とを否むもの、又は之を塞ぐものは、之を化して地獄となす、そは彼等は善を惡となし、眞を偽となし、從ひて生を死となせばなり。天人は又生命一切の事は主より來るとの道理を次の如くに確むることあり、

り、曰く、世に在る一切のものは悉く善と眞とに關せずと云ふことなし、即ち人間の意的生涯は愛の生涯にして、善と相關し、智的生涯は信の生涯にして眞と相關す。而して一切の眞と善とは上天よりするが故に、生命一切のこと亦上天よりすると謂はざるべからずと。天人は此理を信するが故に、其善行に對して他の感謝を受くるを喜ばず。もし人あり、これらの諸善を彼等の所有に歸せんとすれば、彼等は之を憤りて引退すべし。人の知、人の善、皆その人自らよりして然りと信する如きは、天人の解せざる所なり。自己のためになせる善は善にあらず、何となればそは自己の所爲なればなり。されど善のために爲せる善は神格より來る善なり。而して天人は曰ふ、天界は此の如き善によりて成る、そは此の如き善、即ち主なれば也と。

十。一類の精靈あり、其尙世に在りけるとき、自ら爲せる善、自ら信せる眞を以て、實に自家胸中より來るもの、又は當然自家の所屬たるものと信せり、此の如き精靈は天界に入るを得ず。かの善行の功德を求め、又自ら義とするものは此種の信を有せり。而して天人は是の如きものを以て痴呆となし、賊人となして忌避す。彼等は斷えず自家をのみ求めて、神格を顧みざるが故に痴呆也。彼等は固より主の所屬となすべきものを己れに奪ひ取らんとするが故に賊人なり。是の如き人は天界における信仰、即ち天界の成るは、主の神格を天人が攝受するによるこの信仰に逆へるものとなす。

十一。天界に在り、教會に在るものは、亦主に在り、而して主は彼等に在りと云ふことは、次の所

言に由りて主の教へ給ふ所なり。曰く、「われに居れ、さらばわれ亦爾曹にをらむ。枝もし葡萄樹につらなざれば、自ら實を結ぶこと能はず、爾曹も我につらなざれば、また此の如くならん。我は葡萄樹にして爾曹は其枝なり、人もしわれに居り、吾亦彼に居らば、多くの實を結ぶべし、そはもし爾曹われを離るるときは、何事をも行ふ能はざればなり」と。(約翰傳、第十五章、四、五。)

十二。如上の次第によりて次の理は今や明かなるべし。曰く、「主は、天界の天人と共に、自家存在の中に住せり。故に主は天界における一切中の一切なり、そは主より出で来る善とは、天人と共に居給ふ主自らなるによる、何となれば主より来るものは主自らなるべければなり。是理を推して、天人より見れば、天界の天界たる所以は、主より出づる善即ち之を然らしむるものにして、天人自らよりするものと相関涉せざるを知るべし。」

○天界に於ける主の神格とは、主に對する愛、及び隣人に

對する仁なること。

十三。天界に在りては、主より出で来る所の神格を神眞と呼びなせり、其理は下に述ぶる所にて明かなるべし。此神眞は主の神愛に由りて、主より天界に流れ入るものとす。神愛と、之れより来る神眞とは此世における太陽の熱と、之より出づる光とに譬ふべし、即ち愛は太陽の熱に似、愛より来る

眞は其光に似たり。相應の原理によるも、火は愛を表はし、光は愛より来る眞を表はすを知るべし。是に由りて之を觀れば、主の神愛より来る神眞とは、その實性において、神善の神眞と相和合せるものなることを明め得べし。而して此和合あるが故に、天界の萬物を通じて生命あること、猶此世に在りて春夏の候、太陽の熱が光と和合して、地上の萬物を成熟せしむるが如し。熱もし光と和せざることは、光、冷却して萬物成熟せず、そはすべてのもの癩痺して、生氣永く絶ゆべければなり。熱に喩ふべき神善は、天人に在りては、愛の徳なり、而して光に喩ふべき神眞は、天人が由りて以て愛の徳を得る所のもの也。

十四。天界に在りて、天界を成せる神格とは愛なり、そは愛は靈的和合なるが故なり。愛は天人と主とを和合せしめ、又天人各自の間を和合せしむ、而して此和合あるが故に、天人の全部を擧げて、主の眼には一體の如く映する也。且つ愛は何人にとりても其生命をなせる眞實在なり、即ち愛あるが故に、天人と人間と、皆よく其生命あるを得るものとす。人間最深の活力の、愛より来るものなることは、省察力ある人の皆知る所なり。何となれば、愛ある處には暖氣を生じ、愛なき處には寒冷あり、而して之を奪ひ去るに及びて、そのもの枯死すればなり。されど又各自の一生は其所有の愛如何によりて定まることを知らんを要す。

十五。天界に在りては二種の愛を區別し得べし、主に對する愛と、隣人に對する愛と是也。最奥な

る、第三の天界には主に對する愛あり、第二なる中間の天界には隣人に對する愛あり。兩つながら主より出で來りて天界を成就す。此二つの愛が如何に分立して、又如何に和合するかは、天界に在りてこそ、分明に看取せらるれ、世間においては、僅かに其髣髴を知り得るに過ぎず。天界にありて、主を愛すと云ふは、人格の上より見て、主を愛するの謂にあらず、主より來る善を愛するの義也。而して善を愛するとは、その善に志し、その善を行ふや、皆愛に由らざるなきの義也。此の如く亦隣人を愛するとは、人格より見て、その朋侶を愛するの謂にあらず、聖言より來る眞を愛するの義なり、而して眞を愛するとは、之に志し、之を行ふの義なり。故に知るべし、是等兩種の愛は、善と眞との如くに分立し、又善と眞との如くに和合することを。されど是義は愛の何たるを知らず、善の何たるを知らず、隣人の何たるを知らざるものゝ會得し難き所とす。

十六。われ嘗て此事につき諸天人と物語れることありき。彼等云ふ、「主を愛し、隣人を愛すると云ふは、善と眞とを愛し、自ら其心の向ふ所に從ひて此善と眞とを行ふに在り、而して此理を教會の人が知らざるは怪むに堪へたり。されど何人にも其愛を表はさんとするときは、その人の願ふ所を、自らも願ひ、且つ之を爲さんとすべし、かくすれば自らも亦その所愛の人に愛せられて、之と和合するに至らん、世豈に他を愛して、而かも他の願ふ所を爲さざるものあらんや、かくの如きは其實彼を愛せざるなり。思ふにこは教會の人の知る所なるべし」と。天人等又曰ふ、「主より來る所の善は、主

自らの像相なり、そは其善のうち、主居ませばなり。善と眞とを以て、自己の生涯に屬せるものとなし、之を志し之を行ふものは、即ち主の像相となり、主と和合するに至るべし、こは諸人の知る所ならん。蓋し之を志すとは、之を行ふを喜ぶの義也」と。主は聖言のうちに亦如上の理あることを教へ給へり、曰く、「我誠を有ちて、之を守るものは、即ち我を愛する也。我また彼を愛して、わが居宅をかれと俱すべし」と。(約翰傳、第十四章、二一、二三)又曰く、「爾もしわが誠を守らば、爾はわが愛に居るべし」と。(約翰傳、第十五章、一〇。)

十七。愛は主より起り來る神格にして、天人を薰陶し、天界を成就すると云ふことは、天界における一切の實驗之を證據す。何となれば在天のもの、一人として愛と仁との形式によらざるはなく、其美言語に絶し、彼等の面貌、言語、乃至、一舉手、一投足のうち、悉く愛の光を現はさすと云ふことなればなり。又各人の生命に屬する靈的圓相なるものあり、一切の天人、一切の精靈より發し來りて、彼等を圍繞せり、而して此圓相によりて彼等は如何にその愛の動かす所となれるかを知り得べし、(之を知り得るには必ずしも其人に近接するを要せざることあり)何となれば此圓相は各人の情動的生涯、從ひて思索的生涯の裡より溢れ出づればなり、即ち愛的生涯、從ひて信的生涯より溢れ出づればなり。天人より溢れ出づる圓相は愛にて充てるが故に、何人となん彼等と俱なるものは、其中心よりして、彼等のために動かさる。われ嘗て屢、自ら之を看得し、かく動かされたることあり。天人が愛

によりて其生命を保つと云ふは、又次の事實にて明了なるを得べし、即ち他生にありては、人々其愛の如何に由りて、其面を向くる所を異にするなり。主及び隣人に對して愛をもてるものは、常に主に向ひ、自らを愛するものは、主に背けり、而して此向背は彼等が身體の動作如何に關せざる也。何となれば他生に在りては空間の位置は其人の内心の状態に由りて定まり、方位の如きも此世の如くならず、其人の面貌の相好によりて決すればなり、されど天人は自ら主に向ふにあらず、主より來る一切の事物を躬行するを喜ぶものは、主之をして自らに向はしめ給ふなり。此事は他生における方位のことを説くに當り詳述すべし。

十八。愛は天界における主の神格なり、そは愛は天界における萬事を容るゝ器なるに由る。萬事は平和と、智慧と、證覺と、幸福と、是なり。何となれば大となく、小となく、愛はすべて己れと相和するものを容るればなり。愛は此の如くにして絶えず富み且つ全からんことを望むが故に、その己と相和するものを願ひ、之を求め、之をその身に吸ひ入るゝこと、自ら爾るが如きものあり。こは亦人間の自知する所なり。何となれば人もし愛する所あれば、自己の記憶中にて其愛と相應する一切の事物を點檢して、之を抜き出し來り、而る後、之を其愛の中に寄せ集めて、順序を立て、又之をその愛の下に隸屬せしめければ也。その愛の中に寄せあつめんとするは、之を己れのものにせんとして也、而してその愛の下に隸屬せしめんとするは、之をしておのれの用を辨せしめんためなり。而してその

愛と相和せざるものに至りては、之を拒み、之を滅ぼすべし。愛の裡には己と類を同ふするすべての眞を容るべき餘地あり、又この眞を己に和合せしめんとする希求あることは、天界に容れをさめられたる諸人を見ても明かなり。何となれば彼等の尙此世にあるや、愚かなるものなりしも、天人と伍するに至りて、證覺を得、天界の慶福を得るに至りたれば也。此道理いかんと云ふに、彼等は善のため善を愛し、眞のために眞を愛し、之を自己の一生中深く心に植ゑたるにより、遂に天界に入りて、その不可説なる妙相を悉く受け得べき餘地を作れる也。されど自己と世間とをのみ愛するものは、是等のことどもを其身に受くる能はず、彼等は却て之を避け、之を拒む、もしその來りて彼等に觸るゝことあり、彼等の裡に流入せんとするときは、彼等は遁れ走りて、地獄に入り、彼等のご相似たる愛を有するものと交はる。嘗て精靈あり、天界の愛に此の如き事あるべきかを疑ひ、其果して然るかを知らんと願ひたるに由り、彼等はやがて障礙となるものを且らく除きて、天的愛の境涯に入れられ、少し隔りたる天人界の一方に導き行かれたり。此時彼等われに告げて曰ふ、彼等は此處にて一切世間の言葉に現はし難きほど、内心の幸福を感じ、その再び以前の境涯に歸らざるべからざるを歎きたりと。此外又天界にのぼせられたるものありけるが、其愈々内に入るに従ひ、即ち愈々高きに上るに従ひ、證覺と智慧と愈々増し來りて、嘗て難解不可得と思へることも、その當時はこれを感じたりと云へり。是によりて之を見れば、主より來る愛は天界、及び天界にある一切のものを容るべき器なりと

謂ふべし。

十九。主に對する愛、及び隣人に對する愛は、其裡に一切の神眞を攝せりと云ふ。こは主が嘗て是等二個の愛につきて言ひ給へる所に見て明なるべし、曰く、「爾心をつくし、精神を盡して、爾の神を愛すべし、これ第一にして大なる誠なり。第二も亦これに同じ、己の如く爾の隣人を愛すべし。律法と豫言者とは此二つの誠に因れり」と。(馬太傳、第二十二章、三七より四〇) 律法と豫言者とは聖言の全般なり、故に又一切の神眞なりとす。

○天界は二國土に分かるること。

二十。天界の種類は無限にして、各國必ずしも相同じからず、天人亦各相異れり、故に天界をまづ總體の上より分ち、次に部類に従ひて分ち、又次ぎに之を個々に分つ。總體より天界を分ちて二國土となし、部類に従ひて三種となし、個々に分ちて無數の團結となす。今是等種々の分界につきて説く所あるべし、之を呼びて國土と云ふは、天界を「神の國土」と呼びなすに由る也。

二十一。天人が主より來る神格をその内分に受くるに當り、一類のものは他よりも多きことあり。その内分に神格を受くるもの多きを天的天人と云ひ、少きを靈的天人と云ふ。かくて天界を二箇の國土に分ちて、其一を天國と云ひ、他を靈國と云ふ。

二十二。主の神格をその内心に受くること多きが故を以て、天國を構成するに至れる諸天人は、之を呼びて、内的天人、又は高處の天人となし、彼等によりて構成せらるる天界を内的天界、又は高處の天界と言ふ。之を呼びて或は高じとなし、或は低じとなすは、内に在るものは高くして、外に在るものは低くければなり。

二十三。在天國の諸天人が居る所の愛を天愛と云ひ、在靈國の諸天人が居る所の愛を靈愛と云ふ。天愛は主に對する愛なり、靈愛は隣人に對する仁なり。凡そ人愛する所あれば、その所愛は彼にとりて善となるが故に、一切の善は愛より來るとなすを得べし。是を以て天國の善を天的となし、靈國の善を靈的となす。これによりて、天國と靈國とを區分するは何の點にあるかを明め得べからん。即ち是等兩國土の相異は主に對する愛の徳と、隣人に對する仁の徳との相異なるが如し。而して又主に對する愛の徳は内善にして、主の愛は内愛なるが故に、天國の諸天人は内的なり、之を高處の天人と呼ぶ。

二十四。天國を呼びて又主の祭司的國土と云ふ。聖言には之を主の住處と呼べり。靈國は主の王土にして、聖言には之を玉座と呼べり。世に主を呼びて耶蘇と云ふは、主の天的神格により、基督と云ふは主の靈的神格によるものとす。

二十五。主の天國に在る諸天人は、その内分に深く主の神格を受くるが故に、其證覺と光榮とにお

いては、靈國の諸天人に遠く優れり。何となれば彼等は主に對する愛を有するにより、主に近きこと他に勝れ、又主と和合すること他に秀で、深ければなり。彼等がよく此の如くなるを得るは、神眞[○]を其身に受け、又受けつゞくること直接なるに由る。靈國の諸天人のまづこれを記憶と想念とにうくるが如くならず。かくて神眞[○]は彼等の胸中に刻まれありと云ふべし、彼等が之を感得し、之を見得すること、恰も自家胸中を見るが如きものあり、彼等は嘗て眞はかくあるべし、かくあるべからずなど云ひて、之を論辯することあらず。猶ほ耶利米亞記中にしるされたる人の如し、曰く、「われはわが律法をかかれらの衷におき、その心の上にしるさん。人各、其隣人とその兄弟に教へて、『汝主を知れ』とまた言はじ。そは少より大に至るまで、悉くわれを知るべければなり」と。(第三十一章、三三、三四。)彼等は又以賽亞書に謂はゆる「エホバに教へられたるものなり」。(第五十四章、一三。)而してエホバに教へられたるものは、又主に教へられたるものなることは、約翰書(第六章、四五、四六)に示し給ふ所なりとす。

二十六。是等の諸天人は神眞[○]を直截にその身に受け、又受けつゞくるにより、他に優れて證覺と光榮とを有てりと云へり、こは彼等神眞[○]を聞かや、直ちに之を志し、之を行ふに由る。彼等は眞を記憶の上に貯へおき、後にてこは果して眞なりや、否やと思ひ直すことなし。是等の諸天人は主よりの内流によりて、一たび眞を聞けば、直ちにその眞なることを知れり。何となれば主はまづ直ちにその人の意志の中に流入し、此意志を経たる後、間接にその想念の上に入れば也。語を換へて之を言へば、主はまづ直接に善に入りたる後、之をへて間接に眞に入るとなすべし。そは意よりするもの、かくて行よりするものを善となし、記憶よりするもの、かくて想念よりするものを眞となせばなり。蓋し一切の眞はまづ意志の中に入るに及びて、善と化し、愛の上に植る付けらる。されど眞にして記憶の中、即ち想念の中に在る限りは、善とならず、生命を有することなく、又各人の所有とならず、そは人の人たるはその意志よりする所に在り、意志をへて想念に及ぶ所に在り、而して意志を離れたる想念に由るにあらざれば也。

二十七。天國の諸天人と靈國の諸天人との間に、此の如き區劃あるが故に、彼等は互に其居處を共にせず、又相交はることなし。彼等が相互間の交通は天的にして靈的なりと呼ぶる、天人の媒介的團體を通じて始めて行はる。天國が靈國に流れ入るを得るは實に此媒介に由る。されば天界は兩個の國土に分割せらるれども、尙ほその間に統一あるを得る也、そは相互の間に交通あり、和合あらんため、主は常に此の如き媒介的天人を供へおき給へば也。

二十八。是等兩箇の國土における天人に關しては、後來尙多言すべき折あるが故に、此に之を詳説せず。

○三種の天界あること。

二十九。三種の天界あり、一々の天界全く同じからず、最奥を第三天となし、中間を第二天となし、最低を第一天となす、此順序亂ることなし。而して三天相互の關係は、猶ほ人身における最高の處を占むる頭と、中央部をなせる身體と、最下部の兩脚との間における關係の如し、又一家屋中の上層、中層、下層、各樓間における關係の如し。主より起り、主より下り來る神格も亦此順序を逐へり、天界の三層に區分せらるゝは、實に此順序の必要あるによるものとす。

三十。人間の内分は内心と外心とより成れるものなるが、此中に亦如上の順序ありて、最奥部、中央部、最外部と分れをれり。そは人の始めて造らるゝや、神の順序に屬せるものは悉く這裡に寓せられ、その形式においては神の順序そのままにして、人間は小摸型の天界と謂ひ得べきものなればなり。是の故に人間は其内分において諸々の天界と相交渉せりとなすべく、而してその尙此世に生息せるとき、如何に神善と神眞とを攝受したるかによりて、死後天人の間に來るとき、或は最奥の天、或は中間の天、或は最下の天と、各其居處を異にするに至る。

三十一。主より流れ入る神格にして、第三天、即ち最奥の天に攝受せらるゝを天的と名づけ、此處に在る諸天人を天的天人と呼ぶ。主より流れ入る神格にして第二天、即ち中間の天に攝受せらるゝを

靈的と名づけ、此に在る諸天人を靈的天人と呼ぶ。主より流れ入る神格にして最下の天、即ち第一天に攝受せらるゝを自然的と名づく。されど此天の自然的なるは、人間界の自然的なると異にして、其うち亦自ら靈的且天的なるものあるが故に、此天を以て靈的且自然的なりとなし、又天的且自然的なりとなす、而してそこに在る諸天人を亦靈的且自然的、及び天的且自然的なりと云ふ。靈的天界なる中間の天、即ち第二天より内流を受くる天人を靈的且自然的と云ひ、天的天界なる第三天、即ち最奥の天より内流を受くる天人を天的且自然的と云ふ。靈的且自然的天人と、天的且自然的天人とは同じからざれども、同一程度の天人なるが故に、彼等は合して一箇の天界を作れり。

三十二。各天界に内外の別あり、内に在るを内天人と云ひ、外に在るを外天人と云ふ。諸天界を區別して内外の別あるは、猶ほ人における意志と、意志より來る智慧との別の如し。内を意的となし、外を智的となす。意よりするものには、必ず之に伴ふ智性あり、そは意と智とは相待ちて全きを得るものなれば也。意よりするものを火炎に譬ふれば、その智性なるを火炎の光明と看做すべし。

三十三。天人の天界における位地を定むるものは、其内分の如何に由ることを明かに知らざるべからず、彼等の内分が、主に對して、如何ほど豁開しをるかによりて、彼等が居る處の天界に上下深淺の差別あり。天人と、精靈と、人間とを問はず、各その内分に三段の度あり。第三度の内分豁開しをるものは、最奥の天界に在り、第二度の豁開せるものは、中間の天界に在り、只第一度のみ開けをるも

のは最下の天界に在り。而して内分を開く所以のものは、神善と神真とを攝受するに由るものとす。諸の神真を感じて、直に之を其躬、即ち其意に容れて、之をその行爲の上に現はすものは、最奥、即ち第三の天界に在り、而して此天における各天人の地位は、その如何に眞を感じて、これより善を攝受するかによつて定まる。神真を直に其意に納れず、まづ之をその記憶のうちに納れ、次に之を分別智に納れ、それより後、始めて神真を志し、又之を行ふものは、中間、即ち第二の天界に在り。その道徳を修めて、一箇の神的實在を信するも、深く其教を蒙らんと思はざるものに至りては、最下、即ち第一の天界に在り。是に由りて天界は各人内分の境涯いかゞによりて作られ、又天界は各人の裏に在りて、外にあらざるを明め得べし。こは亦主の教へ給ふ所なるは、次の言にて知るべからん。曰く、「神の國はあらはれて來るものにあらず、此に視よ、彼に視よと、人の言ふべきものにもあらず、それ神の國は爾曹の裏に在り」と。(路加傳、第十七章、二〇、二一。)

三十四。一切圓滿の相は内に進むに従ひて増し、外に出づるに従ひて減す、そは内に在るものは神格に近くして、自ら亦至純なるに由る、されど外に在るものは神格に遠ざかりて、自ら亦粗なるをまぬかれず。天人的圓滿の境涯は智慧、證覺、愛、諸善、及び此等より來る幸福を以て成るものとす。是等より來らざる幸福は以て天人的圓滿の境涯をなすを得ず、そは這般の幸福は外的にして内的ならざればなり。最奥の天界にある諸天人の内分は第三度まで開けをるが故に、彼等圓滿の境涯は、第二

度まで開けをる中間の諸天人の境涯に比して遙かに優れるものあり。而して中間の天界における諸天人が享有する圓滿の境涯は最下の諸天人のに比して優る所あるは、亦此の如しと知るべし。

三十五。此の如き差別あるにより、各天界の諸天人は互に來往すること能はず、即ち下天のものは上天に昇るを得ず、上天のものは下天に降るを得ず。もし人あり、下天より上天に昇り來れば、必ず痛く其心を惱ます、また己が周圍のものを見る能はず、まして之と言語を交ゆるをや。上天より下天に來るものは、其證覺を失ひ、辯舌溢りて、意氣全く沮喪す。嘗て下層の天人中に、天界は天人の内分より成れることを知らざるものあり、このもの信すらく、上層の天人界裡に入り得ば、今一層高尚なる幸福を得べからむと。彼等乃ち許されて上天に到り、諸天人と相交れり。されど彼等の一たび此に來るや、如何に探し求むれども、一箇の天人を見ず、而かも諸天人は嘗て此處を去りしことあらず。蓋しこの外來者の内分は此處にをれる諸天人のと同じの度に開けをらざりし也。故にその視覺も亦明なる能はざりき。暫くにして彼等はその心に痛みを覺ゆること甚しく、自ら生死のほどを覺えざるに至りぬ。是の故に彼等は直ちにもと來し天界に還り、おのが朋類のうちに入るを喜べり、これより彼等は決しておのが生涯以上に出でたるものを願はじと思ひ定めたり。われは又上天より降り來れる天人を見たり、彼等はその證覺を失ひて、己が所屬の天界の何たるかをも辨別せざるに至れり。されど屢、ある如く、主自ら下層の天人を上天に導き來りて、其光榮を見せしめらるゝときは、如上の事あ

らず、何となれば是時は天人豫め準備する所あり、媒介的天人に伴はれて、交通の途既に開けをればなり。是等の事情によりて三層の天界は相互の間に儼然たる分割を有するを明むべし。

三十六。同一の天界に在るものは相互の間に交通あり、而して彼等交通の歡樂は、各その居る所の善において、互に親和する度、如何によりて定まるものとす。されど是事につきては尙下に説くべし。

三十七。諸天界の分割此の如くにして、上層の天人と、下層の天人と相伍するを得ざれども、主は二種の内流によりて諸天界の間に連絡を通じ給ふ。直接内流と間接内流と是也。直接内流とは主より直ちに諸天界に流れ入るもの、間接内流とは各天界の間に流れ通ずるもの、主はかくして三層の天界を打して一となし、一切の事物をして元始より終點に至るまで、悉く連鎖あらしめ、一物も不羈なるを得ざらしむ。何かの媒介的連鎖に由りて、元始と相繋がれざるものは、繼在するを得ず、遂に消散して、無有に歸す。

三十八。神的順序に度あることを知らざるものは、諸天界の如何にして分割せらるゝかを解する能はず、又内人、外人と云ふは何の事なるかをすら解する能はず。世上多數の人は物に内外あり、又は上下あるは相續性によりて兩者の間に斷絶せざる連結あること、猶ほ物の精なるものより粗なるものに移り行くが如しと思へり。されど其實内外の關係は連續的にあらずして間隔的なり。今事物の度に二種ありて、一を連續的なるものとし、一を連續的ならざるものとなす。連續性の度は火光の漸次に

薄らぎ行きて遂に全く暗黒となるとき、又は吾人の視覚がひなたにある物體より、日蔭にある物體に移るに従ひて、次第に消え去るとき、又は空氣が下層より上層に進むに従ひ次第に其至純の度を加ふるときに見るを得べし。是種の度は距離によりて定まるものと謂ふべし。然るに連續的ならざる、即ち間隔的なる度に至りては、其例を前進者と後進者、又は原因と結果、又は能造者と所造者との間に見る如く、相互の區劃分明なり。究理の人は、世上到る處、總體の上に、個々の上に、萬物皆此の如く發生と構成との度あることを會するならむ。即ち此に一物あれば、之より又一物を生じ、此一物より更に第三者を生ずるが如し。是の如き度の道理を會得せざるものは、諸天界の區劃を知るを得ず、又人間の能力に内外の區別あることを知るを得ず、又靈界と自然界との差別、靈と肉との差別を知るを得ず。故に彼等は又相應、表像とは何の義にして、如何に起り來れるかを會せず、又内流の何たるかを會する能はず。外感に使役せらるゝ人は、一切の増減を以て連續的のものとなし、昔て前に言へる度のことに思ひ到らざるが故に、如上の諸差別を領得せず、故に靈的事實を見るにも、たゞ全く自然的なるものと同様の看をなさざるを得ず。是の理によりて彼等は門の外に立てるもの、智慧を去ること遠しと謂ふべし。

三十九。終りに臨み、是等三層の天界における諸天人につき少しく密意を述べべし。こは度のことわりを明めたるもの昔てあらざりしが故に、何人の心にも未だ浮ばざりし所とす。即ち各天人及び各

人間に最奥、即ち頭等の度、又は分と云ふべきものあり、主の神格はまづ、即ち直接に、此處より流れ入り、これより順序の度に従ひて、次に自餘の内分を整理す。この最奥、頭等の度を呼びて、主が天人及び人間に入るの門となすべく、又彼等のうちにおける主が殊別の居處となすべし。人に此最奥、頭等の度あるが故に、人は人として畜生界を超出す、畜生界には此の如き度あることなし。是の故に人間は畜生界と異なりて、その心及び稟性の上に一切の内分を有し、是等の内分によりて、主のために高められて、主に到り、主を信じ、主を愛し、かくして遂に主を見るを得、又智慧と證覺とを受けて、合理的言論をなし得る也。是の故に人間の生くるは永遠なり。されど此最奥の處において主が成し給へる施設と準備とに至りては、如何なる天人と雖、明かに之を意識する能はず、そは天人の思慮の及ぶ所にあらず、證覺の達せざる所なればなり。

四十。以上を三層の天界に關する全般の事實となす、以下當に各箇の天界につきて述ぶべし。

○諸天は無数の團體より成れること。

四十一。同一天界にある諸天人と雖、一處に雜居することなし、彼等各そのをる所の愛と信との徳を異にするによりて、大小の團體にわかる。かくて相似の善徳を有するものは、相集りて一團をなす。諸天界には善徳の種類無限にして、而して諸天人の性相は各その善徳の如何によりて定まるものとす。

四十二。天人が所有の善徳に全般的と個體的との差別あるにより、諸天界における彼等の團體は、互に隔離せり。何となれば靈界における距離は全く内分の情態の差異より來るものなるが故に、天界においては人々其居る所の愛の情態如何によりて相互の距離に差等あればなり。相違甚しき處は距離遠く、然らざる處は近し、蓋し同氣相求むればなり。

四十三。同一團體中の天人も亦此くの如くにして相隔離せり、圓滿の域に近きもの、即ち善徳に優れたるものは、又愛、智慧、證覺に優れたるを以て、彼等は中心に當りて其位を占む。此の如く優秀ならざるものは、周邊に在り、而してその中心を隔つの度は、圓滿の度に比例すること、猶ほ光明が中心を離れて次第に外邊に近づくに従ひ薄らぎゆくが如し。中心に位する天人は又最強度の光明中に住し、外邊に到るに従ひ、天人の光明愈々微弱となる。

四十四。天人の間にて、同氣相求め、同類相集る趣は、自らにして然るが如きものあり。そは相似たるものと俱に居るは、自己と同居するが如く、おのが家郷に住むが如くなれども、相似ざるものと俱なるは、外人と同居し、又他郷に住むが如くなればなり。又相似たるものと俱なるときは、おのが自由を得たるときにして、従ひて最も其生の樂しきを感じるときなりとす。

四十五。故に知るべし、諸天界に於いて一切を統合するものは善徳にして、此徳の性相、如何に由り天界に差別を生ずることを。されど此くの如く諸天人を統合するは、天人自作の功に由るにあらずし

て、善徳の源泉たる主の所爲なり。主は天人を導き、之を和合し、之を安排し、又その善徳に安住する限り、之をして自由に行動せしむ。かくて主は天人をして各其處に安んせしめ、愛、信、智慧、證覺を得て、其生を樂しましむるなり。

四十六。相似の善徳を有するものは、未だ嘗て相見たることあらざるも、相識舊の如きものあるは、猶ほ此世の人がその眷族、親類、朋友を相知るに似たり、何となれば他生における眷族、親類、朋友の關係は全く靈的にして、唯愛と信とによりて定めらるればなり。われ嘗て許されて、親しく之を見るを得たることあり。その時われは肉身を脱落して精靈の情態にをれるを以て諸天人と交はるを得たり。そのときわれ一類の天人を見たるに、彼等はわが幼時よりの相識に似たる思をなじき。されど自餘のものに至りては全く知己の感をなす能はざりし也。かく幼時よりの相識の如く思はれたる天人は、われと相似の靈的境涯にをり、然らざるは、其境涯全くわれのと相異せしなり。

四十七。すべて同一の團體をなせる天人の容貌は、個々に相違せる所あれども、大體においては相似たり。如何にして大體に相似て、而かも個々に相違するかは、此世における同様の事例に見て、多少か會し得らるべし。即ち人種の異同、殊に諸眷族間の異同を知らんとせば、まづその面と眼とにつきて、一般類似の點を見るに在ることは、人の能く知る所なり。今之を天界に見るに、天人の内的感動は、すべて外に表はれて、其面に輝き出づるにより、上述の事實は今一層完全に認め得らるものと

す。何となれば天界に在りては人々の面はその内的情動を外部に表像する形式なればなり。天界には内的情動に相應せざる面貌あることなし。われは又如何にして全體の上にある相似の點が、同一の團體に屬する個人の上に一々別様となるかを見得たり。即ち此に一箇の面貌の天人のに似たるありてわが前に現はれたり、而して此面貌は、同一の團體中に在る諸天人の場合における如く、善と眞との情動を受くる毎に、種々の變態を生じたり。而して是等の變態は永く繼續せしが、われはそのうちに同一の全般的面貌が、一種の素地の如くなりて、絶へず相續するを認めたり。自餘のものに至りては、此素地より轉化せるもの、擴張せるものに過ぎざりき。われは又此面貌に由りてその團體全般の情動の何ものなるかを認め得たり、此團體中にある諸天人の面貌は是等の諸情動に従ひて變態するものとす、何となれば上述せる如く天人の面貌はその内分の形式、即ち愛と信との情動を表現する形式なればなり。

四十八。是の理によりて天人の證覺に優れたるものは、他の面貌を見て、直ちにその性相を看破す、何となれば天界に在りては何人もその面を飾りて内分を矯むるを得ず、偽るを得ず、又如何なる方法に由りても、その技巧と假装とを用ひて詐欺を施すを得ざればなり。時に或は偽善者あり、自らその内分を包み、外分を和げて、その團體に屬するものよ如き徳相を装ひて、其うちに混じ入り、以て光明の天人の如く擬じんとすれども、彼等は久しく其處に住るを得ず、何となれば彼等の衷に流れ

入りて、彼等を衝動せしむる所の活力は、固より彼等のものにあらざるが故に、彼等は此逆抗に會ひて、内分に苦惱を覺えて、煩悶に堪へず、面色蒼黒、さながら生命を奪却せられたる如くなるべければなり。故に彼等は直ちに其身を投じて地獄界に入り、おのが同類と群居して、再び天界に上るを願はず。これらの人々は、かの婚姻の筈に禮服を着けずして來り、既に招かれて坐につける客人の間にいらんとして、却て外面の黑暗裡に投げ出されたる人々なり。(馬太傳、第二十二章、一一以下を見よ。)

四十九。天界の諸團體の間には相互の交通あり、されどこれは公通の途によるにあらず、何となれば天人には自己の團體を出で、他に赴くが如きこと、絶えてなければなり。天人が自己の團體を出づるは、自己の外に出づるが如く、又自己の生命を離るゝが如くにして、而して他の團體に赴くは、自己に宜しからざる處に往くなり。しかも尙諸團體の間に交通あるは、各人の生涯より出で來る圓相の延長によるものとす。これは各人の生涯が愛と信とに情動するより起る處の圓相にして、自ら遠近に擴がりて、周邊の諸團體に波及す、天人の内的情動愈々深く、愈々圓滿にして、其波及、愈々遠く、愈々長し、故に天人の智慧と證覺とは此波及の遠近に比例すとなすべし。即ち最奥の天界に在りて、その中心に居るものゝ圓相に至りては、天上到る處に波及せすと云ふことなし。此の如くにして天界には全般と個體との間に相互重々の交通あることを知るべし。されど此圓相の延長につきては、下に天

人の諸團體を排列する一定の天的形式なるものを説き、又天人と智慧と證覺とを説くとき、更に詳述すべし、何となれば一切天人の情動と想念との延長は皆此形式によりて動けばなり。

五十。さきに諸天界の團體に大小あることを云へり、そは大なるものは、天人の數、萬を以て計るべく、小なるものは數千、更に小なるものは數百の天人よりなる。又一類の天人ありて、他と別居せること、猶ほ一家族、一眷族をなせる如きものあり。彼等はかく隔離せられども、その一定の順序に従ひて排列せるは、諸團體に在るものと同じくして、賢なるものは中心に位し、愚なるものは外邊にをれり。是等の天人は他よりも一層直接に主の冥護を蒙り、天人中の最も優なるものとす。

○各團體は小形式の天界にして、各天人は極小形式の天界なること。

五十一。各團體は小形式の天界にして、各天人は極小形式の天界なる所以は、天界は愛と信との徳より成り、而して此徳は天界の各團體に在り、又團體中の各天人に在るに由る。到る處、此徳に不同あり、變態ありと雖、その天界の徳たるに至りては皆一也。その異なる點は、此の天界と彼の天界と性相を異にすると云ふに過ぎず。故に何人なりとも天界の一團體に取り上げらるゝときは、彼を以て「天界に行けり」となし、又そこに在るものは、天界に在りとなし、人各その所屬の天界に在りとなす也。こは他生にあるものゝ皆知る所にして、かの天界の外、又はその下に立ちて、天人の群を遠

くより望むものは、天界を此に在り、彼處に在りと云ふ。之を譬ふれば一箇の王宮又は王城内に數多の侯伯、大官、侍臣などの住へるに似たり。彼等は、或は上方、或は下方に當りて、個々各自の家舎、又は房室内に起居すれども、其一王宮又は王城内の人にして、各その能くする所を以て、王に事へんとするに至りては皆同じ。これによりて、主の言葉に、「吾父の家には第宅多し」とあるを明むべし、(約翰傳、第十四章、二)又豫言者中に「天の諸住處」及び「天中の天」とあるは、何の義なるかを明むべし。

五十二。各團體は小形式の天界なることは、各團體の形式が天界全般の形式に等しきを見て明かなるべし。天界全般に涉りて、衆に優れたるものは中央に位し、之を繞りて周邊に至るまで、次第に劣等なる諸天人の位を列ぬるは、前節(四三)に見たる所の如し。こは亦主が全天界を一個の天人の如くに統率し給ふに見て明かなり、各團體における諸天人も亦此の如くに統率せらる。是を以て或時は天人の團體の全部を舉げて、一個の天人の如き天人的形式を以て現はるゝことあり、こはわが嘗て主の許を得て親しく見たる所なり。しかのみならず、主自ら諸天人の中に現はれ給ふ時は、主は群衆に圍繞せらるゝ如く見え、彼等と共に一個の天人的形式を有せるものとのみ見ゆる也。故に聖言には主を天人と呼びなし、又團體全部をも爾か呼べり。ミカエル、ガブリエル、ラファエルと云ふは、天人的團體をその職掌より見て、かく名づけたるに過ぎざるなり。

五十三。團體全部が一個小形式の天人なる如く、各天人は亦一個極小形式の天界なり、そは天界は天人の外邊にあらずして、却てその内に在ればなり。天人の内分はその心より成れるものにして、その排列の形式は即ち天界の形式なり、こは天人をして其外邊にある一切の天的事物を攝受するに便ならしめんがためとす。而して天人が是等の事物を受くるは、主によりて彼が衷に存する善徳の性相如何に由れり。是の故に天人は亦一個の天界なり。

五十四。如何なる義においても、天界は人の外邊に在りと云ふを得ず、天界は實に内に在り。何となれば天人はすべてその身内の天界によりて身外の天界を攝受すればなり。是の故に、かの天界に來るとは、其人の内的境涯の如何に拘はらず、單に諸天人の群に取り上げらるゝこと、從ひて天界は何人にも何等の條件なく、只仁惠的のみに許さるゝことと信するもの、如何に誤れるかを明にすべし。實に人もし其内に天界を有することなくば、その外に在る天界は決して彼に流れ入らず、而して彼はまた之を攝受し得ざる也。されど精靈の此の如く信せざるもの多し。此不信の故を以て、彼等は嘗て天界に取り上げられたれども、その内的境涯の嘗て天人的境涯と相容れざるが故に、彼等の天界に到るや、その智力は全く滅びて遂に痴呆の如くなり、その意力は煩悶に堪へずして、はては癡狂の如くなれり。之を要するに、罪惡の生涯を送りて天界に來るものは、息塞がりて悶ゆること、魚の水を離れて空氣中に來れる如く、又動物の空氣全く盡きたる空氣唧筒の中にてエーテル氣内にをるもの

の如し。故に知るべし、天界は人の身外に在らずして内心に在ることを。

五十五。何人も身邊の天界を攝受するは、その内心の天界の性相如何に由るが故に、彼等の主を攝受するも亦此の如し、そは天界は主の神格より成ればなり。されば主のその身を天人的團體の中に現じ給ふや、その團體の主を見るは、各その居る所の善徳の性相如何によるが故に、甲團體の見る所の主は乙團體の見る所と同一ならず。不同の原因は主の身にあらずして、主を見る所の天人、各其善徳に由りて、自ら標準を定むるに在り。天人は又主の現身を見て、其心に情動を生ずること一様ならず、即ちその愛の性相、各相同じからざれば也。實にその中心よりして主を愛するものは、その情動最も内的にして、主を愛すること、かく深からざるものは、其情動亦深からず。天界外にある罪惡の徒に至りては、主を見れば、その苦悶に堪へざらんとす。主の天人の團體中に現身し給ふときは、其相一個の天人に似たり、されど彼は他の諸天人と異なりて、自ら神格の其身より赫き出づるあり。

五十六。主の認められ、信せられ、愛せらるゝ處には、天界あらずと云ふことなし。諸種の團體における善徳の一ならざるより、主を禮拜するの法亦一ならざるは、損の因にあらずして、却て有利の事なり、そは天界の圓滿なるは此くの如き不同あるに由れり。何故にその然るかを明解せんには、學者の間に普通行はるゝ術語を用ゆるを便とす。われらは今これに由りて、圓滿なる單元が如何にして各様の分體より成るかを説明すべし。凡そ單元にして各様の分體より成らざるはなし。何となれば各

様の分體より成らざる單元は無有なり、無相なり、故に亦何等の特性をも有せざるべければなり。されど今單元にして各様の分體より成り、その各分體が圓滿なる形式を取りて、相互の間に親和、調諧を有つときは、これを以て圓滿なりとなすべし。今天界は各様の分體より成れる單元にして、その分體は最も圓滿なる形式中に排列せらる、何となれば天界の形式はあらゆる形式中の最も圓滿なるものなればなり。すべて圓滿の相はその諸分體の調節より來るものなることは、われらの諸感官及び外心を動かす所の一切の美しきもの、楽しきもの、心ゆくものゝ性質を見れば分明なるべし。これらの事は數多の相和し、相協へる分體ありて、或は同時に、或は連續して、節奏及び調和を生ずるより起り來るものにして、決して一箇單獨の事物より發せざるなり。故に云ふ、變化は快感を生ずと、而して此快感の性相を定むるものは、變化の性質如何に在るは、人の知る所なり。これによりて天界における圓滿の相は種々の變態に歸因することを、鏡に見る如く、明らか得べし。何となれば自然界の事物より推して靈界の事物をも、鏡に見る如く、明らか得べければなり。

五十七。天界につきて言へる所は亦教會につきても言ひ得べし。蓋し教會は地上における主の天界なり。數多の教會あれども、皆一樣に之を呼びて教會となし、愛と信との徳、此に存する限りは、その教會なる所以を失ふことあらず。此處にも主は亦各分體を合せて單元を作り、數多の教會よりして一個の教會を作り給ふ。又教會全般につきて言へる所を移して個々の教會に屬する人の上に及ぼし得べ

し。即ち教會は人の裏に在りて、外にあらす。何人と雖、其心に愛と信との徳を具へて、主を此に在らしめなば、彼は一個の教會なり。又そのうちに天界を有せる天人につきて言へる所は、亦之を移して、そのうちに教會を有せる人間の上に及ぼし得べし、そは天人は一個の極小形式における天界なる如く、かの人は一個の極小形式における教會なればなり。實にそのうちに教會を有せる人間は、亦天人と同じく、一個の天界なりと謂ひ得べし。何となれば人は天界に往きて天人とならんため造られたるものにして、主よりする善徳を具有するものは、人間にして亦天人なるべければなり。此處にて人間は如何なるものを天人と共有し、如何なるものが天人に缺けて、人間に有るかを述ぶるを適當とすべし。人の天人と同じきは、その内分の等しく天界の影像なること、愛と信との徳に在る限り、人は天界の影像たることなり。人に存して、而して天人に存せざるは、人の外分是なり、而してこの外分の世間的影像なることはなり。而して人はその善徳に住する限り、世間的な外分をして天界に隸屬せしめ、天界の使役するまゝならしむ。是時主はおのが天界に在る如く、此人のうちに在り、主は彼が天界的生涯のうちにも、世間的生涯のうちにも等しくをれり。何となれば神的順序ある處には、主在らざることなければなり、神は順序なるが故に。

五十八。終りに、人もし胸中に天界を有せんには、その天界は彼が行爲の至大なるもの、即ち全般のなるものに現はるゝのみならず、その至小なるもの、即ち個々の行爲にも現はるゝことを記せざる

べからず、此の如き人に在りては至小の事物と雖、至大なるものゝ影像を留めずと云ふことなし。こは如何なる人も、その人たる所以は、自己具有の愛に在りと云ふこと、自己所主の愛は即ちその人格なりと云ふことに基因せるなり。何となれば各人所主の愛は、その人の想念、行爲の最も微細なる處にも流れ入りて、之を安排し、到る處におのれと相似たるものを誘出すればなり。諸天界に在りては、主に對する愛を以て、所主の愛となす。こは天界にては何ものも主の如く愛せらるゝことなきに由る。故にこゝには主を以て一切中の一切となす、主は全般の上に、個々の上に、流れ入らざる處なく、之を安排し、之を導きて自己の影像を其上に留めずと云ふことなく、又主の在る處は往くとして天界を現せずと云ふことなし。故に天人は極小形式における一個の天界にして、團體は之よりも大なる形式を有せる天界なり。而して諸團體を打して一となせるものは天界の最大形式をなせるものとなすべし。天界を作すは主の神格にして、主は又一切中の一切なることは上に述べたる如し。(七より一二。)

○全天界を統一として見るときは、一個人に類すること。

五十九。全天界を統一して、之を見るときは、一個の人に類することは、未だ世間に知られざる密意なれども、天界には充分に知れをれり。天界における諸天人は、此事實と、之に關せる大小、粗細の事項を知らんと勉む。彼等の智慧を用ゆる處は重に此點にあり。而して此密意を以て普遍の原則と

なさざれば、分明、徹底して彼等の心念中に入る能はざる數多の事項あり。是等は皆かの密意と連關せり。かくの如く、諸天人は、天界はその一切の團體を擧げて一個の人に類することを知るが故に、彼等は天界を呼びて大神人と云ふ、その神的なるは、天は主の神格によりて成ればなり。(上を見よ、七より一二。)

六十。靈的及び天的事物に關して正當なる觀念を有せざるものは、是等の事物が一個人の形式と影像とに従ひて排列せられ、和合せらるゝことを知る能はず。彼等は以爲らく、人間の外分を作せる世間的、物質的事物、即ち是れ人格にして、これなくば人はその人たる所以を失ふべしと。されど人の人たるは是等の事物によるにあらずして、その能く眞を知り、能く善に志すの力量あるによることを知らんを要す。是等の靈的、天的事物は即ち人格を作す所以のもの也。且つ人格の上下はその人の智性と意志との如何によることは、世人の能く知れる所なり。又この肉體は此世において意と智との役する所とならなため作られたるものにて、自然界の終極圏に在り、意と智との命令に應じて、その用を所辨するを以て務めとなす。是の故に肉體は何事をも自動的に作すを得ず、全く智と意との願使するに任せて活動す、即ち此に思ふ所あれば、之を口舌の間に出し、此に決意する所あれば、その身と四肢とを以て之を行ふ。故に作爲する所あるものは、智慮と意志とにして肉體にあらざる也。されば人の人たるは其智性と意性とに在りて、その人間的形式内に存するは、肉體中、至微至細の處にまで

ゆきわたりて、之を活動せしめんためなるを明むべし。猶ほ内分が外分の上に働くが如し。故に此點より見て、人を呼びて內的、靈的人格となす。天界は實に此の如き人格の最も大にして、最も圓滿なる形式を有せるものなり。

六十一。如上を天人より見たる人間觀となす。故に天人は決して人間がその肉體にて爲せる所に留意せずして、之を動かす所の意志如何を觀察す。何となれば天人は人格を以て此意志に存すとせばなり。その智性も亦人格の一分ならざるにあらざれども、そは意志と一致して活動するときに限れり。

六十二。されど天人が天界を見て一個の形式となすは、その全般に行きわたりてのことにあらず。何となれば、如何なる天人の眼界と雖、天の全般を測り知るべからざればなり。されど彼等は時に數千の天人よりなれる遠隔の諸團體を見て、人間的形式をなせる一團と看することあり。彼等は此一團を一分體と看做し、之れより推してその全體をなせる天界も亦此くあるべしとなす也。そは極めて圓滿なる形式をなせるものに在りては、全班は部分の如く、部分は全班の如くにて、兩者の相異は只その分量の上のみ存せるが故なり、故に彼等云はく、彼等が一團體を此の如く看ずると同様に、主は天界の全班を此の如く看じ給ふと、蓋し神格は至奧至上の處に在りて、物として見給はざるはなければ也。

六十三。天界の形式既に此の如くなるに由り、主は亦之を一個人として、即ち單元として統御し給

ふ。而して人體はその全分に在りても、その箇體に在りても、千態萬様の事物より成ることは、人能く知る所なり。即ち全分より見れば、肢節あり、機關あり、臟腑あり、箇體の上より見れば、織緯あり、神經あり、血管あり、かくて肢體の中に肢體あり、部分の中に部分あれども、個人の活動するは單元として活動する也。而して主が天界を統御し給ふも亦是の如し。

六十四。一個の人體中に此の如く數多の異様のものあれども、皆一體となりて活動するは、一物として、その用を遂ぐるに當り、全般の福祉を計らんとせざるはなきに由る。即ち全局は部分のために、部分は全局のために、何事か用を遂げずと云ふことなし。蓋し全局は部分より成り、部分は全局を作るが故に、相互に給養し、相互に揖讓するをわすれず、而して其相和合するや、部分と、全局とに論なく、何れより見ても、統一的全體の形式を保持し、且つその福祉を進めんとせざるはなし。これを以て彼等は一體となりて活動するを得るものとす。天界における統合も亦これに類似せり。すべて物の和合するは、各其の爲す所の用が相似の形式を踏襲するときなるが故に、全社會のために用をなさざるものは、天界の外に放逐せらるゝを常とす、そは他と相容れざればなり。用を遂ぐると云ふは、總局の福祉を全ふせんため、他の順利を願ふの義なり。而して用を遂げずと云ふは、總局の福祉如何を顧みず、只自家の爲の故に、他の順利を願ふの義なり。此はすべてを捨てて只おのれのみを愛し、彼はすべてを捨てて只主のみ愛すと謂ふべし。天界に在るもの、悉く一體となりて活動するは之がた

めなりと知るべし。而してその此の如くなるは主よりす、諸天人自らの故にあらず、何となれば彼等は主を以て唯一となし、萬物の由りて來る大根源となし、主の國土を保全するを以て、總局の福祉となせばなり。主は下の語によりて此意を説き給へり、「爾曹まづ神の國土と其正義とを求めよ、さすれば總てのもの汝に加へらるべし」と。(馬太傳、第六章、三三)その正義を求めよとは、その福祉を求めよとの義なり。此世に在りて、國家の福祉を喜ぶこと、私利を喜ぶより甚しく、隣人の福祉を以ておのれの福祉の如く喜ぶものは、他生においては主の國土を愛して、之を求むるもの也。蓋し天界における主の國土は、此世における國家と相對比すべきものなればなり。自己のためにあらず、只徳の故に、徳を他人に施すものは、隣人を愛すとすべし。天界にては、徳即ち隣人なるに由る。すべて此の如きものは、皆巨人、即ち天界の中に住する也。

六十五。全天界は一個人に相似し、又その相貌において、最大形式を有せる靈的且神的人格なるが故に、天界は亦人の如く、肢節、支體の區分を有し、其名も亦相似たり。而して天人は又一々の團體が支節の如何なる部分に位せるかを知れり。彼等云ふ、甲團體は頭部に在り、又は頭部の某の局處に在り、乙團體は胸部に在り、又は胸部の某の局處に在り、丙團體は腰部に在り、又は腰部の某の局處に在りと。概して言ふに、最奥、即ち第三の天界は頭より頸に至るまでを占め、中間、即ち第二の天界は胸より腰及び膝の間を占め、最下、即ち第一の天界は脚部より脚底と、臂より指頭の間を占め

れり。こは臂と手とは身側にあれども、人體の終極部なるに由る。天界の三分せらるゝ所以は、これを見ても益々明かなるべし。

六十六。天界の下面に住める精靈あり、天はその上方にも、下方にも一樣に之れありと云ふを見聞して驚くこと一方ならざりき。彼等は世上の人の如く、天は只上方にのみ在るものと思ひ信じたればなり。されど彼等は其實、諸天界の位地は、人體における肢節、機關、臟腑の如く、或は上方、或は下方に在り、又各肢節、各機關、各内臓中の諸小支體の如く、或は内部、或は外部に在ることを知らず。精靈が天界に關する思想の轉倒せるは是を以て也。

六十七。如上、天界を以て巨人の相ありとなして、是等の事項を述べたるは、先づ此の知識を有しおくにあらざれば、後來天界につきての記述を、如何にもして會得し難きによる。又天界の形式、主と天界との和合、天界と人との和合、靈界より自然界に來る内流、及び相應の理に關せる一切の事につきて、決して明晰なる概念を有する能はざるに由る。是等の事項につきては後來、序を逐ひて叙述すべければ、今はたゞ之が端緒を開きて、多少の光明を與へおくに止むべし。

○諸天界に於ける各團體は一個人に似たること。

六十八。在天の各團體が一個人に似たること、又その面影を有することは、わが屢々許されて見る

を得たる處なり。嘗て摸擬の術に長けたるもの、其實、偽善者なるに拘はらず、自ら光明の天人を装ひて、ある團體に交り入れることありき。われ天人が是等の偽善者と相分離せんとするを見るに、始めは全團體として一體をなす如くなりしが、次第に人體的形式を容かたぢづくれり。其時尙朦朧たるを免れざりしが、最後に至り、分明に一個人を現出するに至れり。此個人中に在りて、之を構成せるものは、皆此團體の善徳を具有せる天人にして、此中に在らず、從ひて之を構成せざるものは、さきの偽善者輩なりき。彼等は外に斥けられたれど、天人はそのまゝに留めおかれ、分離はかくして成就したり。偽善者とは善く語り、善く行へども、何事につけおのれをさきにするものゝ謂ひなり。彼等は主、天界、愛、天界の生涯などにつきて語ること天人の如く、又其言ふ所を行爲に示さんとして、善くその行を飾れども、その實際に思惟する所は然らず、彼等は何事をも信せず、又おのれを外にして徳を行するの念あることなし。故に彼等にもし善行ありとせば、そは皆自ら爲にする所あるに由る。もし又他人のためにすることあらば、そは他のこかく見んことを願ふに過ぎざれば、畢竟するに亦自利のため也。

六十九。主自らその身を天人の一團に現はし給ふとき、其全團は一體となりて、人體的形式をなすことは、わが又許されて見得たる所なり。東方の高處に當り、一片の白雲、薔薇色を帯びて輝かやきたるが、小さき星に圍まれて顯はれぬ。此雲次第に下方に進み來り、進み來るに從ひて、愈々輝きを放ち、

遂に一箇圓滿なる人體的形式を示したり。この雲を繞りて、星の如く見えたるは天人にして、彼等がかく星の如く輝けるは、主の光を受けたるがためなりき。

七十。天界の團體中に在るものは、總て之を集めて見れば、單元となりて一個人間の面影を具ふれども、各團悉く同一模型の面影を有すと思ふべからず。彼等の相似ざるは、猶ほ同一の家族に屬するものが、各其相貌を異にするが如くにて、前に述べたる如く(四七)、天人が各自に具有せる善徳、千差萬別なればなり。蓋し形式を限定するものはその人の善徳なるに由る。故に最奥至高の天界にある團體、殊に此團體の中心にあるものは、最も圓滿にして、最も美はしき人體的形式を現す。

七十一。此に記述しおくべき一事は、天界の團體中に入り來りて、何れも一體となりて活動するもの、愈々多きを加ふるときは、その團體が現する人體的形式も亦愈々圓滿なること、是也。そは前きに言へる如く(五六)、天界の形式に従ひて、各種の變態を排列するときは、此に圓滿の相を現じ、而して多數は變態を生ずればなり。又天界の各團體は日々にその數を増進し、この増進につれて、圓滿の度益々加はるが故に、此現象は各團體の上のみ止まらず、天界の全般に涉りて見るを得べし。何となれば天界は是等の諸團體より成ればなり。此の如く數の増進は天界をして益々圓滿ならしむる所以なるが故に、かの天界充滿のときは即ち天界閉鎖の時なりと信するもの誤れるを知るべし。事實は之に反して、天界充滿の度愈々高くして、其圓滿を加ふること愈々大なるが故に、天界閉鎖の期

は決してあるべからず。天人が何事よりも、新來の客を接するを、最も熱望するは、これがため也。

七十二。各團體を一體として見るとき、人體的形式を現すと云ふことは、前節に示したる如く、天界全般にわたりて此の如く見ゆるが故也。又圓滿無上なること、天界の形式の如きものにありては、各分體に全局の面影あり、小個體に至大なるもの面影あるが故也。天界を構成せる諸團體は、即ち天界の小なる分體、部分にして、所謂小模型の天界なることは、上來(五一より五八)既に説ける所なり。天界に在る一切のもの善徳は、悉く一個の愛、従ひて一個の源頭より來るが故に、今述べたる所の面影なるものは、之を無窮に見ることを得べし。一切在天のもの善徳を起し來ると云ふ、かの一箇の愛とは、即ち主に對する愛なり、而して是愛は主よりするものとす。故に知るべし、天界全般は總體的に、各團は分體的に、又各天人は個々に、主の面影を有することを。而してこは既に上來(五八)述べたる所なり。

○故に各天人は圓滿なる人體的形式を具すること。

七十三。前二節において天界の全般が一個人に相似すること、及び在天の各團も亦然ることを述べたり、そのとき開陳せる道理を推して、各天人も亦一個人に相似することを斷結し得べし。天界は至大の形式を具へたる個人にして、天界の團體は之に次ぎて大なる形式を具へたるものなる如く、天人

はその至小なるものなりと云ふ、その義如何と尋ぬるに、天界の如き極めて圓滿なる形式を有するものには、各分體に全般の面影あり、全般に各分體の面影あればなり。その理は天界は一箇の結社にして、その一切の所有を衆と共に相頼ち、衆はその一切の所有を結社より受領するが故なり。かくの如く天人は一切の天的事物の受領者なるにより、彼は一個天界の極めて小なるものとなすべし。こはその處に説ける如し。人も亦天界を攝受する限り、天人の如き受領者となり、一箇の天界となり、又一箇の天人となることは、既に上に述べたり(五七)。又黙示録の記する所によれば、曰く「彼は聖きゼルサレムの石垣を測りしに、人の度に從へば、百四十四キュビットあり、人の度は天人の度と同じ」と。(第二十一章、一七。)此に云へる「ゼルサレム」とは主の教會なり、高上の意義に從へば、即ち天なり。その「石垣」と云ふは虚偽と罪惡との襲來を拒がんだための真理なり。「百四十四キュビット」とは一切の真理と善徳とをすべて云へるなり。「度」とはその性相なり。「人」とは一切の真理と善徳とを悉く具有せるもの、即ちその裏に天界を有せるものを云ふ。而して天人は亦此義において人なるが故に、「人の度、即ち天人の度」と云ふ。これを如上の文句に含める靈的意義となす。此義なくば、誰か能く聖き「ゼルサレム」の石垣は人の度、即ち天人の度なることを會得せんや。

七十四。これよりわれは實地の經驗に進むべし。天人が人間の形式を有すること、即ち人間なることは、わが千回も實地に見たる所なり。われは彼等と相語ること、人間相互の間における如くにて、

或は一人を相手とせることあり、或は數人の集りを相手とせることあり。われは嘗て天人の形態の上より見て人間と異なる所あるを認めざりき。われ時に此事の果して實際なるべきかを怪めり、その或は錯誤、或は妄想的幻象ならんことを恐れ、わが充分に覺醒せるときを以て、天人を見んことを願ひて、而してこれが許を得たり、當時わが肉體の感官は活動して、明瞭なる感覺を受け得べき情態に在りき。われ屢々天人に語りて曰く、基督教國の人々が天人及び精靈に關して少しも知る所あらざるや、彼等を以て形體なき心、又は單に思想に過ぎずと信じ、只何となく精氣のかたまりて、その中に生命を有するもののみ思へり。此の如く是等の人々は精靈及び天人の人間と同じき處は、只思索の能力を有する一事にありとすが故に、彼等は信すらく、精靈及び天人に眼なきが故に見ることなく、耳なきが故に聴くことなく、口及び舌なきが故に語ることなしと。天人これに答へて曰ふ、われらは世に此の如く信するもの多きを知れり、識者の間にも之れあり、而して殊に驚くべきは僧侶中にすら此の如く信するものあること是也と。天人は又何が故に識者の間に此の如き信仰あるかを解きて曰ふ、學者は世を導くべきものなるに、まづ此の如き妄想を抱くに至れるは、天人又は精靈を看するに當り、彼等は外的人間の感官上より來る想念のみを基となしたるに由る、此の如き想念のみを基として、內的光明及び各人の心中に深く銘せられたる普遍的想念を顧みざるものは、勢已むを得ず、上述の如き妄想を構ふるものとす、何となれば外的人間の感官より得たる想念は、自然界の事物を解するに止ま

りて、毫も上天の事に及ぶ能はず、従ひて靈界に關しては何等の知る所あらざればなり。而して是等の先達者が導くがまゝにして、嘗て自己胸中より思慮せざるものは、天人に關する此の如き誤見をも甘受して厭はず。蓋し他人の指導にのみ従ふものは、他人の思想を以て自家の信條となし、後に至りて自家の智力を以て之を點檢せんとするが故に、遂に先入の思想を擺脫するを得ず。大抵は之を肯ひて、之に聽從するを常とせり。天人又曰ふ、純信、直心を有するものは、天人に關して此の如き思想を有せず。彼等は天人を以て天界における人間なりと思惟す。そは彼等は學問上の所得に由りて本來天賦の所得を沒却せざるのみならず、彼等は如何なるものを思惟するにも形態を離るゝを得ざればなり。此の理によりて諸教會内における彫刻及び繪畫の天人は人間の相をなせりと。天人又曰ふ、本來の天賦とは信いのちと徳を具ふるものに流れ入る所の神格しんかくは是れなりと。

七十五。形態上より見て天人は少しも人と異なることなしと云ふは、わが多年にわたれる一切の實驗に徴して、わが今公白、聲明するを憚らざる所なり。即ち天人には顔あり、眼あり、耳あり、軀體あり、腕あり、手あり、足あり、而して彼等は能く視、能く聽き、能く語る。一言にて盡くせば、彼等は人間に屬するすべてのものを有して缺くることなし。但人間と異なる所は、彼等は物質的形骸を以て其身を蔽ふことなきこと、是なり。われ嘗て天人が自己の光明中に現はるゝを見たるに、其煌耀かうやくけるさまは、この世の日午の光に勝ること數度なりき。此光明の中にありて天人の相好を見るに、地上

の人の面を見るよりも分明にして澄徹せるを覺えたり。われ又許されて最奥の天界に住める一天人を見たるに、その相貌の赫奕として燦爛なるは、下層の天界にある諸天人の及ぶ所にあらざりき。われ熱、これを考察したるに、天人の有せる相好は人間の最も圓滿なるものなるを認めき。

七十六。されど此に記すべきは、何人も天人を見るに、肉眼を以てすべからず、内的心靈の眼を以てすべきこと是なり。そは心靈は靈界に屬し、肉體一切のことは、自然界に屬するに由る。同氣相求むるは、固より同じきところあればなり。且皆人の知る如く、肉體の視覺を司される眼根なるものは、頗る粗雜にして、自然界の事物と雖、その至微なるものに至りては、顯微鏡を假らざれば見るを得ず、まして靈界の諸事物の如き、自然界を超絶せるものにおいてをや。靈界の事物を見得せんこせば、肉體的視覺を離れて心靈の眼睛を開かざるべからず。而してこは主、人間をして靈界を見せしめんと思ひ給ふとき直ちに起り來る現象なり。されど此時、人は自ら肉眼を以て是等の事物を見るものとのみ思へり。アブラハム、ロート、マノア、及び諸豫言者が天人を見得たるときは、此くの如かりき、復活の後、諸弟子が主を見たるも亦此くの如かりき、而してわが天人を見たるも亦實に此の如かりき。預言者と呼ばれて「見者」と云ひ、又「眼の開きたる人」と云ふは、その此の如くにして見たるを以てなり。(撒母耳前書、第九章、九。民數紀略、第二十四章、三。) エリシャの下僕にも亦此の如きことありしは、次の言葉にて知らる。曰く、「エリシャ祈りて、願はくばエホバよ、かれの眼を開きて見せさせ給へと

言ひければ、エホバその少者の眼をひらき給へり。彼のち見るに、火の馬と、火の車、山に登ちて、エリシャの四面にあり」と。(歴王紀略下、第六章、一七。)

七十七。われ此事を、さる心正しき精霊と物語りたるに彼等は教會内のものにして、天界の性質、天人、及び精霊に關して此の如く無識なるを悲み、乃ち慨然として、われに托して、世の人に言はして曰はく、「天人と精霊とは、形なき心にもあらず、又呼吸の氣にもあらず、彼等は其形態においては人間なり、而して能く視、能く聴き、能く感ずること、世上の人に異ならず」と。

○天界の全般ごその各分體を擧げて一個人に類するは主は神的人格なるが故なること。

七十八。天界が其全般ご各分ごとに涉りて、皆一個人に類するは、主の神的人格に因ると云ふことは、上來述べたる所より結論し得らるべし。即ち第一、主は天界の神なること、第二、天界は主の神格より成ること、第三、天界は無數の團體より成りて、各團は一小天界、各天人は至小の天界なること、第四、天界の全般を擧げて一個人に相似たること、第五、天界の各團は亦一個人に相似たること、第六、故に各天人は圓滿なる人間の形態を有すること、而して是等の諸命題より來るべき結論は、「天界は神格によりて成るが故に、神格はその形態において人間なり」と云ふに在るべし。此神格とは即ち主

の神的人格なることは、「天國密意」よりの摘要を見れば、益々明なるべきにより、われは是等の要點を列擧して此章の餘論になしおけり。(今略之。)主の人格は神格なること、而して教會内に行はるる信仰、即ち主の人格は神格ならずと云ふは謬見なることを明かに會せんとせば、「天國密意」よりの摘要、及び「新エルサレムとその天道説」中、主を説ける章の終りに臨んで言へる所を參考すべし。

七十九。わが所言の眞實なることは、わが多くの實驗にて分明なれば、今此にその一分を述べし。神格を認めて人間的形態以外のものとなす天人は、天界何れの處に往くも見得べからず。而して特に注目すべき事實は、天界の上層に在る天人は、神格を以て此の如くならずと思惟せんと欲するも得ざること、是なり。こは彼等の裏に流れ入る神格そのものゝ所爲にして、又天界の形式自ら然るに由るものとす。此天界の形式なるものは、天人がその想念を四邊に延長せんとするとき、遵守せざるを得ざる所なり。何となれば天人が有する一切の想念は天界にわたりて延長し、彼等の智慧と證覺とは此延長に比例すればなり。かくて天界には主を除きて神的人格となすべきものあらざるが故に、主は天界到る處に是認せられずと云ふことなし。是等の事は諸天人のわがために語れる所なるのみならず、わが親しく天界の内院に昇り得たるとき、之を看るを許されたる所なり。是によりて、天人の證覺益々高くして、是事を徹見すること愈々深きの道理を明むべし。又主が天人のためにその身を現じ給ふ旨をも悟るべし。そは主の神格の可見なるを認め、且つ之を信するものゝ前に現はし給ふ主の形態は

一個神的天人の相好、即ち人格なればなり。されどこは神格を以て見るべからずとなすものゝ知らざる所なり、蓋し甲はその神を見得べけれども、乙は見得ざるに由る。

八十。天人は見るべからざる神格を以て、形なき神格となし、之を見得することなければども、その見るべき神格に至りては、彼等その人間的形態なるを認む、故に彼等常に云ふ、主のみ是れ人にして、彼等の人たるは主によれり、又何人も主を攝受する限り一個の人なりと。主を攝受するとは、主よりする善と真とを攝受する義なりと、天人は云ふ、そは主は自有の善と真とに住すればなり。天人は亦之を呼びて證覺と智恵となす、而して云ふ、人の人たるは智恵と證覺とに在りて、之を缺ける人間の面貌にあらざるは、皆人の知る所なりと。此真理は内界の天上に在る天人を見て明かなり、彼等は主より來る善と真とに住し、従ひて證覺と智恵とに居るが故に、彼等が有せる人間の相好は、美を極め、圓滿を極めり、然るに下層の天界に在る天人の形態は此く如く美ならず、又圓滿ならず。之に反して地獄に在るものを、天界の光明に照して見るときは、殆んど人間の相貌を有せず、彼等は一種の妖怪なり、其故如何と云ふに、彼等は善と真とにをらずして、罪惡と虚偽とにをり、隨ひて智恵と證覺との正反對にをればなり。是を以て地獄界における生涯を生命とは云はず、之を靈的死と云ふ。

八十一。天界は、その全般と各分體とに涉りて、主の神的人格よりせざるはなく、此の如くにして一個人に相似するが故に、天人は自ら主にをれりと曰ふ。或は主の身のうちにをれりと云ふもあり、

即ち彼等は主の愛の徳に在るとの義なり。主自らも亦次の言によりて此義を誨へて曰ふ、「なんぢらわれにをれ、さらばわれ爾曹にをらん。枝もし葡萄樹に連らざれば自ら實を結ぶことなし。爾曹もわれに居らざれば、亦此の如くならん。そは爾曹われを離るるときは、何事をも行ふ能はざればなり。爾曹わが愛にをれ、もし爾曹わが誠を守らば、なんぢらは我愛に在るべし」と。(約翰傳、第十五章、四より一〇。)

八十二。天界には、神格に關して如上の見解を存するにより、何人と雖、天界より内流を受くるものは、神を以て人間的形態を有すと思惟せざるはあらず。古の人はしかく思惟せり今の人も亦、教會の内外を問はず、しかく思惟す。心の直ぐなるものが胸中に見る所の神は、光明に包まれたる太古の人なれども、自得底の智恵及び罪惡の生涯にて天界よりの内流を截斷したるものは、此の如き本然の所證を滅却し了せり。かく自得底の智恵にて此所證を滅却せるものは、見るべからざる神を希求し、而して罪惡の生涯にて之を滅却せるものは、常に神を希求せず。兩者共に本來の所證あることを知らざるに至りては一也。そは彼等は夙に之を滅却したればなり。されど天界よりしてまづ人間に流れ入る所の天界的神格そのものは、實に此本來の所證に外ならず、何となれば人の生れたるは天界のためにして、而して何人も神格の概念なくして、天界に入ることなければなり。

八十三。されば天界の何たるを知らざるもの、即ち天界を成す所の神格の何たるを知らざるものは、

天界の第一關に昇るを得ず。此人もし天界に近づかんとすれば一種の反抗力と、強き嫌惡の情を感ずべし。そは天界を攝受すべき彼の内分、未だ天界の形式中に入らざるを以て、尙ほ閉鎖せらるゝによる也。もし強ひて天界に進み入らんとすれば、其内分は益々固く鎖されて如何ともすべからざるに至らん。教會内にありて主を否むもの、及びソシニア人の如く、主の神格を肯はざるものには、此の如き命運あり。かの教會の外に生れて、聖言を有せざるが故に、主を知らざるものゝ命運に至りては、別に説く所あり。

八十四。古代の人が^{神的存在}を以て人間的なりと思へることは、アブラハム、ロート、ヨシヤ、ギデラン、マノア、及びマノアの妻などに現はれたる神の相貌を見て、之を明にすべし。彼等はかく一個人として神を見たれども、彼等は尙之を崇めて、宇宙の神となし、之を呼びて、天地の神及びエホバと云へり。主のその身をアブラハムに現はし給へることは、主自ら之を約翰傳に教へ給ふ（第七章、五〇）。又アブラハム以外のものにも現はれ給へることは、主の次の言葉にて明かなり、曰く、「たれも未だ父を見たるものあらず、また未だその聲をきかず、また其形を見ず」と。（約翰傳、第一章、一八、第五章、三七。）

八十五。されど神を以て人なりとなすことは、何事をも外的人間の感覺より來れる想念にて判決せんとする人々の了解に苦しむ所とす。そは感覺上のみの人は神格に關することすら世間、及び世間的

事物より推すにあらざれば思索する能はざればなり、故に彼は^{神的、靈的}の人格をも肉的、自然的のものと思惟する外なく、從ひて彼は結論すらく、神もし一個の人ならば、その大さ宇宙と等しかるべく、又彼もし天地を統御すせば、世上の帝王の如く多數の官人を用ゆるならん。かくの如き人天界には世間における如き空間的延長なしと告ぐることも、彼は會得せざるべし。何となれば自然界及びその光明のみよりて思惟するものは、その眼の前に認むる如き延長を除きて、その外を考へ得ざればなり。されど天界も亦此の如しと云ふに至りては誤りも亦甚しとなすべし。天界の延長は世間の延長と同じからず、世間の延長には限定あるが故に、之を測度し得べけれども、天界の延長には限定なきが故に之を測度するを得ず。されどこの事につきては後段靈界における時間と空間とを説くに當り、之を詳説すべし。

又われらの眼界は如何ばかり遠きに達し、極めて遠距離なる太陽、星辰をすら見得べしと云ふことは、何人も能く知る所なり。又今少しく深く考ふるものは、内分の視力、即ち想界の視力は尙これよりも遠方に達し、更に内邊の視力に至りてはその限界更に遠大ならざるべからざるを知れり。果して然らんには何物かよく^{神的視力の限界外に出づるを得るとせんや}。神的視力は實に一切視力の最も內的にして、最も高上なるもの也。想念に此の如き延長の力あるが故に、天界一切の事物は、此處に住めるものゝ總てに傳はらずと云ふことなし、天界を成就し、天界に遍滿せる神格より起るものも、す

べて亦此の如くならずと云ふことなし、そは既に前章に説ける所の如し。

八十六。人々神のことを考ふるに、神を以て見るべからざるもの、即ち如何なる形態によりても思議すべからざるものとすることを以て、自ら智あるものと信じ、然か思議せざるものを以て無智、魯直なりとなし、その實際は正に之と相反するを知らず、故に天界に住めるものは、之を怪みて措かざる也。彼等曰く、此の如く自ら智恵ありと思へるものをして自ら問ふて曰はしめよ、「わが見る所は神にあらずして、自然界なるにはあらざるか」と、或は只眼前に現然たる自然界を見るもあるべし、或はその隠れて見るべからざる處を認むるもあるべし、されど彼等は果して神の何たり、天人、精靈、死後尙生くと云ふ自己の靈魂の何たり、及び人の衷にある天界の生涯の何たるを知れるか、又其他數多の智恵上の諸問題を解し得るとせんか、彼等試みに自ら問ひて見よ。然るにかの彼等が魯直と呼びなせるものは、是等の事物につきて皆それ／＼自家の見解を有しをれり、却ち彼れらは神は人間の形態を有せる神格なること、天人は天界にすめる人間なること、死後尙生くと云ふ自己の靈魂は、猶ほ天人の如きものなること、人のうちにある天界の生涯とは、神の誠に従ひて生息することを知悉せる也。故に天人は是等の人々を智ありとなし、天界に入るべき資格あるものとなし、かの然らずして自ら智ありと信せるものは、天人之を無智なりと云ふ。

○天界一切の事物と人間一切の事物との間に一種の相應あること。

八十七。今時の人は相應の何たるを知らず。此無知の原因に種々あれども、その重なるものは「我」と世間とに執着して、自ら天界より遠ざかれるに由る。何事をもさしおきて「我」と世間とを愛するものは、只外的感覺を喜ばし、自家の所欲を遂げしむる所の世間的物事のみ留意して、嘗てその外を顧みず、即ち内的感覺を樂しまし、心靈を喜ばしむる所の靈的事物に至りては、彼等の關心せざる所なり、彼等が之を斥くる口實に曰く、靈的事物は高きに過ぎて思想の對境となる能はずと。されど古の人は之に反して相應に關する知識を以て一切知識中の最も重要なものとなし、之によりて亦智恵と證覺とを獲たり、而して教會中のものは之に由りて天界と交通の途を開きたり。蓋し相應の理を知得するは天人の知識を獲る也。天的人間なりし太古の人民は相應の理そのものに基づきて思索せること、猶ほ天人の如くなりき。是をもて彼等は天人と相語るを得、主をも屢、見るを得て、その教を受けたりに、今時に至りては此知識全く絶えて、相應の何たるを知るもの絶えてあらず。

八十八。相應の何たるかを知らずしては、靈界につきて明白なる知識を有するを得ず。此く無知なるものは又靈界より自然界にする内流の何たるを知る能はず、又靈的事物の自然的物事に對する關係をすら知る能はず、又靈魂と稱する人間の心靈、その身體に及ばず活動、及び死後における人の情態

に關して毫も明白なる思想を有する能はず。故に今何をか相應と云ひ、如何なるものを相應となすかを説き示す必要あり。これによりて後來述べむとする所のために端緒を開き得べし。

八十九。さればまづ相應とは何の義かを説くべし。全自然界は、之を總體の上より見ても、分體の上より見ても、悉く靈界と相應あり、故に何事たりとも、自然界にありて、其存在の源泉を靈界に取るものは、之を名づけてその相應者と云ふ。而してわれらは自然界の存在し、永續する所以は靈界に由ること、猶ほ結果が有力因に由りて存するが如きを知らんを要す。自然界とは太陽の下に在りて、之より熱と光を受くる一切の事物を云ふものなるが故に、これによりてその存在を繼續するものは一として自然界に屬せずと云ふことなし。されど靈界とは天界のことなり、靈界に屬するものは皆天界に在るものとす。

九十。人間は一小天界にして又一小世界なり、而して共に其至大なるものと形式を摸して成れるが故に、(上を見よ、五七、)人のうちには自然界あり、又靈界ありと謂ふべし。その心性に屬して、智と意とに關せる内分は靈界を作り、その肉體に屬して感覺と動作とに關せる外分は自然界を作す。故に彼が自然界にあるもの、即ち彼の肉體、及びその感覺と動作とに屬するものにして、その存在の源泉を彼が靈界に有するときは、即ち彼が心性、及びその智力と意力とより起り來るときは、之を名づけて相應者と云ふ。

九十一。相應の如何なるものなるかを知らんと欲せば、人の面を見るべし。未だ偽りを装ふことを學ばざる面には、その心のうちに起る情動、本來の典型に従ひて、悉く自らselfに現はれすと云ふことなし。此の如き面を稱してその心の索引なりと謂ふ。かくして人の靈界はその自然界に現はれるはあらず、彼が智性に屬する諸想念は、その言語に現はれ、彼が意性に屬する所決は、その身の舉動に見るべし。故に人の身體にて爲さるるものは、或はその面に現はれ、或はその言語に發し、或はその舉動に見ゆることを問はず、皆相應者なりとす。

九十二。是等の觀察によりて、何を内人となし、何を外人となすかを明め得べし、内的とは靈の人にして、外的とは自然の人を謂ふ、兩者の相違は猶ほ天界と世間との相違の如し。外人、即ち自然の人が爲す所、及びそのうちに在るものは、すべて内人、即ち靈の人に由るものと知るべし。

九十三。内人、即ち靈の人と、外人、即ち自然の人との間に存する相應につきて言ふ所は此に止め、これより全天界と人間の各分體とにおける相應を述べし。

九十四。全天界は一個人に類すること、天界は人間の形態を具ふること、故に之を呼びて巨人となすことは、既に之を明め得たり。又天界をなせる天人の諸團體は、人身における肢體、機關、及び内臓の如くに安排せらるるが故に、或る團體は頭に當り、或るは胸に當り、或るは腕に當り、或るは又是等肢體の各局部に當れりと云ふことも既に明めたる所なり。(五九より七二)故に天界において、

某の肢體に當る團體は、人身における同一の局處に相應せるを知るべし、例へば頭部に當れる團體は人身の頭部に相應し、胸部に當れるものは人身の胸部に相應し、双腕に當れるものは双腕に相應す、其外の部分におけるも亦然り。而して人がその存在を永續し得る所以は相應に由るものとす、そは人は天界以外に出でず、その繼在の源泉を求むる能はざればなり。

九十五。天界を分ちて二となして、その一を天國と云ひ、他を靈國と云ふことは、既に別章において之を記せり。概して言へば、天國は心臓、及び全身にて心臓に屬すべき一切のものと相應し、靈國は肺臓、及び全身にて肺臓に屬すべき一切のものと相應す。實に心臓と肺臓とは人における二國土なり。心臓は靜動二脈に由り、肺臓は神經と運動纖維とによりて、人身中に主治者となり、力の發する處、動作ある處、必ず兩者の協力を認む。各人のうち、即ちかれの靈的人格をなせる靈界のうちにも、亦二國土ありて、一を意と云ひ、他を智と云ふ。意は善に對する情動により、智は眞に對する情動によりて統治す。是等の二國土は亦肉體中の肺臓と心臓との二國土と相應せり。天界においても亦此の如き相應あり。天國は天界の意力にして愛の徳此に統御し、靈國は天界の智力にして、眞此に統御す。人における心臓と肺臓との官能に相應せりとなすべし。聖言の中に心臓を以て意を示し、亦愛の徳を示し、肺臓の呼吸を以て智、及び信の眞を示すは、此相應によりてなり。又情動は心臓中にもあらず、心臓よりも來らざれど、之を心臓に歸するは、之がためなり。

九十六。天界の二國土と心臓及び肺臓との相應は、天界と人間との間に於ける一般的相應也。而して人身の各肢體、各機關、各内臓に對しては、かく一般的ならざる相應あり、以下之を述ぶべし。巨人、即ち天界の頭部に在るものは、愛、平和、無垢、證覺、智惠の中に在り、從ひて歡喜と幸福とに住するを以て、天界到る處、その善徳に比すべきものあらず。是もの人の頭部、及び頭部に屬すべき一切のものに流れ入りて、之と相應す。巨人、即ち天界における胸部に在るものは、仁と信との善徳中に住して、人の胸部に流れ入り、之と相應す。巨人、即ち天界において腰部、及び生殖機能を司ぐれる部分は夫婦の愛に住し、脚部にあるものは、天界最劣の徳、即ち自然的—靈的善徳の中に住せり。腕と手に在るものは、善徳中より出で來る眞理の力に住し、眼に在るものは、智に住し、耳に在るものは、注意と從順とに住し、鼻孔に在るものは知覺に住せり。口と舌とに在るものは、智性と知覺とより出づる言語の中に住し、内腎に在るものは、検査し、分析し、訂正する所の諸眞理に住し、肝臓、脾臓、肺臓にあるものは、善と眞とを種々に洗鍊するに長するなど、以下次を逐ひて知るべし。是等は何れも人體中の相似せる各局部に流れ入りて之と相應す。天界よりの内流は諸肢體の働き及び用のうちに入り、而してこの靈界より出でたる用は、自然界にある如き事物を假り來りて、此にその形態を托し、以て具象的結果を現するが故に、是に於てか相應なるものあり。

九十七。是の故に聖言のうちに肢體、機關、内臓のことを言へるときは、上述の意義を有せるもの

なるを知るべし、聖言中一切の事物は此相應の理によりて、始めて深義あるものとす。即ち頭部は智恵と正覺とを意義し、胸部は仁、腰部は夫妻の愛、腕と手とは眞の力、足は自然的に屬すること、眼は智性、鼻孔は知覺、耳は從順、腎臟は眞を洗鍊する所以を意義せり、以下準之。又是理によりて、平生談話の際にも、智あり、覺あるものと呼びて、彼は頭をもてりと云ひ、仁に厚きものと呼びて、彼は胸の友なりと云ひ、知覺に勝れる人と呼びて、彼は鋭敏なる嗅覺を有せりと云ひ、智慮に秀でたるものと呼びて、彼が視覺は鋭しと云ひ、強力ある人と呼びて、彼が手は長しと云ひ、愛の心を基として、所志を決するものと呼びて、彼の行動は心臓より出づと云ふ。人間の言葉に是の如き諺、尙この外に數多あるは相應の理に基づきて、其實は靈界よりの言句なることは、人の未だ自覺せざる所なりとす。

九十八。天界の萬物と人身との間に、此の如き相應あることは、わがいくたびとなく實見するを許されたる處にて、われは實にこれを以て、自明の事實、毫も疑を容るべき餘地なきものと思ふほどなり。されど此の實見を一々こゝに列舉せん必要はあらず、餘りに多きに過ぐるを以て、その便よからず。「天道密意」中、相應、表像、靈界より自然界への内流、及び靈魂と身體との交通を説ける處につきて、之を見るべし。

九十九。人間一切の事物は、かくその肉體の上より見て、天界一切の事物に相應すれども、人間が

天界の影像なることは、その内相にありて、その外相にあらず。そは天界を攝受するものは、人の内分にして、その外分は世界を攝受するに過ぎざればなり。故に人は、その内分に天界を攝受する限り、その點においては至大者の影像をうつせる至小の一天界なりと謂ふべし。されど彼が内分にして天界を攝受することなくば、彼は自ら天界たるを得ず、又至大者の影像を現するを得ず。さはいへ、世間を攝受すと云ふ彼の外分にして、その形式もし世間の順序に従ひをらば、その美を成すにおいて妨げざるべし。何となればこの外面の美は身體に屬するものにして、之を兩親に享け、胎内にて成育したる後、世間に出で、これよりする一般的内流の護持する所なればなり。故に人の自然に得たる相貌は、その靈的人格のに比して甚だその趣を異にするを常とす。われは折にふれて人の心靈は如何なる相貌を有せるものなるかを見得たることありき。或るものはその面貌こそ白くして美なりけれ、その心靈は形缺け、色暗くして、怪妖の如く、之を呼びて地獄の相好と云ふべく、天界の面影は嘗て之れあらざりき。されど或るものは、其外面の美において缺くる所ありしも、その心靈に至りては、相好全く、色白くして、天人の如くなりき。而して死後における人間の心靈は、亦尙世間にて體中にありたるよきの如き相貌を有するものとす。

百。されど此相應の事實は人間界以外のことにも及べるものにて、即ち諸天界相互の間にも相應あり。第二、即ち中間の天界は、第三、即ち最奥の天界に相應し、第一、即ち最下の天界は、第二、即

ち中間の天界に相應し、第一、即ち最下の天界は、又人體の諸部をなせる肢體、機關、及び内臓に相應せり。かくの如くにして、人の肉體は天界の最終點なり、又その基礎にして、天界は此上に立つものとす。されど此密意は尙他處にて詳説すべし。

百一。されど此に深く注意すべきは、天界との諸相應は主の神的人格との相應なること是なり。それは前數章に示せる如く、天界の存在は主に依り、主即ち天界なるに由る。もし神的人格の天界萬物に流れ入ることなく、又諸々の相應によりて、世間一切の事物にも流れ入ることなくば、天人あることなく、人間あることなかるべし。故に知るべし、主は何が故に人となり給ひ、又彼の神格を始めより終りに至るまで人格の中に寓し給ひたるかを。何となれば主の來り給へる以前に天界を保持したる神的人格は、天界の基點となれる人間が傾覆して、順序を破壊したるがために、まだ萬物を擔荷し得ざるに至りたれば也。主の來り給へる以前に存在したる神的人格の何なりしか、其特相は如何なりしか、又當時の情況は如何なりしかの疑問は、前章附録の摘要中に解説しおけり。(今省之。)

百二。天人は、世に萬事を自然界の作用に歸して、神格を以て毫もこれに預ることなしと思ひ、又その體中に天界の諸の不思議を集めをれるをも自然界の作爲なりと信する人ありと聞き、驚く一方ならず。その人々の理性も亦自然界より來ると信せらるるに至りては、天人の驚き、更に一層を加ふ。されど人も少しく其心を開きたにせば、是等の事物は神格より來りて、自然界よりせざるを明

め得べき也。又自然は只靈的なるものを包まんため、相應の形式によりて、順序の最終點に現出するものなることを明得べき也。天人は上述の如き人々を鼻に譬ふ。そは彼等は明るきに見ずして、暗きに見れば也。

○天界と地上一切の事物との間に相應あること。

百三。相應とは如何なるものなるかは前章に述べたり。又動物體中の諸事物は一として相應者ならざるなきことを既に述べたり。今此序を逐ひて地上の萬物、及び、概言して、宇宙の萬物も亦相應者なることを述べし。

百四。地上の萬物を三大別して、之を三界と名づく、動物界、植物界、礦物界、是なり。動物界に屬するものは第一位の相應者なり、生あるが故に。植物界に屬するものは第二位の相應者なり、只成育するのみなるが故に。礦物界に屬するものは第三位の相應者なり、生なく、又成育なきが故に。動物界の相應者とは地上を歩むもの、匍ふもの、空中に翔けるもの、即ち諸種の生物なり。今一々其名を挙げざるも、人皆之を知るべし。植物界の相應者とは庭園、森林、田畠、及び草原に成育し、繁茂する一切のものを云ふ、是れ亦人の能く知る所なれば、一々その名を挙げず。礦物界の相應者とは、貴金屬と非貴金屬、寶石と頑石、諸種の土砂、及び水を云ふ。この外、人間の技巧によりて、地上の三

界より作り出され、人間の用を辨する相應者あり、諸種の食物、衣服、家屋、公共の建築物、及び其
他種々の物件是なり。

百五。日、月、星辰の如き、地を離れたるもの、及び雲、霧、雨、電、雷の如き空気中にあるもの
も亦相應者なり。又太陽及び其存否によりて生じ来る現象、即ち明暗、寒暑の如きも、同じく相應者
なり。又太陽に依りて交替的に生ずるもの、即ち春夏秋冬と云ふ如き年中の季節、朝、午、夕、夜と
云ふ如き一日中の時期も亦皆然りとす。

百六。概して言へば、自然界に存在するものは、その至大なるものより、至小なるものに至るまで、
相應者ならずと云ふことなし。その然る所以は、自然界、及びそが中に在る一切のものは、靈界に依り
て存在し、恒存し、而して靈界と自然界とは共に神格に依りて存在し、恒存すれば也。わがこゝに存
在し、恒存すと云ふは、凡そ物の恒存するは、まづこれに存在を附與したるものあるがためにして、
恒存とは存在の永續不斷なるを云ふ。而して何ものも自らによりて恒存するはあらず、必ずや之が
先きに存在したる一物、即ち畢竟する處は、元始によりて然るものとす。而してかの物も此より離
るるときは、死却して、遂に全く滅絶すべし。

百七。神^の的^の順序^のに従ひて、自然界に存在し、恒存するものは、すべて相應者ならずと云ふことなし。
而してこの神^の的^の順序^のをなすものは、主より起り来る神善なり。此順序はまづ主より始まり、主より進

み出で、諸天界に行きわたり、それより次第に世間に入り来り、此にて終極點に止まる、而して此
の終極點にあり、順序に従ひて存在するものは、即ち相應者なり。此順序に従ふものとは、善を具へ
て、用を遂ぐるに適するものと謂ひなり。蓋し善の善たる所以は、善くその用を遂ぐるに在りて、そ
の形式は眞と相依り、そは善は眞の形式なれば也。故に全世界にある一切のものは、世間の性を帶
びて、且つ神的順序に従ふを以て、善と眞とに關係せざるはあらず。

百八。世間一切の事物は、神格に依りて存在すること、而してその自然界にあるや、當さに然るべく
して、且つ用を遂ぐるに足るべき形式、即ち従ひて相應の理に稱へる形式に頼りて存在することは、
動物界、植物界にて觀察せらるる諸事實に見て明かなり。苟も内に思慮あるものは、是等兩界におけ
る事實を見て、その天界よりせることを見得べし。今之を例證せんため、無數の事實より二三を擧ぐ
べし。まづ動物界より始めむ。

各動物に本來植^え付けられたりとも云ふべき知識ありて、その驚くべきものなることは、一般に人
の知る所なり。蜜蜂は如何にして花より蜜をあつめ、蠟にて作りたる巢に之を貯へ、來らん冬に自ら
とそ一族のために食物を供給すべきを知れり。而して女王蜂は卵を産みて、残りの蜂は之を護り、
之を被^{おほ}ひて、新種族の生れ来るを待つ。又彼等は生れながらにして一種の政體を組織するを知りて、
その下に生息し、有用なるものは之を保存すれども、その無用なるものに至りては、之が翼を奪ひ去

る。その外、尙用を成就せんがため、天界より彼等のうちに植ゑつけられたる不思議の事多し。即ち蜜蜂の蠟は、人類のために蠟燭を作るの材料となり、其蜜は食物に甘味を添うるの効あるが如き是なり。動物界の最下層に在る螟蛉に見る所の不思議に至りては實に大なるものあり。即ち彼等は自己の性に適せる葉液をとりて自ら養ふことを知り、又その時節來るに及べば、自ら一種の被布を作りて之を蒙り、此に居ること、胎内にある如し、これ自家の同族を孚化せんがためなり。又或る昆虫は先づ蛹虫となりて、糸を繰り出し、此仕事終るや、以前に異なる形體をなして出で來る、即ち翼ありて空中をとぶこと、天界に在りしときの如し。而して彼等は又交尾して、卵を産し、自家の兒孫を繁殖するを知れり。

是等特種の實例以外に在りても、空中を飛翔する動物は概して自ら適當の食物の何たるかを知れり、嘗に之を知るのみならず、何處に之を發見すべきかを知れり。彼等は又如何にして其巢を作るべきかを知るが上に、之を作るに各自の特色を具へをれり。彼等は此巢の中に其卵を産み、之を抱き暖めて、其子を孚化し、養育し、その自ら養ふの法を知るに及びて、之を母巢より逐ひ出す。彼等は又如何なるものを敵として、之を避くべく、如何なるものを友として、之と親しむべきかを知るのみならず、之を知ること既に已にその最少時においてす。尙此に更に不思議とすべきはその卵の中に雛鳥を形成し、養育すべき一切の事物、既に具はりをること、及び今悉く之を言はざれど、此外無數のこと、是

なり。苟も合理的證覺を基として考ふるもの、誰か這般の現象を以て、靈界ならざる源泉より來るべしと言はんや。自然界と云ふは靈界よりする事物に形體を具へしむること、即ちその原因において靈的なるものを、結果として此に現出せしむるに過ぎず。地上の動物、空中の鳥類が、此の如き本來の知識を具へるに拘はらず、何が故に彼等よりも優れたる人類が之を具へざるかと尋ぬるに、そは動物は當然の順序に従ひて、其生を營むが上に、彼等は理性的なるものを有せざるを以て、靈界よりして彼等のうちに具はれる所のものを壞つことなければなり。されど人類は之と異なりて、その思索は靈界に通ずるものなれど、人理のみ重んじて、天理當然の順序に背ける生涯を營みたるにより、其始め靈界よりして彼等のうちに具はれる所のものを僻めたり、かるが故に人間は必然の勢として其生るるや、更に知る所なく、後來神的方便によりて始めて天界の順序に歸復することとなれり。

百九。如何にして植物界に相應あるかは、多くの實例によりて見るを得べし、即ち小さき種子より生じて木となり、葉を生じ、花を開き、而る後實を結び、此中に未來の種子を藏するを見よ。又此次第年々變ることなく、一定の順序を守りて誤らざること嘆賞に餘りあり、到底僅少の文字にて之を記述すべからず、之がためには實に數多の著述をなすとも、尙內的密意の存するあるべく、その深く究竟の用に關するものに至りては、科學と雖、その蘊奥をつくし得ざる也。而して是等の事物は、一切靈界、即ち天界より來るものにて、その天界は、さきに言へる如く、人間の形式をとれるものなるが

故に、植物界のことは、既に一部の學者の知る如く、亦人間の事物に關係を有せり。植物界における一切のものが相應者なることは、わが多くの經驗によりて、疾く知る所なり。何となればわれは屢々庭に出で草木、菓實、花、及び野菜類をながめ居たるとき、天界における諸々の相應者を此間に認めればなり、而してわれは是等の相應に居るものと親しく相語らひ、その根源及び性質につきて教を受けたることありき。

百十。されど世間自然の事物が相應すると云ふ天界における靈的事物を知らんことは、天よりの默示を受くるにあらざれば、今日の人の能くせざる所なり。そは相應の知識今全く失せ去りたればなり。されどわれ今此に數例をあげて、自然的事物と靈的事物との間にある相應とは如何なるものなるかを説き示すべし。

地上の動物は一般に情動に相應す、畜ひ馴れて有用の動物は情動のよきもの、猛くして無用の動物は情動の不善なるものに相應す。即ち個々に言へば、劊牛及び犢牛は自然的心の情動に相應し、綿羊及び小羊は靈的心の情動に相應す。而して有翼の生物は、その種類に従ひて、靈的及び自然的兩心の智性の方面に相應するものとす。イズラエル人の教會に劊牛、犢牛、牡羊、綿羊、雌雄の山羊、及び小羊、鳩、斑鳩の如き種々の生物を神の用に供へたるは之がためなり。何となればかの教會は表像的教會なりしを以て、是等の動物を犠牲に供し、又燔祭の供物となせり。是等の動物は此の如き用に供

せられて、其靈的事物と相應する所以を全うし、而して天界に在りては、皆何れも相應の理によりて此義を解せり。動物はまた活けるものなるが故に、その部族、種類によりて、情動なり。彼等各自の生涯は情動以外の源泉より來ることなく、實に之に依るものなるが故に、各動物は又その生活の情動に依りて、それ／＼本來の知識を具有せり。人間は、その自然的人格の方面より見て、亦一種の動物なるを以て、俗には之を動物に比較することあり、即ち柔和なる人は之を呼びて綿羊又は小羊と云ひ、猛きものは之を熊又は狼と云ひ、狡猾なるものは之を狐又は蛇と云ふが如し。

百十一。植物界においても亦此の如き相應あり。即ち概して言へば、庭園は、智恵と證覺とより見たる天界に相應す、かの天界を呼びて神の庭園と云ひ、又樂園と云ひ、又人間より之を見て、天の樂園と云ふが如きは是の故なり。樹木は、其種類によりて、善と眞との知覺及び知識に相應するが故に、(智恵と證覺とは此知覺及び知識より來る、)相應の理をよく知れる古の人は、森の中にて禮拜の聖式を行ひたり。又聖言中に屢々樹木のことを説きて、天界、教會、人間を葡萄樹、橄欖樹、松柏などの木に譬へ、その善業を果實に譬ふるは、これがためなり。是等より取れる食物、殊に田野の穀類より取れる食物は、善と眞との情動に相應せり、そは是等の食物が靈的生命を養ふこと、猶ほ地上の食物が自然的生命を養ふが如くなれば也。故に一般に言へば、パンは一切の善に對する情動に相應すとなすべし。パンは生命を支ふること他の食物に優り、又パンと云へば一切の食物を含めばなり。此相應

の故に、主は自ら呼びて生命のパンなりと云ひ給ひ、又同一の理によりて、イズラエル人の教會はパンを神用に供したり。即ち彼等は之を天幕内の机の上に置きて「供へのパン」と云ひ、亦犠牲及び燔祭を以て執り行ふ一切の禮拜式をもパンと呼びき。この相應の理によりて、基督教會中における最も神聖なる禮拜式を聖餐となし、此時人はパンと葡萄酒とを用ゆる也。以上二三の例證によりて相應の何たるかを明むべし。

百十二。如何にして天界と世間との和合が、諸相應によりて出來得るかを今短かく説くべし。

主の國土は目的の國土なり、目的とは用なり。即ち主の國土を用ひて國土と云ふも亦可なり、用是れ目的なり。故に神格の始め宇宙を創造し、形成するや、始めは天界において、次ぎは世界において、到る處、動作の上、即ち結果の上に用を發揮せんとせり。種々の度を経、次第を逐ひて自然界の終極點にまでも至らざれば已まず。故に知るべし、自然的物と靈的事物、即ち世間と天界との相應は用によりて成就することを、即ち兩者を和合せしむるものは用なり、而して此用を中に收むるものは形態なり、此形態を相應となす、即ち和合の媒介なり。されど此形態にして用と没交渉なるときは、此の如きことあらずと知るべし。自然界に在りて、その三重の國土中、順序に従ひて存在するものは、すべて、用を收めたる形態なり、即ち、用のため、用によりて作られたる結果なり。故に此の如き自然界中の諸物は相應者なり。されど人間に在りては、神の法則に従ひて生活する限り、即ち主に對して愛、

隣人に對して仁ある限り、彼の行動は以て用の形態に現はれたるものとなすべし。由りて以て天界と和合する所の相應なりとなすべし。主と隣人とを愛するは、概して言へば、用を遂ぐることなり。而して尙此に知らざるべからざることは、人間は自然界を靈界に和合せしむる方便、即ち和合の媒介者なること、是なり、こは人間には自然界と靈界との二つ具はりを由る。(五七を見よ。)即ち人間は、その靈的なることにおいて、和合の媒介者となれども、もし然らずして、自然的となれば、此事あることなし。さはいへ、神格の内流は、人間の媒介をへずして、絶えず世間に流れ入り、亦人間内の世間的物にも流れ入る、但その理性的には入らずと知るべし。

百十三。神の法則に従へるものは悉く天界に相應すれども、然らざるものは皆地獄と相應す。天界に相應するものは皆善と眞とに關係あれども、地獄界と相應するものは罪惡と偽りとに交渉せずと云ふことなし。

百十四。今少しく諸相應の知識と、その知識の用とに就きて説くべし。

さきに、靈界なる天界は諸々の相應により自然界と和合す、故に人は諸相應によりて天界と交通すと云へり。そは在天の天人は、人間の如く、自然的物によりて思索せざればなり。故に人間もし諸相應の知識に住するときは、その心の上にある思想より見て、彼は天人と相伍すとなすべし、即ち彼はかくしてその靈的、内的人格において天人と和合せりとなすべし。聖言なるものは、天と人との間

に和合あらんがため、全然相應によりて書されたるもの也、蓋し聖言中一切の事物は、總體の上にても、個々の上にて、相應ならずと云ふことなければ也。故に人もし諸相應の知識に住せんには、聖言における靈的意義を読み得べく、從ひて文字の上だけにては見るべからざる密意をも知り得るに至らむ。そは聖言の中には如字的意義あり、又靈的意義あれば也。如字的意義は在世間の諸事物より成るに過ぎざれど、靈的意義は在天の諸事物より成るものにして、而して天界と世間との和合は相應に依るが故に、此に聖言なるものあり、この聖言はその一字一劃に至るまで相應ならざるはなし。

百十五。地上における最太古の人は、天的人間にして、相應そのものに由りて思索し、彼等の眼前に横はれる世間の自然的な事物は、彼等が此の如き思索をなす方便に過ぎざりしと云ふことは、わが天界より學び得たる所也。又彼等既に此の如くなりしにより、天人と相交り、天人と相語ふを得て、天界と世間との和合は彼等を通じて成れりと云ふ。故にその時代を黄金時代と呼べり。そは又古來史家の説く所なり、曰く、天界の住民は人間と共に居れり、而して人間と交はること朋侶の如くなりきと。されど此時代を繼げるものは、相應そのものより思索せずして、相應の知識よりせり、當時尙天と人との和合ありたれど、以前の如くには親密ならざりき。此時代を白銀時代と云ふ。此白銀時代を繼げるものは、相應を知らざるにあらざれど、其思索は相應の知識によらざりき。彼等がをれる善徳は自然的のものにして、前時代の人の如く、靈的ならざりし也。之を赤銅時代と云ふ。此時代より以後人

は次第に外的となり、遂に肉體的となり了し、從ひて相應の知識地に墜つると共に、天界の知識亦亡び、天界に關する數多の事項も亦會し難くなりぬ。是等の時代を黄金、白銀、赤銅と云へるは亦相應よりせる也。即ち黄金は相應によりて天國の善を表はし、最太古の人はこれに居れり、白銀は靈國の善を表はし、中古の人はこれにをれり、赤銅は自然界の善を表はし、古の人はこれにをれり。更に之を繼げる時代を黒鐵時代となす、黒鐵は冷冽なる眞を表はす、善此にあらず。

○天界の太陽のこと。

百十六。此世界の太陽及び太陽より來る一切のものは、悉く自然的なるが故に、天界においては之を見るべからず。實に自然なるものは太陽より始まり、而して太陽より生ずるものは皆呼びて自然的となすなり。然るに物の靈的にして、そのうちに天界を包藏せるものは超自然にして、全く自然的なものと異なれり。兩者間の交通は只相應によりてのみ存するを得。靈的と自然的との差別の如何なるものなるかは、度のことを説ける處にて(三八を見よ)明なるべく、又その交通の如何なるものかは前二章相應を説ける處にて明なるべし。

百十七。此世の太陽、及び太陽よりする一切の事物は、天上にて見るべからざれども、天界には亦一個の太陽ありて、光、熱、及び一切のこと、猶此世の太陽の如し、されどこの外また數へ難きはどの

ことありて、そは皆世間のご根源を異にせり。そは世上の事物は自然的なれども、在天のものは靈的なるによる。天界の太陽とは主なり。その光は神眞なり。その熱は神善なり。而して此善と眞と兩つながら主なる太陽より來る。凡そ諸天界に存して、目に觸るゝものは、悉く此源泉よりせずと云ふことなし。されど此光り、及び熱、及びこの二つより出で來る在天の諸事物につきては、尙章を改めて説くべく、今は只太陽そのものにつきて述べし。主が太陽として天界に現はれ給ふ所以は、主は神愛にして、一切の靈的事物はこれに依りて存在せずと云ふことなければなり。猶ほ一切の自然的事物が此世の太陽に依りて存在するが如し。

百十八。主が天界に在りて如實に太陽として現はれ給ふことは、わが天人より學びたる所なるのみならず、わが亦屢許されて親しく見たる所なり。されば今此に太陽としての主につき、わが見聞したる所を少しく記すべし。

主は太陽として天界に現はれ給ふにあらず、主は諸天界を超えて高く居ませり。されど主の在處は諸天人の頭上に在らず、又頂天にあらず、天人の面前、恰も中ほどの高さにあり。右眼の前にては、主は正に太陽の如く、その光明の耀き、およびその大きに至りては、世間の太陽と異なることなければれども、左眼の前にては、かくの如くならず、主は月の如くに見ゆ、その大き、その白さ、恰も地上の月に似たり。されどその耀きはこれに優りて、又そのめぐりに小さき月とも云ふべきもの數體あり。そ

の一々の月の白さ、耀き相似たり。主のかく一處に在りて、しかも異様に現はるゝ所以如何と云ふに、そは人の主を見得るは、その人が如何に主を攝受するかによるものにして、この攝受の度合各同じからざればなり。即ち愛の徳に住して主を攝受するものと、信の徳に居りて主を攝受するものとは、相異なれり。愛の徳にをりて主を攝受するものには、主は炎々燃ゆる如き太陽となりて現はる、これその攝受の性質に稱へばなり。主の天國に在るものは此の如し。又信の徳にをりて主を攝受するものには、主は月の如く白く、且つ照りわたりて見ゆ。これその攝受の性質に稱へば也。主の靈國に在るものは此の如し。その故いかんと云ふに、愛の徳は火に相應す、靈的意義にては、火は愛なり、又信の徳は光りに相應す、靈的意義にては、光りは信なり。

主が眼の前に現はるゝ所以は、人の心より成れる内分は、眼によりて物を見ればなり。而して愛の徳にあるものは、右眼にて見、信の徳にあるものは左眼にて見る。人間と天人とを問はず、右側にあるものは總て善に相應す。眞これより來る。左側にあるものは、眞に相應す、善より來れる也。眞の徳は、その實性において、善より來る眞なり。

百十九。聖言のうちに、主を、愛より見て、太陽に比し信より見て、月に比せるは之がためなり。又主より來りて、主に對する愛を、太陽にて表はし、主より來りて、主に安んずる信を、月にて表はすは之がためなり。即ち次に引用する所にて知るべし、曰く、「月の光は日の光の如く、日の光は七倍

を加へて、七つの日の光の如くならむ」と。(以賽亞書、第三十章、二六。)
 「われ汝を滅ぼすときは、空を蔽ひ、その星を暗くし、雲を以て日を掩はん、月は其光を放たざるべし。我空の照る光明を盡く汝の上に暗くし、汝の地を闇となすべし」と。(以西結書、第三十二章、七、八。)
 又「われは日の出づるとき之を暗くすべし、又月はその光をかどやかさざるべし」と。(伊賽亞書、第十三章、一三。)
 又「日も月も暗くなり、星その光を失ふべし。日は暗なりて、月は血に變るべし」と。(約耳書、第二章、一〇、三一、及び第三章、一五。)
 又「日は毛布の如く黒くなり、月は血の如くなり、天の星は地に隕ちぬ」と。(黙示録、第六章、一二、一三。)
 又「是等の日の患難のち、直ちに日は晦く、月は光を失ひ、星は空より墜つべし」と。(馬太傳、第二十四章、二九。)
 尙他處を見よ。日は愛を表はし、月は信を表はし、星は善と眞との知識を表はす。是等の諸徳亡ぶるとき、是等の諸天體暗くなり、其光を失ひて、空より墜つと云ふ也。主が太陽として天に現はれ給ふことは、主がペテロ、ヤコブ、及びヨハネの前にその變化身を現はし給へるとき、主の面、太陽の如く赫けりと云ふにて明か也。(馬太傳、第十七章、二。)
 主がかく諸弟子の前に現はれたるとき、諸弟子はその肉體より離れ、天界の光明中に在りて、主を見たり。表像的教會を有したる古の人が、禮拜の聖式を行ふとき、東面して太陽に向ひたるは、此理に由るものにして、寺院を建立するに當り、之をして東方に向けしめたるも、亦これがためと知るべし。百二十。神愛の如何に大なるか、又如何なるものなるかは、地上の太陽との比較によりて推知すべし、即ちその頗る熱烈なるを推知すべし、されど人もし實に之を信することを得ば、神愛は太陽の熱烈なるに比して今一層強しと謂ふべし。この理によりて、主は亦太陽の如く、直接に天界の中にかどやかす、その愛は下降するに従ひて、熱烈の度柔らぎ行くものとす。此柔らぎの度合は一種の帶をなして太陽のほごりを輝きめぐれり。諸天人はまた太陽の内流によりて自ら傷つかざらんがため、適宜に薄き雲の如きものをもて、其身を覆へり。されば天界における諸天の位置は、天人が主の愛を攝受する度如何によりて、主を去ること或は遠く、或は近しと知るべし。天界の高處に在るものは、愛の徳に住するが故に、太陽たる主を去ること遠からず、されど天界の下層には信の徳に住するものを、主が故に、主に離るること自ら遠し。その不善なるもの、例へば暗黒界に在るもの、如きに至りては、主を去ること極めて遠し。蓋しこの隔離の度は善に背くの度に比例するものとす。百二十一。されど、屢ある如く、主の天界に現はるときは、太陽にて包まるゝ如く見えす、一個天人の形態を具ふれども、その面より發射する神格によりて自ら諸天人と異なるを認め得べし。そは主はその自格をもて此處に現はれ給ふにあらざればなり。主の自格は常に太陽にて包まるゝが故に、主の天界に現はるときは、その化相においてするものと知るべし。天界に在りては人の視線の注ぐ處、即ち究まる處に、他人を見認むるを通常とす、されどその見らるゝ所の人、實際においては、その視線の注ぐ處を離るゝこと甚だ遠きことあらんも知れず。かの如き所現を名づけて内觀の所現と云ふ、

し、即ちその頗る熱烈なるを推知すべし、されど人もし實に之を信することを得ば、神愛は太陽の熱烈なるに比して今一層強しと謂ふべし。この理によりて、主は亦太陽の如く、直接に天界の中にかどやかす、その愛は下降するに従ひて、熱烈の度柔らぎ行くものとす。此柔らぎの度合は一種の帶をなして太陽のほごりを輝きめぐれり。諸天人はまた太陽の内流によりて自ら傷つかざらんがため、適宜に薄き雲の如きものをもて、其身を覆へり。されば天界における諸天の位置は、天人が主の愛を攝受する度如何によりて、主を去ること或は遠く、或は近しと知るべし。天界の高處に在るものは、愛の徳に住するが故に、太陽たる主を去ること遠からず、されど天界の下層には信の徳に住するものを、主が故に、主に離るゝこと自ら遠し。その不善なるもの、例へば暗黒界に在るもの、如きに至りては、主を去ること極めて遠し。蓋しこの隔離の度は善に背くの度に比例するものとす。百二十一。されど、屢ある如く、主の天界に現はるときは、太陽にて包まるゝ如く見えす、一個天人の形態を具ふれども、その面より發射する神格によりて自ら諸天人と異なるを認め得べし。そは主はその自格をもて此處に現はれ給ふにあらざればなり。主の自格は常に太陽にて包まるゝが故に、主の天界に現はるときは、その化相においてするものと知るべし。天界に在りては人の視線の注ぐ處、即ち究まる處に、他人を見認むるを通常とす、されどその見らるゝ所の人、實際においては、その視線の注ぐ處を離るゝこと甚だ遠きことあらんも知れず。かの如き所現を名づけて内觀の所現と云ふ、

尙後章にて説くべし。われは又主が太陽を離れ、天人の形態にて現れたるを見たることあり。そのとき主は太陽より少しく下の方に當り、高處に現はれ給へり。主は又これと相似たる形態にて、その面かどやきわたりて、わが身近く現はれ給へることあり。又一たび主は諸天人の中にありて火焰の如き光明を放ちて現はれ給へることありき。

百二十二。天人の目より、世間の太陽を天界のに對して見るときは、何か暗きものゝ如くに見え、又世間の月を天界のに對するときは、薄暗きものと見ゆ。このこと常に然り。其理いかんと云ふに、世間における火熱性は自愛に相應し、それより来る光は、自愛よりする虚偽に相應するに由る。自愛は神愛と正に相反き、自愛よりする虚偽は、神眞と正に相反す、而してかく神愛と神眞とに逆へるものは、諸天人の眼には、暗きものと見ゆるなり。故に、聖言の中には、自然界の日月をあがめ、此前に叩頭するものを以て、自愛、及びそれよりする諸々の虚偽を表はし、此の如き偶像崇拜者を以て斬り捨つべきものとせり。(申命記、第四章、一九。第十七章、三、四、五。耶利米亞記、第八章、一、二。以西結書、第八章、一五、一六、一八。默示録、第十六章、八。馬太傳、第十三章、六。)

百二十三。主はその神愛によりて、(此愛は主に在り、而して主より來るものとす、)太陽として、天界に現はるゝにより、天に在るものは常に主に向ひて立てり、而して天國にあるものは、主を見ること太陽の如く、靈國に在るものは、主を見ること月の如し。されど地獄界に住するものは、自己と世

間とのみを愛して、主と相逆ふにより、黑暗、漂冥の裡に在りて、全く主に背き、從ひて主を後方に捨ておけり。黑暗の處、即ち世間の太陽の在る處に向へるものは、後面に當る地獄に在りて、之を鬼靈と云ひ、薄暗き處、即ち月の在る處に向へるものは、前面に當る地獄に在りて、之を精靈と云ふ。地獄界に在るものを暗闇に在り、天界に在るものを光明に在りと云ふは、如上の理によるもの也。暗闇は又惡よりする虚偽を表はし、光明は善よりする眞を表はせり。彼等がかく各其向ふ所を異にせる理由は、かの他界に在るものはすべて、その内分を支配する事物の方に向ひて立つ、即ちその愛する所に向ひて立てばなり。而してこの内分は天人、又は精靈の所面を定むる所のもの也。且つ靈界に在りては、自然界における如き方位の一定せるものあらず、方位は天人の所面によりて定まる。人間の心靈も亦これと同じき道理によりてその向ふ所を定む、即ち自己と世間を愛するものは主に背きて立ち、主及び隣人を愛するものは、主に向ひて立つ。されど人間自らは之を知らず、そは自然界に生息して、方位を定むるに太陽の出沒を本とすればなり。されど人間にとりては、この事を會得する容易ならざるが故に、天界における方位、空間、及び時間を説くに當り、尙述ぶるところあるべし。

百二十四。主は天界の太陽にして、一切、主よりするものは、主に向はざるはなきが故に、主は普遍的中心點となり、之によりて、すべての方向及び位地定まる。かくして主の下にある一切の萬物は、天上と地上とを問はず、悉く主の前に現はれ、主の加護を受く。

百二十五。此の如き考察により、前數章において主に關して説き示したる所益、明を加ふべし。即ち主は天界の神なること、(二より六に至る)、天界は主の神格より成ること、(七より一二)、天界における主の神格は、主に對する愛と、隣人に對する仁なること、(一三より一九)、世上の萬物と天界との間及び天界を経て主との間に相應あること、(八七より一一五)、自然界の日と月とは即ち此の如き相應なること(一〇五)、是也。

○天界における光と熱とのこと。

百二十六。自然界に依りてのみ思索するものは、天界に光ありと云ふを會得する能はず、されど諸天界には光ありて、其強き世間日午の光明に優ること數度也。こは夕暮、夜分と云はず、わが屢見たる所なり。始めは天人が世間の光を以て、天界のに比ぶれば、その日蔭よりも少しく勝れりと云ふを聞きて、われ之を怪みき。されど親しく之を見て以來は、われ自らその證人たるを得るに至れり。その光りの白さ、及びその赫き方は到底言語の盡くし得べき所にあらず。わが天界にて見たる所は皆此光の助けに由るものにして、その分明瞭々たることは此世の事物を見るの比にあらずと知るべし。百二十七。天界の光は、世間の光の如く自然的ならずして、靈的なることは、その主なる太陽より出で來るが爲めにして、而してこの太陽の神愛そのものなることは、既に前章に之を記せり。天界に

ては、太陽なる主より出で來る所のものを呼びて神眞と云へり、されどその實性においては、神善の神眞と合體せるもの也。天人はこれによりて光と熱とを得、即ち神眞より光を得、神愛より熱を得。故に、當に知るべし、天界の光の由來既に此の如くなるを以て、その靈的にして自然的ならざること。而して天界の熱も亦然りとす。

百二十八。天人は既に靈的にして自然的ならざるに由り、天人にとりては神眞はその光明なり。靈的存在は靈的太陽によりて見るべく、自然的存在は自然的太陽によりて見るべし。神眞は天人所有の智性の根源也、而して智性は天人の内視力なり、此内視力外に流れて彼等の外視力となるが故に、太陽たる主よりして天界に現はるるものは、光明の中においてせずと云ふことなし。天界光明の由來かくの如くなるが故に、主よりする神眞を攝受する度如何によりて、光明に差等あるべきわけなり、即ち各天人が居る所の智慧及び證覺の如何によりて、その光明に差等ありと謂ふべし。故に天國の光りと靈國のとは相同じからず、又各個の團體のも、一々異なれり。即ち天國のものは太陽たる主よりその光を受くるが故に、天國の光は火炎に似たり、されど靈國に在るものは月たる主より光を受くるが故に、靈國のは白く輝けり(上を見よ、一一八)。この光は各個の團體において相異し、亦一團中においても同じからず、そは中心に在るものは、光を受くること多けれども、周邊にあるものは少なければなり。(四三を見よ。)概して言へば、天人の光りは神眞を受くる度に比例す、即ち天人が智慧と證

覺を主より得る度に比例す。天界の天人を光明の天人と呼ぶはこれがためなり。

百二十九。天界の主は神眞にして、神眞は光明なるが故に、聖言中には主を光明と云へり、亦主よりする一部の眞をも光明と云へり。次に引用する所を見るべし。耶蘇曰く、「われは世の光なり、われに従ふものは、暗闇の中に行かず、生の光を得る也」と。(約翰傳、第八章、一二)曰く、「われ世に在るときは、世の光なり」と。(約翰傳、第九章、五)又耶蘇曰く、「暫くの間、光爾曹と共に在り、光ある間に行きて、暗きに逐ひつかれざるやうにせよ、爾曹光の子となるべきために、光のある間に、光を信せよ、我は光にして世に臨れり、すべてわれを信するものをして、暗きにをらざらしめんためなり」と。(約翰傳、第十二章、三五、三六、四六)曰く、「光は世に來れり、されど人は光を愛せずして暗を愛せり」と。(約翰傳、第三章、一九)約翰、主につきて言へるは、「こはすべての人を照らす眞の光なり」と。(約翰傳、第一章、四、九)曰く、「幽暗に在る民は大なる光を見、死の地と死の蔭に座するものに、光出で來れり」と。(馬太傳、第四章、一六)曰く、「われ汝を民の契約となし、異邦人の光となすべし」と。(以賽亞書、第四十二章、六)曰く、「われ汝をたて異邦の光となし、わが救済を地のはてにまで到らしむ」と。(以賽亞書、第四十九章、六)曰く、「救はれたる萬の國民はこの光によりてあゆまん」と。(黙示録、第二十一章、二四)曰く、「願はくは汝の光と汝の眞理とを放ちて、われを導け」と。(詩篇、第四十三章、三)以上、及び尙この餘の箇處にて、主よりする神眞の方面より見て、主は光と呼ばれ、眞そ

のものをも亦光と呼ぶるを知るべし。天界の光明は、太陽たる主より出で來るにより、主がその化身をベテロ、ヤコブ、及びヨハネの前に現はし給ふや、その面は太陽の如く見え、その衣は光明を放ち、白くひかること雪の如く、世上の布カズマもかく白くはなせ能はじ」と云へり。(馬加傳、第九章、三)馬太傳、第十七章、二)主の衣のかく見えたるは、神眞を現はせるにて、その眞は天界にある主より來る也。故に聖言中には衣は眞を表はせり、ダビデに「エホバ、汝は衣の如くに光をまとへり」と云ふは、是故なり。(詩篇、第四百章、二)

百三十。天界における光明は靈的にして、而して神眞なることは、次の理にても亦明かなるべし。即ち人間も亦靈の光を具ふるものにして、神眞よりする智慧と證覺とに在る限りは、此光りより明アカシを受くるなり。人間の靈光とは、即ちその智性の光明にして、この智性の對境となるものは眞理なり、而して彼はこの眞理を解析的に順次排列し、論理法を作り、遂にこれより序を逐ひて論斷をなすに至るなり。されど自然の人間は、智性のよく此の如く事理を見得するは如實の光明に由るものなるを悟らず、そは此光明は肉眼の見る所にあらず、又思索の認め得る所にあざればなり。されどこの光を知れるものも亦少なからず、而してかくの如き人は、これを自然的光明と區別するを知れり。自然的光明とは、その思索するや自然的にして靈的ならざるものが居る所の光明なり。彼等は只世間のみを眼中におきて、一切の事物を自然に歸せんとす、その思索は自然的なり。されど心を天界に向はしめ、

一切の事物を神格に歸せんとするものは、その思索、靈的なりと謂ふべし。心を照すは、まことの光にして、この光は所謂の自然的燭光と全然別物なることは、わが屢々許されて知覺したる所、實見したる所なり。わが此の光に進み到りたるは漸を逐ひてのことにして、且つ內的なりき。而してわが歩を進むるに従ひ、わが智性益々明るくなり行き、遂には未だ曾て見ざる所を知覺し、最後には、自然的燭光にては到底會得し難き所のものをも知覺するに至りぬ。是等の事物が天界の光明に照らさるるときは、此の如く明白に、此の如く瞭然たるに拘はらず、自然的燭光にては遂に會得すべからざるを見て、われは時に自ら憤りたることありき。かく智性には光なるものあるが故に、眼の場合における如く、智性を以て物を見ると云ひ、又智性の知覺を明るしとなし、その不知覺なるを暗となし、陰となすなどのことあり。

百三十一。既に天界の光は神眞なるが故に、此光は亦神的證覺及び神的智恵なるを知るべし。されば天界の光に向ひ進むとは、智恵及び證覺に進みて照光の境涯に入るの義なり。是理によりて天人が具有する光はその智恵及び證覺に比例するものとす。又天界の光は神的證覺なるを以て、一切のもの一たび天界の光の中に現はるれば、その特相を示さずと云ふことなし。そは各自の内分は、ありのままに、正しく、その面に現はれ、至微の末に至るまで敢て藏ることなければなり。且つ内天に在る天人は、その心の中にある所は何ごとも外に現はれんことを願ふ、その心に疚しき所なきに由る。さ

れど天界以下に在るものは然らず、彼等の志す所は不善にあるが故に、天界の光明中に來らんことを恐るゝ一方ならず。此に又奇異なる事實は、地獄にあるものは相互の間にこそ人間の相貌を具ふる如く見ゆれ、一たび天界の光の中に出で來るときは、その險惡なる面貌と身體とは一種の妖怪に似たり、これ即ち彼等の内に藏せる惡心そのものゝ面影也。天人より見るときは、人間の心靈も亦此の如きものあり、その人もし善人ならんには、人間の相好を有し、各その善に従ひて美なるべきも、彼もし惡心を有せんには、妖怪の相を現し、其醜はその惡の深淺に由るべし。故に一切の事物は天界の光明中に來りて悉く顯然たるを明むべし。而して此く顯然たるは、天界の光は神眞なるによるものとす。

百三十二。神眞は諸天界における光明なること此くの如くなるが故に、一切の眞理は、その天人の心のうちにあると、その外にあるとを問はず、又諸天界の中と、外とにあるを問はず、往く處として光明にかゞやかすと云ふことなし。されど天界の外に在る眞理は天界のうちに在る眞理の如くかゞやかす。前者のかゞやかきは冷かにして、熱なき雪の如し、そは此の眞理は、天界内の眞理の如く、その實性を至善の中より獲來らざるによる。故に天界の光もし此冷かなる光の上に落ち來るときは、この冷かなるもの消滅す、もし其下に惡を藏することあらんには、その光は化して暗黒となるべし。われ時に之を目撃したることあり、尙この外、眞理の光明を放つことにつき、異常の現象を多く見たれども、今は省く。

百三十三。天界の熱につき今少しく説くべし。此熱の實性は愛なり、太陽たる主より来る、而して此太陽とは神愛にして、主に在り、且つ主より出づるものなることは、前章に示せる如し。かく天界の熱は、光と同一の根源より来るが故に、光と同じく亦靈的なるを知るべし。太陽たる主より出で来るものに二つあり、神眞と神善是也。神眞は、天界に在りては、光として現はれ、神善は熱として現はる。されど神眞と神善とは二物にあらず、融合して一となる。一となると雖、天人の眼より見れば、兩者各區別あり、その故は一部の天人は神善を受くること神眞よりも多けれど、又一部の天人は眞を受くること善よりも多ければなり。神善を受くること多きものは主の天國にあるものなり、神眞を受くること多きものは主の靈國にあるものなり、而して天人の最も圓滿なるものは、此兩者を受くること同一量なりとす。

百三十四。天界の熱は、その光の如く、到る處に差等あり、天國の熱は靈國のに異なれり、又諸團體の中に在りても相同じからず、而して此差等は度量の上のみ限られず、その性質の上にも之れあり。主の天國に在りては、天人、神善をうくること多きが故に、その熱は甚だ強くして、且つ純なり、されど主の靈國に在る天人は神眞をうくること多きが故に、その熱はしかく強からず、又純ならず。各團體における熱も、亦かくの如く攝受の度によりて差等あり。地獄界にも亦熱あれども淨からず。天界の熱とは聖火及び天火の謂にして、地獄の熱とは瀆れの火、陰府の火の謂なり。されど其愛を表

するに至りては兩者一なり。天火は主に對する愛、隣人に對する愛、及び是等兩個の愛より来る一切の情動を表はし、陰府の火は自我の愛、世間の愛、及びこれらの愛より来る一切の情動を表はすものとす。愛は靈的源泉より来る熱なることは、愛を有するものは、何人も必ず暖氣を生ずるを見て明かなり。人の火氣を感じて、暖熱を覺ゆるに至るは、すべてその人の有する愛の性質と強度の如何に由るものとす。而して此熱の外に現はるゝに至るは、その愛を侵さんとするものあるときなり。故に善の愛より来る情動と、惡の愛より来る情動とを問はず、愛につきては、われら常に或は火の如くなること云ひ、或は暖くなると云ひ、或は燃ゆること云ひ、或は沸くと云ひ、或は燬くと云ふ。

百三十五。太陽たる主より出で来る所の愛は、天界に在りては之を熱と感ず、そは天人の内分は、主より来る神善を受けて、愛にをるが故に、その外分は之がため暖氣を生じ來りて熱を感ずれば也。是の故に、天界にありては愛と熱と互に相應し、又さきに述べたる如く、天人は何れも其愛の性質に相當せる熱の種類と度量とを有す。世間の熱は粗に過ぎ、且つ自然的にして、靈的ならざるが故に、少しも天界に入り來らざれど、人間に至りては、靈界と自然界とに屬するを以て、これと異なれり。即ち其心靈の上において、全くその愛如何によりて暖氣を生ずれども、その肉體の上において、心靈の熱、並びに世間の熱によりて暖氣を覺ゆるものとす。前者の後者に流れ入ることあるは、彼等互に相應すればなり。

靈熱と自然熱との相應とは如何なるものなるかは、之を動物に見て明かなるべし。動物の愛は——その主なるものは自己の種類を繁生せんとの慾なり——世間の太陽より受くる熱の有無とその分量とに比例して發展し、活動す、而して此時期は春夏の二季に限れり。かの世間の熱、流れ入るによりて愛をひき起すと思ふものは、何が故に誤れるかと云ふに、自然界より靈界に流入することなくして、只靈界より自然界に流入するのみなれば也。而して此内流は神的順序に従へども、かの然らざるものは之に逆へばなり。

百三十六。天人は人間の如く亦智性と意志とを有す。その智性的生涯を作るものは天界の光なり。そはこの光は神眞にして、又これよりする神智なればなり。天人の意的生涯を作るものは天界の熱なり、そはこの熱は神善にして、又これよりする神愛なればなり。而して天人の生命そのものは、此熱より來りて、かの光よりせず、但光のうちに熱あるときを除く。生命の熱より來ることは、熱なければ生命亡ぶるを見て明白なり。愛なき眞、善なき眞も亦此の如し、そは眞は——之を呼びて信の眞と云ふ——光にして、善は——呼びて愛の善となす——熱なればなり。是等の事物は、天界の熱と光とに相應する此世界の熱と光とを見れば、一層明了なるを得べし。即ち世間の熱は光と和合して、地上の萬物此に啓發し、成育す、而して熱と光とのかく和合するは春夏の兩期に在り。されど熱なき光は萬物を激して成育することなく、却て之をしてその活動を息めて死に至らしむ。冬期に熱と光との和合なきは、

光あれども熱なきに由る。天界を樂園と云ふは此相應あればなり、蓋し天界に在りて、眞と善と相合し、信と愛と相合するは、猶ほ地上の春期に當りて、光と熱と和合するが如し。是に由りて之をみれば、天界における主の神格は、主に對する愛と隣人に對する仁なりと云ふ眞理の益、明なるを覺えん。こは既に十三より十九に至りて述べたる所なり。

百三十七。約翰傳に曰く、「太初の道あり、道は神と共にあり、道は即ち神なり。萬物これにて造らる。造られたるものに一として之に由らで造られたるはなし。之に生命あり、此生命は人の光なり。かれ世に在り、世は彼に造られたり。それ道、肉體となりて吾曹の間にやざれり、吾曹その光榮を見たり」と(第一章、一、三、四、一〇、一四)。此處にて道即ち聖言は主を意味せるものなることは明かなり。そは道、肉體となれりと云ふに由る。されど道は、特に何を表はせるものなるかに至りては、未だ知るものあらず、よりてわれは次に之を説きあかすべし。此文中における道、即ち聖言とは、神眞の謂にして、主に存し、主より出で來るものなり。故に此にまた光と云へり、この光とは、少し前に示せる如く、神眞のことなり。今萬物の神眞によりて造らるることを説かん。

天界において一切の力を有するものは神眞なり、之なくば力あることなし。一切の天人を呼びて力となすは此神眞によればなり。實に彼等は神力の所受者、即ち此力を收むる器なる限り、力たるを得るものとす。而して此力あるが故に、彼等は地獄界を制御し、又彼等に反抗するものをも制御し得る

也。たとひ千の叛敵ありとも、天界の光、即ち神眞よりかゞやき来る一道の光明に遭へば、直ちに戰慄す。かくの如く、天人の天人たるは神眞を攝受するに由るが故に、全天界の根原をなせるものは神眞に外ならざるを知るべし。そは天界を組織するものは天人なればなり。

神眞の中にかく偉大なる力の潜みをすることは、眞理を以て只思想、又は言語に外ならずと思へるものと信じ得ざる所也。思想、又は言語には、それ自身にて力あるものにあらず、但これよりも大なるものと命に従ひて動くとき始めて力を生ずるものとす。されど神眞にはその中に自らなる力ありて、其力の偉大なること、天界は之にて造られ、世間も亦その中の萬物を併せて擧ぐ之にて造られたるほどなり。此の如き力の神眞中にあることは二個の比證、即ち人間にある善と眞との力、及び世間の太陽よりする光と熱との力によりて明に心得べし。

(一) 人間における眞と善との力によりて。人間一切の行爲は智と意とに由りて成る。即ち意よりするときは善に由り、智よりするときは眞に由るものとす。そは意の上の萬事は善と關係せざるはなく、智の上の萬事は眞と關係せざるはなければなり。故に人の全身は是の兩者によりて活動すと云ふべく、是兩者の欲する所、好む所に従ひて、人間百千の事、一齊に活躍し來るなり。故に人間の全身は善と眞とに使役せられたため作られたるもの、従ひて善と眞とによりて成れるものと謂ふべし。
(二) 世間の太陽よりする熱と光との力によりて。一切世間に成育するもの、即ち樹木、禾穀、花、草、

果實、及び種子の類は、太陽の熱と光とを離れて生息するを得ず。以て此熱と光との中に如何なる生殖力を有するかを明め得べし。果して然らんに神の光明、即ち神眞の力や如何ばかりとせん。又神の熱、即ち神善の力や如何ばかりとせん。天界の存在既に是兩つのもとの力によるが故に、世間の存在も亦これによれり、そは上述の如く世間は天界によりて存在するものなればなり。これに由りて見るときは、萬物は道、即ち聖言に由りて造られたりと云ふこと、これなくしては一切の所造何ものも造られ得べからずと云ふこと、又世界は主、即ち主よりする神眞によりて造られたりと云ふことは、如何に解すべきものなるかを明め得べし。故に創世記には、先づ光を説き、次に光よりせる諸事物を説けり(第一章、三、四)。宇宙における萬物は、天界と世界とを問はず、苟も如實の存在たらんとするには、皆善と眞とに關係し、兩者の和合に關係せざるなきを得ざるは、是道理に基けり。

百三十九。(原本には百三十) 此に注意すべきことは、太陽たる主よりも、天界に在る神善及び神眞は主のうちに存せずして、主より出で來るものなること、これ也。主のうちに在るものは、只神愛のみ神愛とは神善と神眞をして天界に存在せしむる實在なり。是亦世間の太陽に比較して明らか得べし、即ち世間に在る光と熱とは、太陽そのものにあらずして、而かも太陽より出で來る所なり、太陽にあるものは只火のみ、此火よりして熱と光と出で來る。
百四十。太陽たる主は神愛にして、神愛は神善そのものなるが故に、主より出で來る神格、即ち天

界における主の神格は、之を他と區別せんため神眞と云ふ、その實は神善の神眞と和合せるものなり。主より出で来る聖靈と云ふは、即ちこれ神眞也。

○天界における方位の事。

百四十一。天界に東西南北の方位あること、此世におけるが如し、之を定むるの法亦此世と同じく太陽に由る、天界にては主之が太陽となり、世間にては普通の太陽に由る。されど兩者の中に大なる相異あり。第一には、世間にては太陽が地上を去る最高の處を南と云ひ、正に之に反對して地下にある處を北となし、太陽が晝夜平分線に上る處を東となし、その歿する處を西となす。かく世間に在りては一切の方位を南より定むれども、天界にては主が太陽として現はれ給ふ處を東とし、之に對するを西とし、天界の右方を南とし、左方を北とす。こは天人何れの處にその面と體軀とを轉向するも然らずと云ふことなし。かくて天界の方位はみな東より定まる。何が故に主が太陽として現はるゝ處を東となすかと尋ぬるに、そは一切の生命の本は太陽たる主より來ればなり、又天人が主より熱と光、即ち愛と智とを攝受する度に比例して、主は彼等の上に現はると云へばなり。是故に聖言中に主を呼びて東となす。

百四十二。第二の相異點は、天人にとりては、その面を向くる處、即ち常に東にして、その後方を

西となし、其右を南とし、その左を北となす。こは世間にて輒く了解し難き所とす、そは人は何れの方位にもその面を向け得べければなり。故に今之を説明せざるべからず。天界に在りては、往く處として、主をその共通中心點となして、之に向はずと云ふことなし、されば諸天人も亦皆主に向ひて立たざるはあらず。地上においても亦人の能く知る如く、萬物は皆一定の共通中心點に向へり。されど天界の方向の世間のと異なる所は、世間にてはその下方を共通中心點に向はしめをれども、天界にて中心點に向へる所は天人の前面なり。この方面を世間にては求心力の方向と云ひ、又は重力と云ひをれり。天人の内分は如實に前方に對して有り、而してこの内分は皆悉くその面貌に現然たるが故に、天人の面の向く處に由りて方位即ち定ると云ふべし。

百四十三。天人は如何なる處に其面と身體とを向くるも、東は常にその前面なりと云ふことは、世上の人の容易く解し得ざる所なるべし、そは人間はその面を向くる方位に従ひて、東西南北、何れなりともその前に現はれ來るべければなり。故にこれ亦説明を要す。

天人は、人間の如く、何れの方位にも其面を向け、その身體を轉じ得れども、天人の眼前に見ゆるは常に東なりと云ふわけは、天人における相貌の變化は人間と同じからずして、他の根原に由ればなり。うち見たる所だけにては、一樣の看あれども、その實は然らず。かの根原と云ふは能主の愛のことなり、この愛によりて方位の定まること、天人も精靈も相異ならず、そは今述べたる如く、彼等の

内分は實際その共通中心點、即ち天界に在りては太陽たる主の方向に對して立てばなり。是の如き彼等の内分の前面に在るものは常に愛ならずと云ふことなし、而して彼等の外的形態なる面貌は、その内分によりて存在するものなるが故に、その面貌の前面に不斷、現はるゝものは、かれらの中に能主たる愛なるや明なり。かくして太陽たる主は、天界にては常に天人の面前に在りと謂ふべし。天人がその愛を有するは主よりするものなるが故に。又主は天人に對して、自己本來の愛にをり給ふを以て天人が如何なる方向に轉回するに拘はらず、常に主をその前に見るを得るは、主の所爲なるを知るべし。是等の事は今精しく説くを得ず、後來特に天界における表像と、相貌、及び時間と空間とを説く處に至りて、此事益々智性の上に明かなるべし。

主は常に天人の面前に居給ふと云ふことは、多くの實見によりわが許されて親しく知り、且つ見たる所とす。そはわれ天人と俱なれるとき、わが面を向くる處、毎に必ず主の現前するを感じたればなり。是れ必ずしも眼もて見るにあらず、主を光明の中に感ずる也。天人も亦その然ることを屢々證據したり。かく主は常に天人の面前に現然たるを以て、世に神を信じ、神を愛するものと呼びて、この人は神をその面前及び眼前に見ると云ひ、或は又神に向ひて、これを見ると云ふなり。かくの如き言ひ顯はし方は靈界より來れるなり、人間は必ずしもその由來する所を知らざれども、人間の言語中には靈界より借り來れるもの少しとせす。

百四十四。此の如く主に對して、方位の轉向あることは、天界における不思議の一なり。數多の天人一處にありて、その面と身體とを向くる處、各一ならざるも、その主を見るは皆同じくその前方に在りて、而して右方を南とし、左方を北とし、後方を西とすること諸天人悉く一樣なり。尙此に天界の一不思議となすべきは、天人の相貌はすべて常に東に向へども、彼等は亦他の三方に對してもその相貌を有することは也。而して此の相貌なるものは彼等の想念より成れる內的視覺に由るものとす。尙此外に不思議なる一事は、天界にては何人も他の背後に立ちて、その人の後頭を臨むを非法の所爲となすことにて、その然る所以は、もしかくするとき、主よりする善と眞との内流を亂だすの憂あるに由ると云ふ。

百四十五。天人が主を見る趣と、主が天人を見給ふ趣とは相同じからず。天人は主を見るに其眼を用ゆれども、主は天人を見るにその前額よりす。そは前額は愛と相應するに由る。主は愛によりて天人の意志の中に流れ入り、彼等をして眼と相應せる智性を以て、主を見るを得せしめ給ふ。

百四十六。主の天國を構成せる諸天界の方位と、その靈國を構成せる諸天界の方位とは同じからず。そは天國のものは主を太陽として見、靈國のものは主を月として見、而して主の現はれ給ふ處是れ東なればなり。天界における日と月との距離は三十度なるが故に、方位の上においても此差あるを知るべし。天界が二國土にわかれて、一を天國と云ひ、一を靈國と云ふこと(二〇より二八)、主は天國に

日として現はれ、靈國に月として現はれ給ふこと(一一八)は、各その章において示したる所なり。かくの如くなれど、天界の方位の混雜せざるは、天國のものは靈國に下り來るを得ず、靈國のものは天國に上り行くを得ざるに由る、これ亦既に述べたる所なり(三五)。

百四十七。これによりて、天界における主の現前とは如何なること、主は到る處いざにさざるなきこと、主より來る善と眞とのうちにあるものは、すべて主と偕なることを明むべし、亦上に言へる如く、主、天人と偕なるときは、自己本來の愛に居給ふことも、從ひて明かなるべし(一二)。天人が主の現前を感ずるは、その内分の上の事にて、眼は此内分によりて見る也、而して此相續性の故に、天人は主を自己以外に見るものとす。これに由りて、主、彼等に在り、彼等、主にありとは、何の義なるかを解し得べし。主自ら宜はく、「汝曹われにをれ、さらばわれ汝曹にをらん」と(約翰傳、第十五章、四)。又曰ふ、「われ肉を食ひ、われの血を飲まんものは、われにをる、われも亦かれにをる」と(約翰傳、第六章、五六)。主の肉とは神善のことにして、主の血とは神眞のことも也。

百四十八。天界に在りては、すべて皆方位によりて住處を異にせり。東と西とは愛の善徳にをるもの住めり。東には分明に之を感ずるものをり、西にはおぼろげに之を感ずるものをり。南と北とは愛の徳よりする所の證覺にをるもの住めり、南には明白なる證覺の光りにをるもの住み、北にはおぼろげなる證覺の光にをるもの住めり。主の靈國にある天人と、その天國にある天人と、皆共に此

順序を守れども、その相異點は、一は愛の徳に従ひてをり、一は此徳よりする眞の光に従ふこと也。天國における愛は、主に對する愛にして、之よりする眞の光は證覺なり。されど靈國に在りては、その愛は隣人に對する愛にして、之を仁と云ふ、此愛よりする眞の光りは智慧なり、又これを信と云ふ(二三)。兩者は亦その方位を異にせり、そは上に(一四六)言へる如く、天、靈兩國における方位の差は三十度なれば也。

百四十九。天界の各團體に在る天人も亦如上の順序に従ひて排列せり、東に在るものは、愛と仁とにをること他に勝り、西にあるものは之に次ぎ、又南にあるものは證覺と智慧との光にをること他に勝り、而して北にあるもの之に次げり。天人のかく相分れて住處を定むるは、各團體一々に天界を代表し、一個の小天界をなすに由る也。(上を見よ、五一より五八。)諸天人の相集まるるときも亦此順序を亂さず。彼等のかく順序を亂さざるは、天界の形式より來る結果にして、彼等はいかして各其居るべき處を知るなり。主は又到る處に天界の形式を保存せんため、一々の團體中に各種類の天人を配置せり。されど全般の天界には自らその排列布置の各團體に異なるものあるは、全體と部分と其趣を同じうせざるに見て知らるべし。即ち東方にある團體は西方の方に優り、南方に在るは北方の方に優れり。

百五十。故に天界の方位は、各其處に住めるもの性質を表はすと謂ふべし、即ち東は愛、及びその徳の分明に知覺せらるゝことを表はし、西はそのおぼろに知覺せらるゝを表はし、又南は證覺及び

智慧の光、分明なるを、北はその朦朧なるを表はす。天界における方位の意義、既に此の如くなるが故に、聖言中にも亦方位の内的、即ち靈的意義に之と相似たるものあり、そは聖言の内的、即ち靈的意義は全然天界における意義に従へるものなればなり。

百五十一。地獄界に在るものは之と相反せり。彼等は日又は月たる主に對することなく、却て之に背けり、彼等の向へる所は、世間の太陽の在る處にして、黑暗々なり、或は地上の月の在る處にして、暗澹なり。所謂る鬼靈なるものは、世間の太陽の在る處、黑暗々裏に對して居り、所謂る精靈なるものは、地上の月の在る處、暗澹に對して居れり。世間の太陽と、地上の月とは靈界に現はれず、かの太陽は天界の對して黒きものとなり、かの月は天界の對して薄暗きものとなることは、上章既に述べたり。(一二二)故に地獄界の方位は天界のと全く相反し、黑暗々の處及び暗澹の處を以て東となし、天界の太陽の在る處を西となし、右方を南、左方を北となせり。此方位の關係は何れの方向にその身を轉回するも變ることなく、又然らざるを得ざる也。何となれば彼等が内分の傾向、從ひてその安定する處は、常に此方面に傾き、此方面に出でんとすればなり。他生における内分の傾向は總て愛によりて定まり、從ひて一切事物の實地に安定せらるゝも亦愛によることは、第四百十三節において既に見たり。地獄に在るものゝ愛は、自我と世間との愛なり、而して此愛を表はすものは世間の太陽と地上の月にして、(一二二)かの主及び隣人に對する愛と正に相反せるを知るべし。故に彼等は主

に背きて黑暗々の處、及び暗澹の處に向ひてをれり。而して地獄界における住處の布置は亦その方位に従ふものにして、自我の愛よりする惡に在るものは、東より西にわたりて住み、惡のいつはりに在るものは、南より北にわたりて住めり。されどこは尙後來地獄界を説くときに述べべし。

百五十二。もし惡しき精靈ありて、善きものゝ群に入るときは、方位の紛亂甚しくなりて、善者は何れに東を求むべきかを知らざるに至る。われは此事の時に起り來ることあるを見、又之がため心を傷めたる精靈より親しく之をききたることあり。

百五十三。惡しき精靈の時に天界の方位に轉回することあり、此時彼等は智慧を得て眞を知覺すれども、善に對する情動はあらず、故に彼等もし自界の方位に轉じ返るときは、直ちにその智慧を失ひて、眞を知覺せず、而して曰ふ、「さきに見聞したるは眞にあらざして虚偽なり」と。彼等は又虚偽の却て眞ならんことを願ふなり。われ嘗て此轉回のことにつき學べる所あり、曰く、惡しきものは、その智性の上において此の如き轉回あるを得れども、その意志に至りては、かくなし難じと、又曰く、こは主の豫じめ計りおき給へる所にして、何人も眞を見、且つ之を是認するを得べけんも、善の中にならざれば、眞を攝受する能はざらしめんためなり、眞を攝受するは善にして、惡にあらざるが故に。人間に在りても亦然り、是れ眞を見て自ら改めんためなり、されど人の自ら改むるは、自らをる所の善以上に出づるを得ず。是の故に人は亦主の方面に向ひて轉回するを得れども、其生涯尙惡を出づるこ

となくば、彼は復た自己に返り来るべし、而してさきに知り且つ見たる眞に逆ひて、自己の罪惡より来る虚偽の上に、その身を安んせんとすべし。こは人が自己の内的情態を本とし、これによりて自ら内に思ふところあるとき生ずるものとす。

○天界における天人の情態變化の事。

百五十四。天人の情態變化とは、愛と信、従ひて證覺と智恵とに關して、彼等の生涯の上における變化を謂ふなり。凡そ生涯、及び生涯に屬するものには情態あり、而して天人の生涯は愛と信との生涯、従ひて證覺と智恵との生涯なるが故に、此生涯の上に情態あり、これと呼びて愛と信との情態、證覺と智恵との情態と云ふ。今述べんとするは是等の情態が天人に在りて如何に變化するかと云ふに在り。

百五十五。天人は、愛の上より見て、いつも同一の情態に在ることなし、證覺の上より見ても亦然り、そは彼等の證覺なるものは、すべて愛よりし、且愛に依ればなり。天人は時として強度の愛に在ることあり、又時としては、かくまで強度ならざる情態に在ることあり。此情態は最高度より最低度に至るまで、次を逐ひて降下す。天人が最高度の愛に居るときは、即ち彼等が生命の光と熱とに居るときなり、輝きて樂しき境涯に在るときなり。その最低度の愛に在るときは、即ち日蔭と寒さとに在るときなり、暗くして樂しみなき境涯に在るときなり。而して彼等はまた此情態より最初の情態に還

り、上下往返す。是等諸の情態の相互に繼續する模様は、一々同じからず、猶ほひなたと日蔭の情態の様々に變化するが如く、又冷熱の變化に似たり。即ち世間に在りて、日毎に朝あり、午あり、夕暮あり、夜あり、而してその種々に變化すること、一年中、止むなきが如し。是等の自然界における諸の相似は亦相應なり、何となれば朝は天人の愛に在りて赫けるに相應し、日午はその證覺に在りて赫けるに相應し、夕暮は證覺に在りても暗きに相應し、夜は愛なく、證覺なき情態に相應す。されどこと知りおくべきは、天界に在るものと生涯には、夜に相應するものあらざることこれなり。天界には味爽に相應する情態あれども、夜に相應するものは地獄のみ之れあり。此相應によりて、聖言の中に日と年のことを言ふときは、概して生活の情態を表はし、熱と光とは愛と證覺とを、朝は最強第一度の愛を、午時は證覺の赫けるを、夕暮は證覺の光薄らぐを、味爽は朝まだき尙薄暗きを、而して夜陰は愛と證覺との絶無を表はすを知るべし。

百五十六。愛と證覺とよりなれる天人の内分の情態に伴れて、その身外の諸事物も亦其情態を變化するものとす。而して此變化は皆天人の眼前に現はれ来る、そは身外の事物は身内の變化に隨ひてその相をとるものなればなり。されど是等の諸事物の如何なるものか、及びその性質に至りては、後章、在天の表像及び相貌を説くときに述べべし。

百五十七。個々の天人、及び個々の團體に皆此の如き情態の變化行はれざるはなし、されどこの變

化を經過する趣の彼此皆一樣ならざるは、その愛と證覺とに居ること、各相同じからざるに由る。即ち天界の中央にあるものは、周邊に近くをるものに比して、その情態一層圓滿なるが如きこと是なり、(四三及び一二八を見よ)。此の情態の變化は、各人がをる愛と信との性質によりて異なるを以て、今一々之を説かんは煩はし。即ち或るものは輝きて且つ樂しき境涯にあらんも、或るものは暗きに居りて、樂なき境涯にあらんも知るべからず、而して此の如きこと同時に、同一の團體中に起ることあるべし。此變化は又各團體中において同じからず、即ち天國の團體中にあるものと、靈國にあるものとは一樣ならず。此く各團體における情態の變化、一々相異せるは、概して言へば、地上到る處氣候の同じからざるに従ひて、時日の情態に種々の相異あるが如し。此に朝あれば彼に夕あり、此に熱あれば彼に寒あるが如し。

百五十八。われは何が故に此の如く情態の變化あるかを天界より聞きたり。天人曰く、これには種種の原因あり。第一には、天人、主より愛及び證覺を受けて、生を樂しみ、天を樂しむとも、このこと常に相續せんには、その樂も次第に價格を減すべし、こは變化の伴はざる歡樂及び快感を享くるものを経験する所なり。第二には、天人にも、人間の如く、亦一個の我念あり、此念は自己を愛する一念なり。天界にあるものは皆此我念を離れをり、而してかく主によりて我念を離るる限り、彼等は愛と證覺とにをる、されど此我念を離れざるものは、自己の愛にをるものとす。而して何人もその我念

を愛して、之がために牽引せらるゝが故に、此に情態の變化あり、轉換、相續あり。第三の原因は、彼等は此の如き轉換あるが故に、主に對する愛の中に止まりて、自己の愛を離るるに慣れ、益、完全の域に達すべし。樂しきことあり、樂しからざることあるによりて、人は善を知覺し、感受すること益、精微となるものなり。天人又曰ふ、情態の變化は主の所爲にあらず、主は常に太陽として、その熱と光、即ち愛と證覺とを流れ入らしめ給へり、變化の原因は天人そのものに在り、即ち我念を起して自己を愛し、よりて不斷、主より遠ざからんとすればなり。天人は此理を世間の太陽に比較して、説明して曰ふ、年々、日々、冷熱、光影の情態に變化あるは、その原因、太陽に在らずして、地球の自體にあることは、太陽の一處不變なるを見て證すべしと。

百五十九。主が太陽として天國の天人に現はれ給ふとき、天人は第一、第二、第三の情態と、その居る處を異にするに従ひて、その見る所を異にす。而してこはわが親しく見るを得たる所なり。主の始めて太陽として現はれ給ふときは、その光明四方に赫きわたたりて、妙嚴言ふべからず、これを主が第一の情態にをる天人に現はれ給ふときとす。その後太陽のめぐりに大なる雲の帶あらはれ出づ、此の雲のためにさきの光り赫きて、かくの如き妙嚴をなせるもの、今や漸く朦朧となり始めんとす。こは太陽が第二の情態にをる人に現はるゝときなりと云ふ。次ぎに此雲の帶次第に濃密となり來り、太陽の光、隨ひて漸く薄らぎゆき、遂に全く白色となる、こは太陽が第三の情態に在る天人に現はる

とどきなりと云ふ。此時かの白色の光輪左の方に動き、天界の月に近づくと、月は此光によりて照り赫くこと常ならず、こは天國に在るもの、第四の情態にして、靈國のもの、爲めには第一の情態なりと云ふ。天界の各國土における情態の變化には此の如き轉換あれども、全國土を擧げて一時に然るにあらず、各團遞次に此の如き現象ありと云ふ。又是等の諸變移は一定の時期に起るにあらざれど、天人は早晚これに遭遇すべきものなりと云ふ、而して彼等はこれに遭遇するに先ち自ら之を知ることあらず。天人又云ふ、太陽はその實此の如く變化するにあらず、又其處を轉することなければども、天人自身の情態の上に、此の如き遞次の進行あるにより、太陽にも亦轉移ある如く見ゆるなり。そは主は何人にもその情態の如何によりて現はれ給ふに由る。人もし強度の愛にをれば、主に光あり、されど其愛衰ふれば、從ひて、主の光薄らぎ、遂に白くなるに至る。又天人の性質如何は、かの雲帯によりて表像せらる、而して太陽の光焰と光明との上に様々の變化ある如く見ゆるは此雲帯の作用による也。

百六十。天人もし最終の情態に居るときは、即ちその我念の中に住するときは、彼等その心に一種の悲傷を感ずるものとす。われ嘗て此状態にある天人と相語り、親しくその悲傷するを見たり、されど彼等はいくばくもなくして、復、舊時の情態に回り得べき望あることを曰へり。是時彼等は復た恰も天界に還るの想ありと云ふ。そは天人にとりて、所謂天界なるものは我念を離るることなければ也。

百六十一。地獄界にも亦情態の變化あり、されどこは地獄界を説くときに述べべし。

○天界における時間のこと。

百六十二。世間における如く、天界の萬事に繼續あり、進行あれども、天人は時間と空間との概念を有せず、彼等は實に全く此念を缺けり、故に空間の何たり、時間の何たるかは彼等の知らざる所とす。さればわれらはまづ天界における時間の何たるかを説き、次に空間に及ぶべし。

百六十三。天界における萬事は世間と異ならず進行すれども、天人に時間の概念なしと云ふことは、天界には年なく、日なく、唯情態の變移のみあればなり。年と日とある處には時間あれども、情態の變移ある處には只情態のみあり。

百六十四。世間に時間あるわけは、その太陽が次第を逐ひて一度々々進行する如く見え、これによりて一年中の時期を分てばなり、且つ太陽は實に地球を回ぐる如く見ゆるが故に、これによりて一日中の時限を定むるを得、而して是等の轉移は一定の期限を以て往來するもの也。然るに天界の太陽は相續的に進行し、回轉することなきが故に、年を成さず、日を成さず、但情態の變移の目に見ゆるあるのみなり、而して此變移の一定の時限内に起らざること、既に述べたる所の如し。故に天人には時間の概念なくして、情態の概念のみあり。此情態の何ものなるかは、上を見るべし(一五四)。

百六十五。天人は、世上の人間の如くに、時間より来る概念なきが故に、時間そのものゝ何たるを知らず、又之れに連關せる一切の事項を解せず、即ち天人は年、月、週、日、時刻、今日、明日、昨日と云ふ如き時間の區劃をすら知らざる也。故に人間の是事を語るをきく毎に、(天人は常に主に由りて人間と相交れり) 彼等は時間を問はずして、情態、及び情態に連關する事項を問ふ、かくして人間の自然的想念は、天人に在りては靈的想念となる。故に聖言の中に、時間と云ふは情態の義にして、さきに記せる如き時間の分劃は、これに相應せる靈的事物を表はすものとす。

百六十六。時間によりて存在する事物は一として前に言へる如くならざるはなし、即ち春夏秋冬と云へる如くならざるはなし。即ち春夏秋冬と云へる一年中の四季、朝、日中、夕暮、夜分と云ふ一日中の四刻、幼時、青年、成人、老人と云ふ人生の四期、及び其外一切時間に依りて存在する事物、又は時間に従ひて逐次相續する事物皆然らざるはなし。是等の事物を思惟するに當り、人間は時間の概念を離るゝ能はざれども、天人はすべて情態の上より之を思惟するが故に、人間の想念中、時間より来るものは、天人の間に入りては悉く情態の想念となる。春と朝とは第一情態における天人が居る所の愛及び證覺の境涯に對する想念となり、夏と午時とは第二情態における天人がをる所の愛及び證覺の境涯に對する想念となり、秋と夕暮とは第三情態における天人がをる所の愛及び證覺の境涯に對する想念となり、冬と夜とは地獄に在るものが是等の境涯に對する想念となる。聖言の中にて此の如き

事物を表はすに是等の時期を以てせるは之がためなり。(一五五) 人間が有する自然的想念は此の如くにして、人間に伴へる天人の間に入るときは、轉じて靈的となるや明かなり。

百六十七。かく天人は時間の觀念なきが故に、天人の所謂永遠なるものは、地上人間の思ふ所と異なるを知るべし、天人はこれを以て無限の時間となさずして無限の情態となせり。われ嘗て永遠と云ふことにつきて考へたる所あり、もし時間の念よりして永遠の何たるかを思惟するときは、これを以て終焉なき存在なりとなすを得べきも、かの永遠の昔より存在する所のもの、及び天地創造以前に在りて、神が永遠の昔より成し給ひたる所のものに至りては、此時間的觀念を以て推考すべからず。われこの事につき思ひ惑へるとき、自ら天界の境涯に到り上ることを得て、天人が永遠に對して如何なる知覺を有するかを會し、是時始めてその時間の上より思惟すべからず、情態の上よりすべきものなるを悟れり、是において永遠の昔より存すと云ふことも亦知得せらるべし。こはわが身の上に親しく起りたる所とす。

百六十八。天人、人間と相語るときは、決して人間固有の自然的想念に由りて説話せず、即ち時間、空間、物質、及び是等の事物に相似せるものより来る想念によりて説話することなく、必ずや天人の内々に生ずる情態、及びその種々の變化に由るものとす。されど是等靈的想念の天人に在るもの、下りて人間に入り來るときは、瞬時に自ら轉化して人間特有の自然的想念となる、而してこの自然的想

念は彼の靈的想念と相應して少しも缺損する所なし。而して人間と天人と互に其然るを知らざる也。天界より人間に入り來る一切の内流も亦此の如き性質を帶ぶるものとす。嘗て天人あり、常よりも深くわが想念中、特にわが自然的想念中に入り來れることあり、その想中には時間及び空間より來れるもの多かりしが、天人は此處に在りて何事をも會し得ざりしより、忽然として退き去りぬ。その去らんとするとき、われ彼等の打語ふをききたるに、彼等曰ふ、「われらは暗黒の中にありき」と。如何ばかり全く天人は時間の概念を缺けるかは、わが許されて親しく知るを得たる所なり。天界よりせる一個の天人あり、彼能く人間の有せる如き自然的想念の中に入ることを許されたるにより、その後わが彼と相語れるときは、人間相互の間における如くなりき。始めかれはわが所謂る時間とは如何なるものなるかを知らざりしにより、われは已むを得ず、これに關して充分の説明をなしたり、即ちわが地上にては、太陽は出沒するが如く見ゆるにより、これにて年及び日を定むること、かくして一年を四季に分ち、又月と週とに分ち、一日を二十四時間に分つこと、又この現象は一定の時期を以て往來循環すること、時間と云ふ概念はこれより始まることを説明したり。天人之をききて一方ならず驚きて曰ひけるは、「われ未だ嘗て此の如きことあるを知らず、唯情態の何ものなるかを知れるのみなりき」と。われ又此對談の序でに言ふ、天界に時間なきことは此世に知れをれり、少なくとも人間は之を知れる如く言ひなせり、そは死するものあるときは、彼等云ふ、彼は時間的事物を捨て去れりと、又云ふ、彼

は時間の外に出でたりと、即ち世界の外に出でたるを意味する也。われ又曰ふ、時間は情態より來ることを知れるものなきにあらず、そは時間は情動の情態に由ると云ふことあればなり、即ち會心、歡喜の情態に在るものは時を短しと云ひ、不快、悲痛の情動に在るものは、之を長しと云ひ、又冀望、豫期の状態に在るものは、之をさまざまに云ふ。是の理によりて、學者は時間と空間との性質を探究し、その中には時間の自然的人間に屬することを知れるもありと。

百六十九。自然的人間は或は思へらく、もし時間、空間、及び物質の概念を取り去れば、人は何等の想念をも有することなかるべし、そは人間の想念なるものは是等の概念の上に建立せらるればなりと。されど人間の想念にして、時間、空間、及び物質と相交渉する限りは、有限にして制約せらることをわするべからず、その能く限界を脱し得て、廣濶なるを得るは、是等の事物と沒交渉なるときにあり、何となれば心はそれだけ物質的、世間的事物の上に超出すればなり。天人の證覺を有するは之がためにして、その證覺を不可得と云ふは、世間的、物質的事物のみより成れる諸概念中に沒却せられざるを以てなり。

○天界における表像及び影像のこと。

百七十。自然的光明によりてのみ思惟するものは、天界にも世間の事物に似たるものあるを會得せ

す、その故は彼等は自然的光明によりて、天人は只心靈に過ぎずと推究し、而して心靈とは一種の氣體的精靈なりとの觀念を有し、此觀念の上に安定したるに由る。故に彼等は以爲らく、天人には人間の如き感官あらず、即ち天人は眼根を有せず、既に眼根なければ亦視覺の對境なしと。されど其實、天人は人間の有するすべての感官を具ふるのみならず、その感官は人間のに比して遙に精妙なり、天人が由りて見る所の光明は人間世界のよりも遙に光輝あり。天人は人間の最も圓滿なる相好を具へたるもの、而して亦一切の感覺を有することは前章述べたる所にて明なるべし。(七三より七七を見よ。)又天界の光は世間のよりも遙かに輝きあることも既に述べたり。(一二六より一三二を見よ。)

百七十一。天界にて天人が見る所の事物の何たるかを記述せんは數言の能く盡くす所にあらず、大抵は地上の事物に等しけれども、その相一層圓滿にして、その品數頗る多し。而して天界に此の如き事物あることは豫言者の所言によりて明かなるべし、即ちエゼキエルは新しき殿堂及び新しき世界のことを記せり、(第四十章より第四十八章を見よ、)又ダニエル(第七章より第十二章)、及びヨハネの黙示録(始めより終まで)を見よ。その外の人々の所見は聖言のうちにて史的及び豫言的文書中につきて見るを得べし。彼等は是等の事物を天界の啓けたるときに見たるものにして、天界の啓くることは、人の内視、即ち精靈の視覺、啓くるを言ふ也。天界に在るものは、その見るや、肉の眼を以てせずして、精靈の眼を以てす。主の心に協ふとき、これらの事物自ら啓く、そのとき人は肉體上の感覺によれる

自然的光明を離れて、その精靈よりする靈的光明の裡に上り來る也。わが天界の諸事物を見たるは、實に此光明のうちにてなりき。

百七十二。天界に現はるる事物は、大體において、地上の如くなれども、その實性に至りては異なれり。そは在天の事物は天界の太陽によれども、地上のものは世間の太陽によればなり。天界の太陽によりて存在するを靈的と云ひ、世間のに由りて存在するを自然的と云ふ。

百七十三。天界に在る諸事物は、地上に在るもの如くに存在せず。即ち天界一切の事物は、天人の内分との相應に従ひ、主に由りて存在するものとす。天人には内分あり、外分あり、内分における諸事物は愛と信とに交渉し、従ひて意志と智性とに交渉す、そは後者は前者を攝受する器なればなり。而してその外分は内分と相應す。この相應の事は上に述べたる所なるが、(八七より一一五、)今又之を上述の例、即ち天界の熱と光との例によりて解かんに、天人の熱あるはその愛の性質如何によるものにして、その光あるはその證覺の性質いかに由るもの也、(一二八より一三四を見よ、)天人の感覺にて認めらるるこれ以外の事物と雖、皆此の如くならずと云ふことなし。

百七十四。われ天人と相伍するを許されたる毎に、われは天人身邊の事物を見ること、正に世間の事物を見ると異ならざるを覺えたり。而して是等の事物の分明なる、われは單に此世に在りて、帝王の宮殿にでも上りたらん心地なりき。又われは人間相互の間におけるが如く、天人と相語れり。

百七十五。内分に相應する一切の事物は、亦是等の内分を代表するに由り、之を名づけて表像と云ふ、而して是等の事物は天人の内分の情態如何につれて轉變するが故に、之を名づけて影像と云ふ、されど天界にて天人の眼前に現はれ、彼等の諸感官によりて認識せらるゝ所の事物は、猶ほ地上において人間が諸事物を見るが如くに、躍然として天人の所見、所覺中に入り來る、實にこれよりも今一層歴々明々として一々指摘すべきものあり。是等の事物はかく如實に存在するが故に、天界にては之を如實の影像と云ふ。又如實ならざる影像あり、これらは實に所見の中に入り來れども、内分と相應せざるものなり。この事につきては後に述べべし。

百七十六。相應によりて、天人の視覺の上に現前するは如何なるものなるかを明かに示さんため、われは此に一例を擧ぐべし。智慧に在るものゝ前には、各種の樹木、花卉にて充ちたる園庭、及び樂園、現はる。是等の樹木は最も美しき排列をなし、枝々交差して園亭を作り、拱門あり、行逕あり、一々の美、言語の盡くす所にあらず。かの智慧に在るものは、是の如き樂園の裡を漫步して、花を摘み、華鬘を作り、これにて幼童を飾る。又樂園には種々の樹木花卉の、未だ曾て見ざるもの、世間に存在する能はざるものあり。是等の樹木は又智慧あるものが居る所の愛の徳如何によりて實を結ぶものとす。彼等が此の如き事物を見る所以は、庭園、樂園、果を結ぶ樹木、及び花卉は智慧と證覺とに相應すればなり。天界に此の如きものあることは地上にも知れをれど、之を知るものは、唯、善に在る

もの、及び自然界の光と、その儂りとによりて自己胸中にある天界の光を滅ぼさざりしものに限れり、そは彼等天界のことを説くに當り、彼處には目未だ見ざるもの、耳未だ聞かざるものありと思惟し、且つ言説すればなり。

○天人着用の衣類のこと。

百七十七。天人は人にして、人の地上における如く、亦團體的生活をなすが故に、天人は衣類、家屋、及び此類の事物、尙數多を有せり。されどその人間のと異なる所は、天人は一層圓滿の情態に居るが故に、一切の事物亦一層圓滿なることはなり。天人の證覺は人間のに優ること幾等なるを知るべからざれば、隨ひて彼等が所覺及び所見も亦然るものあり、そは天人の所見及所覺はすべて、其證覺と相應すれば也。(上を見よ、一七三。)

百七十八。天人が着用の衣類は、又其外の事物の如く、相應せり、而して是相應の故に、彼等の存在は亦如實也。(上を見よ、一七五。)而して天人の衣類は其智慧と相應するが故に、天界にあるものは皆其智慧の如何に従ひて衣服を着用せり。ある一部の天人はその智慧他に優れるが故に(四三、一二八)、其の着用せる衣類も亦他に優れて一際美はし。その智慧最も秀でたるものゝ衣類に至りては、火焰の如く輝き、又或は光明をもてる如く照りわたれり。その智慧此の如くならざるものは、其衣類、

輝きて白けれども、赫々の光あることなし。其智恵更に之に次ぐものは其衣類の色様々にして一ならず。されど最奥の天界にある天人に至りては、衣類を用ゐることなしとす。

百七十九。天人の衣類は其智恵と相應するが故に、又眞と相應せり、そは一切の智恵は神眞より來ればなり。故に天人の衣類は智恵の如何に由ると云ふも、神眞の如何に由ると云ふも、畢竟同じことなり。其衣類の或は火焰の如く輝くあり、或は光明の照らすが如きあるは、火焰は善と相應し、光明は善よりする眞と相應すればなり。其衣類の或は輝きて且つ白きも光輝を缺けるあり、或は其色種々にして一様ならざるあるは、神善及び神眞の光、此に輝くこと少なくして、智恵尙足らざる天人の之を攝受すること種々にして一様ならざればなり。輝きて白きは眞に相應し、色の様々なるは眞の一樣ならざる處に相應す。最奥の天界にある天人の衣類を用ひざるは、彼等の無垢なるに由るものにして、無垢は赤裸々に相應せり。

百八十。天人は天界にて衣類を着用するが故に、世間に現はるゝ時も彼等亦之を用ゐたり、即ち彼等が豫言者の見る所となりたる時、又は主の墓場に現はれたる時の如し、其時「その容貌は閃電の如く」、「其衣服は輝きて白かりき」と云ふ。(馬太傳、第二十八章、三。馬可傳、第十六章、五。路加傳、第二十四章、四。約翰傳、第二十章、一二。又約翰が天にて見たるものは、「細き布の衣」を着たりと云へり。(黙示録、第四章、四。第十九章、一四。智恵は神眞より來るが故に、主の化身にて出現し給へるときは、

其衣「輝きて光の如く白かりき」と云ふ。(馬太傳、第十七章、二。馬可傳、第九章、三。路加傳、第九章、二九。)此光は前に見たる如く、主よりする神眞なり(一二九)。是故に聖言には衣類を以て眞理と、これよりする智恵とを表はせり。約翰の黙示録(第三章、四、五)にある如し、曰く、「いまだ其衣を汚さざるものは白衣を着て我と共に行まん。彼等は然するに足るものなり。勝を得るものは白き衣を着せられん」と。曰く、「目を醒し、衣を着居るものは福なり」と(第十六章、一五)。イザヤはゼルサレムにつきて曰へることあり、此にゼルサレムとは眞理の中に在る教會の事なり。其言に曰ふ、「シオンよ、醒めよ、汝の力を着よ、聖き都、ゼルサレムよ、汝の美しき衣をつけよ」と。(第五十二章、一。エゼキエルに曰く、「われ汝に細布を纏はし、絹をもて汝の身をつとめり。汝の衣は細布と絹となり」と。(第十六章、一〇、一三。其他尙多けれど今之を省く。又眞理に在らざるものを以て、婚禮の衣服をつけざりしものと云ふは、馬太傳に、「王客を見んとて入りけるに、此に一人の禮服をつけざるものを見て、之に云ひけるは、友よ、如何なれば禮服を着けずして此處に來れるかと、かくて彼は外の幽暗きに投げ出されたり」とあるを見るべし。(第二十二章、一二、一三。)婚禮を祝へる家とは天界と教會とを表はせるにて、その故は、主、その神眞によりてこれと和合し給へばなり。聖言に主を花婿及び良人と云ひ、天界と教會とを花嫁及妻と云へるはこの故と知るべし。

百八十一。天人の衣類なるものは、たゞしかく見ゆるのみならず、如實に衣類なりと云ふことは、

天人自ら之を見るが上に、その手亦之に觸るゝにて明かなり、又彼等は多くの衣類を有して、或は之をぬぎ、或は之を着け、其不用なるものは、之を蓄へおき、用ある時に至りて、復之を着るを見て明かなり。天人が着用する衣類に様々あることは、わが千たびも見たる所にて、その何處より之を獲たるかと問へるとき、天人答へて曰ふ、こは主より來る、即ちわれ等は之を主の賜として受領す、又時には自ら知らずして、衣を着せらるゝことありと。天人又曰ふ、その衣類には變化ありて第一及第二の情態に居る時は、光り輝きて白く、第三と第四とには稍暈れり、而してこは亦相應より來る所にして、即ち上に見たる如く、(一五四より一六一) 智恵及證覺の如何によりて天人の情態に變化あればなり。百八十二。靈界にあるものは、すべてその智恵の如何によりて衣類を着用するが故に、從ひて智恵が由りて來る所の眞理如何によりて衣類を着用するが故に、地獄界に在るものも、亦一種の衣類を着用せり。されど彼等は眞理の外にあるを以て、かれらが着用せる衣類は、その癡狂の度によりて、破れ綻ぶること甚しく、その汚穢なる面をむくべからず。彼等は實に此以外の衣類を着くるを得ざるなり。主が彼等に衣類を着くるを許し給ふは、其赤裸々なるを曝さざらしめんためなりとす。

○天人の住處及家庭。

百八十三。天界に團體ありて、天人の生活、猶人間の如くなれば、彼等にまた住處あるを知るべし。

而して其住處の一樣ならざるは、その生活狀態の各相同じからざるによる。威嚴高きものゝ住處は崇高にして、之に次げるものはしかく崇高ならず。われ時に天界の住所に關して、天人と相語れることありき。其時われ云ふ、今の世、天人に住所あり、家庭ありと云ふことを信する者殆どあらざるべし、其理由は人によりて異なり、或るものは之を見たることなきが故に信せず、或るものは天人は人なりと云ふことを知らざるが故に信せず、或るものは天人が住める天界とは彼等が肉眼にてその身邊に見る如き天空なりと思ふが故に信せず。打見たる處、彼等の天空なるものは冲虚なるが上に、その天人なるものも亦一種の氣體的形態に過ぎずと想はるゝが故に、彼等は結論して云ふ、「天人は瀨氣中に住めり」と。加之彼等は靈界の事物にも亦自然界の如きものありと云ふを會得せざる也。そは彼等は靈的の何物たるかを知らざるによる。天人答へて曰ふ、われらも今の世に是の如き不覺あるを知れり、獨り怪しむべきは、此不覺、主として教會の中に行はれ、又所謂率直なるものよりも、有智の徒の多くこれに感染せること、是也。天人又曰ふ、天人の人なることは聖言によりても知らるべし、その中に現はれたる天人は皆人ならざるはなきに、主自らも亦其人格の全體を提げて世に來り給へり。天人既に人ならば、彼等に住所あり、家庭あることは、推しても知るべきにあらずや。又人間は天人を以て空中に飛翔するものと思へども、そは人間の不覺——天人は之を癡狂と云へり——に由るものにして、事實にはあらず、又天人は精靈と呼ばるれども、呼吸の氣にはあらずと。天人又曰ふ、人若し其

の先人の辟見を離れて、天人及び精靈の何たるかを思惟せば、是事を會得する難からざるべし。即ち彼等もし、「こは果して然るか」この疑問を起して、直ちに之を其思索上の主題となすことなければ、如上の事を會得する難からざるべし。そは何人にも一個普通の觀念ありて、天人は人間の形態を具ふること、「天界の住家」と呼ばるゝ居處を有すること、是居處の崇高なるは、地上のに比すべくもあらざることは、人の皆知れる所なり。天人云ふ、されど此に人ありて、「是は果して然るか」この疑問を起し來り、この疑點を以て思索の中心となすことあれば、天界より流れいれる、かの普通の觀念は、此に忽知として滅し去るべしと。こは主として學者の間に起る所にして、彼等は自作の智慧によりて天界を拒否し、光明の入り來るを杜塞する也。死後の生命に關する信仰につきても亦此の如きことあり。人若し此事を説くに當りて、別に靈魂に關する學問上の所得底を詮議することなく、又靈魂肉體再合の學説を思惟することなくして、此事を説かんには、彼は死後また人として生息することを信するなり、而してもし彼が在世中の生涯にして過なからんには、死後彼は天人の群に入ることを得て、崇大なる事物を見るべく、又歡喜を感受し得べしと信するなり。されど彼若し靈魂肉體再合説、又は靈魂に關する凡俗の臆説を思ひ煩ひて、「靈魂は果して此の如きものなるか」、即ち「是事果して然るか」などと思索せんには、彼は此時直ちに當初の觀念を放下し去るものとす。

百八十四。されど實地經驗の證據を擧ぐるに如くはなし。われ天人と面談したる毎に、われは彼等

の住所に在りて彼等と共なりき。而して其住所なるものは、わが地上の所謂家屋と正に相似たれどもその美しさは遙にこれに優れり。天人の住所には室あり、奥の間あり、寢室ありて、其數頗る多し、又中庭あり、これをめぐりて花園あり、小樹あり、田圃あり。天人の團體的生活をなせる處には、其住家互に接続し都會的に排列せり、大道あり、小路あり、廣辻ひろつじあること、わが地上の市街に異ならず。われは許されて、その道路を徘徊し、四邊を眺め、時にその家屋の中に入りたることありき。こは實にわが醒覺充分なる時の事にして、わが内視は啓け居れり。

百八十五。われ天界にてその崇大なること、言語に絶えたるばかりの宮殿を見たることあり。其上方は精金にて造れる如くに光を放ち、其下方は寶石より成れるが如かりき、而してその寶石の中には他に勝れて一層の光耀をもてるもありき。諸房内部の裝飾に至りては、之を記すべき言語なく、又知識あらず。南方に向へる處に樂園あり、此に在る一切の事物亦前と同じく光耀陸離たり。ある處には銀の如き樹の葉あり、金の如き果實あり、花壇にある花の色は紅霓の如く見えぬ。望極まる處に疆界あり、疆界の彼方に又宮殿あり。天界の建築は實に美術其物なりと思はるゝばかり也。されどこは不思議の事にあらず、此術實に天界より來ればなり。天人曰ふ、此等と、其外無數の事物の尙一層圓滿なるものと、皆主によりて天人の眼前に現はるれども、天人の之を楽しむはその目にあらずして寧ろその心にあること多しと云ふ、そは彼等は物毎にその相應を見すと云ふことなく、而してその神的事

物を見るは此相應に由れば也。

百八十六。相應のことにつきて、われは亦天人の言を聞けることあり、宮殿及家屋のみならず、此等内外の事物、至微の點に至るまで、悉く天人内分の事物に相應せずと云ふことなすと、此内分とは主よして天人のうちにあるもの也、即ち家屋そのものは、大體に於て天人の善と相應し、屋内様々のものは其の善を構成せる個々特殊の事物と相應し、屋外のものも善よりする真理及び其知覺と知識とに相應す。かく是等は天人が主よして有する所の善と眞とに相應するが故に、亦能くかれらの愛に相應し、從ひて其證覺と智恵とに相應するものとす。そは愛は善に屬し、證覺は善に屬すると同時に又眞に屬し、智恵は善より來る眞に屬すればなり。天人が如上の事物に對する時、感得するところ此の如くなるが故に、彼等は之を見て、其心を喜ばし、動かすこと、その眼よりも更に大なるを知るべし。

百八十七。是によりて、何が故に、主は自ら呼びてゼルサレムにある殿堂と云ひ給へるかを明かにすべし。(約翰傳、第二章、一九、二一)又何が故に新しきゼルサレムは精金にて作られ、其門は眞珠より其礎は寶玉より成れると見えたるかを明かにすべし。(黙示録、第二十一章)そは殿堂は主の神的人格を代表し、新らしきゼルサレムは、後來建つべき教會を表はせるに由る。その十二の門は善に入る真理を示し、其礎は由りて建つ所の真理を示せり。

百八十八。主の天國を組織せる天人は、大抵高き處に住まへり、そのところ地上を抜く山岳に似たり。主の靈國を作れる天人は今少し低き處に居れり、丘陵の如し。されど天界の最低に居る天人は岩石に似たる處に住へり。而して此等の事物亦相應により存在す。即ち内邊のことは高處に、外邊のことは低處に相應せり。聖言のうちに、高處を以て天國的愛を表はし、丘陵を以て靈國的愛を、岩石を以て眞を表はすは是故なりとす。

百八十九。又團體的に生涯せざる天人に至りては、家々別々に居れり。彼等が天界の中央を占むる所以は、かれらは天人中の尤なるものなればなり。

百九十。天人が住める家屋は、世上の家屋の如くに建てられず、主は天人が善と眞とを攝受する度により手に任せて、之を施與し給ふ。又上に述べたる如く(一五四より一六〇)、天人内分の情態變化するにつれて、其家屋も亦様々となる。天人の所有はその何たるを問はず、皆主の賜と稱へられ、彼等の要求するものは、一として施與せられずと云ふことなし。

○天界における空間のこと。

百九十一。天界の萬物が場所を占め、空間を占むるは、正に世間におけるが如くなれども、天人には場所及空間に對する概念あらず、知識あらず、かく言ふときは、必ず矛盾の甚しきものと思はるべし。

く、且つ此問題は極めて重要なるが故に、われは今之を明白にせんと欲す。

百九十二。靈界に於ける場所の變更は、すべて内分の情態の轉化によりて生ずるが故に、場所の變更は即ち情態の變化に過ぎずとなすべし。主がわれを導きて諸天界に到らしめ、又宇宙における諸世界の到らしめ給へるは、實に此の如くにてなりき。其時わが肉體は同一處にありて、動くことなかりしも、わが心靈は即ち諸方を遍歴せる也。すべて天人の動作は、此の如くならざるなし、故に彼等に距離なるものあらず、既に距離あらず、故に空間あることなし、但し情態と其轉變とはこれあり。

百九十三。場所の變更とは此の如きことを言ふものなるにより、近接とは内分状態の相似たるを云ひ、遠離とは相似ざるを云ふ。故に相似たるものは相近づき、相似ざるものは相離るゝ道理なり。又天界における空間と云ふは、只内分に相應せる外分の情態を言ふものなるを知るべし。各天界の分界、各團體の分界、及び各團體中個々天人の分界は、只此理由によりて定まるものとす。地獄界の全く天界と相離るゝ所以も亦此に存するものにして、兩者の情態は互に相容れざれば也。

百九十四。靈界にありては、亦同一の理由によりて、人もし其心を凝して他を見んと願はゞ、此願のみによりて其人現前すべし。こは想念の上に於て、相見るものにして、我身を其人の情態に置くなり、之に反し、兩人相隔離することあるは厭惡の情より來るものとす。而して厭惡はすべて情動の衝突と思想の不和とより來るものなるが故に、靈界に在りて、多數一處にあるとき、相見るは相和する

所あるによると知るべし、而も一旦相和せざるところあるに至れば、則ち皆解散して跡を留めず。

百九十五。今天人一處より他處に行かむとするに、或は市内にて、或は中庭にて、或は田園にて、或は其團體外にてするを問はず、かく願ふ心強ければ、其願ふ所に到ること速かにして、然らざるときは遅し。同一の路と雖も、其願力の如何によりて、長きことあり、短きことあり。われ屢之を見て怪しみき。しかも知るべし、天人に在りては、距離、從ひて空間なるものは、全く其内分の情態によりて存することを、又是故に、天界に空間あることは此世の如くなれど、天人には空間の概念と知識とあらざることを。

百九十六。このことは人間の想念によりて解説するを得べし、即ち想念には空間と共通せるものもあらず。人若し心に深く思ふことあれば、此事眼前に現はるゝ如く覺ゆべし。又少しく考へあるものは、視覚なるものは空間と相關せずして知覺せらるゝことを知るならむ。但し視覚の空間と相關することあるは、吾等地上にて物を見るに當り、これと同時に見る所の他の物體、その中間に存するときか、又は既に已にその距離を知れる場合に限れるものとす。何故に視覚と空間とは没交渉なるかと云ふに、そは連続性なるものあるによる、而して連続せるものには嘗て隔離と云ふことあらず、隔離は連続なき處に存する也。此理は天人の場合に於て特に然りとす。そは天人にありては、視る所は即ち思ふ所にして、思ふ所は即ちその情動なればなり。又前に言へる如く、天人の内分の情態によ

りて、物に遠近を生じ、變態を生ずればなり。

百九十七。この故に聖言には、場所、及び空間、及び空間に關する一切の事物によりて、情態上の萬事を表はせり、即ち距離、遠近、道路、旅行、滯留、里程、町數、平原、田畝、花園、都市、街衢、動靜、各種の度量、長さ、幅、高さ、深さ、及び其他無數の事物、皆情態のことに關せずと云ふことなし。そは人間の想念中にありて、世間より來れるものは、大抵皆空間と時間とに交渉すればなり。われは今たゞ長さ、幅、及び高さに就き、聖言中に何を示せるかを説くべし。世間にては、空間にありて長さもの、廣きものを、長し、廣しと云ひ、高さものを高しと云へども、天界にありては、其想を運らすに空間を本とせざるにより、長さは善の情態、廣さは眞の情態を表はし、高さは此兩者を度の上より見て區別(三八を見よ)することを表はせり、是等の事物を三種の度量によりて現はすわけは天界にては東より西を長さとして、愛の徳に在るもの此にあり、天界の南より北を廣さとして、善よりする眞に居るもの此にあり(一四八)、而して天界の高さは善と眞とを度の上より見たるを云ふなり。聖言の中に長さ、廣さ、高さを云ふときは此の如きことを表はせるものなることは、エゼキエルの中に見ても明かなり(第四十章より第四十八章)。此には、長さ、廣さ、高さによりて、新らしき殿堂と、新しき世界とそれに附屬せる庭、室、戸、門、窓、及び周邊のことを記載せり。すべて是等の事物は新らしき教會と、其中に具有せる諸善、諸眞を表はせるものとす。もし然らずとせば、是の如き

度量を用ひて何かせん。新らしきゼルサレムは、また同様の方法によりて黙示録中に下の如く記さる、曰く、「城は四方にして長さと同じ、彼竿をもて城を測りしに一萬二千フアロングあり。長さ、且高さ皆等し」と。(第二十一章、一六)。此に新らしきゼルサレムと云ふは新らしき教會のことにて、此等の度量はこの教會の事物に關せり。即ち長さはその愛の徳、廣さはその善徳よりする眞、高さは度の上より見たる善と眞とを表はし、一萬二千フアロングとは一切の善と眞とを悉く擧げて曰へる也。城の高さは一萬二千フアロングにて、其長さ、其廣さ、共に同じと云ふは、此外に何を意味するにすべきか。聖言中に廣さを以て眞を顯はすことは、ダビデを見て明かなり、曰く、「エホバよ、汝はわれを仇の手にとち込めしめ給はず、わが足を廣きところに立て給へばなり」と。(詩篇、第三十一章、八)。又曰く、「われ狭き處よりエホバを呼べば、エホバ答へて、われを廣き處におき給へり」と。(第百十八章、五)。尙伊賽亞書(第八章、八)、哈巴谷書(第一章、六)、及び其他を見よ。

百九十八。故に知るべし、天界には、世間における如く、空間あれども、何事も其空間によりて測量せられず、情態によることを。されば空間は、世間における如く測量せられず、唯情態によりて看得せられ、而して天人内分の情態に由りて量らるることを知るべし。

百九十九。これが第一の理由、最も緊要なる理由は、主は各人の愛と信とによりて其前に現はれ給ひ、而して此主の現前によりて、一切のもの或は遠く、或は近く見ゆると云ふことにあり。天界にお

ける萬事は主のかく現前給ふによりて限定せられ、天人の證覺も亦之よりす、そは天人は之によりて、その想念を延長するを得、又天界における萬物と相交通するを得ればなり、略して云へば、これあるがために、天人は人間の如く自然的に思惟せずして、靈的に思惟し得るものとす。

○天界において會同と交通とを規制する形式のこゝ。

二百。天界の形式の何たるかは、前章來述べたる所にて、略明なるべし。即ち天界は到る處、至大の形式よりその至小なるものに至るまで、同一様なること、(七二) 故に各團體は天界の小なるものにして、天人は天界の至小なるものなること、(五一より五八) 天人の最も證覺に秀でたるは中央に位し之を回りにて外邊に至るまで、しかく秀でざるもの居列べること、而してこは各團體においても皆同く然ること、(四三) 愛の徳にをる者は天界の東より西に至るまでを占め、善よりする諸眞にをるは南より北に居ること、而して此と同一様の排列亦各團體の中に存すること、(一四八、一四九) 是なり。是等の事はすべて天界の形式によりて然るが故に、此形式の性質いかんは、大體において、推知すべからむ。

二百一。天界の形式を知り置く必要あるは、天界にては、すべて此形式に順ひて、相會同するのみならず、一切の交通亦之によればなり、一切の交通、既に之によるにより、一切の想念と情動との延長も亦之により、從ひて天人の智恵と證覺とも亦之によるものとす。されば何人にも天界の形式中にある限りは、即ち一個の天界的形式たる限りは悉く證覺を有するわけ也。天界の形式と云ふも、天界の順序と云ふも、つまり同一なる所以は、總て物の形式は其順序により、且つこれに基くものなればなり。

二百二。此處にまづ、天界の形式中に在るとは、何の事なるかを少しく説かざるべからず。そもそも人間は天界の形像と世間の形像とによりて造られたるものにして、その内分は天界の形像により、外分は世間の形像によれり(五七を見よ)。此に形像によりてと云ふは、形式に基きてと云ふも畢竟同意義なりと知るべし。されど人間はその意の諸惡により、從ひて想念上の譴詆によりて、自家の胸中に藏したる天界の形像を壊り、從ひて天界の形式を壊りたるにより、却て之を補足せんとして、地獄界の形像と形式とをこゝに導き入れたるがため、彼が内分は生れながら閉塞するに至れり。人間が動物と異なりて、生來何事をも知らざるは是理による也。故に人もしその心のうちに天界の形像又は形式を回復せんとせば、天界の順序に關することどもを學得せざるべからず、そはさきに云へる如く形式は順序によるものなれば也。聖言のうちには神的順序に關する一切の律法を收め、是律法、即ち聖言の箴訓なれば、人にして此律法を學び、之に順ひてその生を營まんには、それだけ彼の内分は啓くるわけにして、天界の順序、即ち形像は復た此に新たに興り來るとなすべし。されば天界の形式のう

ちにあると云ふは、聖言中の諸箴を守りて、その生を送るの義なるや明か也。

二百三。何人と雖も、天界の形式中にあるうちは、天界にをれり、否、實に彼は一個至小の天界なり(五七を見よ)、故に彼は亦智慧と證覺とに居るものなりと謂ふべし。そは前に云へる如く、かれが智性よりする一切の想念と、その意性よりする一切の情動とは、天界の形式に従ひて天界の各方面に擴がりわたり、以て諸團體と交通し、諸團體も亦彼と交通すること、誠に不思議なるものあればなり。されど或は想念及び情動を以て、實際その周邊に擴がり行かぬもの、想念及び情動は只人の心の中にのみ存すると信するものあり。何となれば彼等が思惟する事物はその心の中にあり、自らの身内において、身外に離れをらざればなりと。されど此く信するものは大にあやまれり、われらの眼の視力は遠隔の物體にまで自ら擴がり行き、其延長の区域内にて見得らるる諸事物は、その順序によりて、われらの眼を刺撃する如く、智性よりする内分の視力も亦之と同じく、自ら靈界に擴がり行けども、既述の道理によりて(一九六)、われらは之を自覺することなきまでなり。但し兩者の相異なる所は、肉眼の視力は自然界にある事物によるが故に、其情動も亦自然的なれども、智性の視力に至りては、靈界にある事物によるが故に、其情動は靈的にして、皆善と眞とに交渉せざるはあらず。人自ら其然るを覺えざるは智性を照らす所の光明なるものあることを知らざるが故なれども、此く智性を照すべき光明なければ人は何事をも思惟するを得ざるものとす。此光明につきては、上來の所述を見るべし。(一一二

六より一三二)嘗て一個の精靈ありき、以爲へらく、其思惟する所は自家より出で、自家以外に延長することなく、從て他の團體と交通することあらずと。其所信の偽りなるを知らせん爲め、主は、彼と最も近接せる團體との交通をすべて切斷し給ひたれば、其結果として、彼は思考の力を奪はれたるのみならず、生命すらなきものゝ如くに斃れ伏して、只僅に其手を動かすこと、正に新生の嬰兒の如くなりき。良、ありて交通また回復し、次第に舊の如くなり行くや、彼はまた自家の意識に還るに至れり。このとき之を目撃したる諸精靈は、想念と情動とはすべて交通によりて流れ入り來るものなることを自白しき。想念と情動と既にかくの如しとせば、生活一切の事物、亦然りと謂ふべし、何となれば人生一切の事物は、能く思惟し、能く情動を感ずると云ふこと、即ち能く悟り、能く志すと云ふことの外を出でざれば也。

二百四。されど此に知らざるべからざること、智慧と證覺とは、その人の交通如何によりて、各相同じからざること是なり。若し其智慧と證覺とにして至純の眞及び善より成らむものは、天界の形式に従ひて諸團體との交通あるべけれども、其智慧と證覺と共に、至純の眞と善とより成らざるも、而かも尙眞、善と一致せる諸事物より成るものにおいて、其交通は斷續不定なるを免かれず、そは此交通、天界の形式に稱へる次第によらざればなり。かの惡よりせる偽りにをるがため、智慧なく、證覺なきものに至りては、その交通は只地獄界の諸團體との間に存するのみ。而してこの交通の範圍

は、各自善惡に安定するの度に比例するものとす。次に又知らざるべからざることは、此の團體との交通は在團のものが明かに知覺し得べき交通にあらずして、彼等が安住する所、彼等より流出する所の性相との交通なること是なり。

二百五。天界のものは、すべて靈の上の親和を本として會合す、即ちその順序に従ひて善と眞との上における親和なり。こは全天界と、各團體と、各家屋とを問はず、皆然らざるはなし。是故に同様の善と眞とに在る天人は、互に相知ること、猶ほ地上における親族、縁戚の間におけるが如く、彼等は幼時よりして相識るものに似たり。證覺及び智恵を成せる諸善と諸眞と、また此の如くにして各天人の心の中にありて相和同す、即ち是等の事物は上述の如くまづ互に相識り、互に相識るに従ひて、互に相集りて結合する也。故に天界の形式によりて、諸眞と諸善とを、その心の中に和合したるものは、事物を見るに當り、その甲乙相隨ひて次第をなすを認むべく、又一切の方面にわたたりて、此く連續不斷の相をひろく認むべし。されどその心のうちに諸善及び諸眞を和合せしむるに當り、天界の形式を本とせざりしものは、此の如くなるを得ざる也。

二百六。此の如きを各天界における形式となす、天人は之に従ひて相互の間に想念上及び情動上の交通と延長とを有し、又之によりて智恵と證覺とを具ふるものとす。されど諸天界間の交通に至りては之と異なるものあり、即ち第三天、即ち最奥の天と、第二天、即ち中間の天との交通、及び是等兩

天界と第一天、即ち最下の天との交通は、さきの如くに行はれず。蓋し諸天界間の交通は、これを呼びて交通と云はずして、内流と云ふ。今少しくこの事につき説くべし。天界に三つの度あることと、各度別なることとは、既に其章下にて記述せられたる所なり。(二一九より四〇。)

二百七。各天界間に交通なくして内流あることは、その相互の位置より見て明かなるべし。第三、即ち最奥の天界は上にあり、第二、即ち中間の天界は之が下にあり、第一、即ち最低の天界に至りては更に之が下にあり。而して各天にある諸團體も、またこれと同一様に排列せらるること、例へば山岳の態をなせる高處にある所の團體(一八八)の如し。此絶頂には最奥の天界に屬するもの居住し、此の下には第二天の團體あり、更に下りて最低の天の團體あり。その高處にあると否とを問はず、各天界を通じて此の如くならざるはなし。而して上天の團體は相應によりての外、下天の團體と交通することあらず、かくの如く相應による交通を名づけて内流と云ふなり。

二百八。甲天と乙天との和合、もしくは甲天の一團體と乙天のとの和合は、唯主によりてのみ行はるゝものとす、即ち直接と間接との内流による也。直接の内流とは主より直ちに來るもの、間接の内流とは上天より次第を追ひて下天に傳はるものを云ふ。かく諸天界間の和合は只主よりの内流に由りてのみ行はるゝが故に、上天の天人は下天の團體をのぞみ下すを得ず、又之と相語るを得ざるやう、極めて周到なる用意ありて行はる、何となれば、もし之をなすものあらむには、天人は其智恵と證覺

とを失ふべければ也。今その理由を説かむに、天界に三つの度ある如く、各天人の生涯にも、また三つの度ありて、最奥の天界にある者は、第三度、即ち最奥の度啓け、第二と第一とは塞がり、中間の天界に在るものは、第二度のみ啓けて、第三と第一とは塞がり、最下の天界に在るものは、第一度のみ啓けて、第二と第三とは塞がりをれり。故にもし第三天の天人にして、第二天の團體をのぞみ下して、之と相語ることあらむには、彼が第三度は即時に塞がるべく、而してこの閉塞と共にその證覺は亡せらるべし、そは彼が證覺は第三度に住して、第二及び第一にはあらざれば也。かの馬太傳中にある、主の言葉は此義を云へるなり、曰く、「皆屋上にあるものは、其家の物を取らむとて下る勿れ、田に在るものは、其衣をとりむとて歸る勿れ」と。(第二十四章、一七、一八。)又路加傳に曰く、「其日には人屋上にあれば其器具室にあるとも、之を取らむとて下る勿れ。亦田畝にある者も同じく歸る勿れ。ロトの妻を憶へ」と。(第四十二章、三一、三二。)

二百九。下天より上天へは内流なし、そは順序に逆へばなり。されど上天より下天へは是れあり。上天の天人の證覺は、下天の天人のに勝れること、萬と一とに比例すべし。是れ亦下天の天人が上天の天人と相語るを得ざる理由なり、たとひ彼等仰ぎ望むことあらむも、更に見る所なく上天は猶ほ雲の頭上にかゝれる如くなるべし。上天の天人は下天にあるものを見得べし、されど之と相語るを得ず、しかせんには、前に云へる如く、其の證覺を失はざるべからず。

二百十。最奥の天界にある天人の想念と、情動と、言語とは決して中天にて知覺せられず。そはこれらのもの中天のを超絶すること大なればなり。されど主の心に稱ふときは、上天に當りて火焰の如きもの下天に見ゆることあり。又中天に居る天人の想念と、情動と、言語とは光明の如きものとして最下の天界に見ゆ、時には輝きて種々の色彩ある雲と見ゆることあり。此雲、及び其上下する模様、及びその形態によりて、ある度までは、上天における天人の言説するを知り得べしとなす。

二百十一。此等の事物によりて天界の形式の何たるかを見得べし。即ち此形式は最奥の天にては最も圓滿にして、中天に至れば、尙圓滿ならざるにあらざれども、その度は下れり、最低の天界に下るに及んでは、その度今一層低きことを知り、又甲天の形式は主よりする内流によりて、乙天のために永く存在する所となるを知るべし。されど内流による交通の何たるかを知らんには、先づ高低の度の何たるかを知り、又此度と經緯の度と何如なる點において相違せるかを知らざるべからず。而して此等諸度の相異の何たるかは、上來既に述べたる所なり(三八)。

二百十二。天界の形式を、其細目にわたりて解すること、又この形式が如何に活動し、如何に流行するかを會するは、天人と雖も能くするところにあらず。聰明、睿智の人、もし人體における諸事物の形式を検査し、探究し、之より推して考ふるときは、天界の形式に關して、或はその大略を悟り得べからむも知れず。そは上に示せる如く、(五九より七二)全天界は一個の人身に似て、又人身中にお

ける萬の事はすべて天界に相應すればなり（八七より一〇二）。かの天界の形式の、如何ばかり會し難く、説き難きかは、身體の各部を連結せる神経纖維を見て、略、知り得べし。是等の纖維は何ものなるか、如何にして腦髓中に活動し、流行するかは、肉眼の見得る限りにあらず。頭腦中には無數の纖維ありて、互に交叉するの状、その集まれる所より見れば、柔かき、連続せる塊りに似たれども、意性及び智性よりする個々の活動は、皆此纖維によりて行はるゝこと疑を容れず。又是等の纖維が身中にありて如何に相結束するかは、様々の中樞、例へば心臓、腸、及び其外にあるものを見れば明なるべし。又神経節と呼ばれたる神経の束を見よ、數多の纖維、各局部より來りて此に集り、此に交雜し、又様々に連繋したる後、また此處を出て行き、外に在りて各其官能を全うす、而して此の如きもの一再に止まらざるなり、又各臟腑、各肢體、各機關、各筋肉の中にありても、此の如きことを見得べし。證覺の眼を以て、是等の事物と、その多くの不可思議とを檢するときには、只驚嘆する外あらざるべし。されど肉眼にて見得る所は僅少の部分の過ぎず、其の自然界の内面に藏れて、視覺の及ばざる所にあるものに至りては、更に一層の不可思議なり。此形式の天界の形式と相應することは、其形式のうちにより、これによりて動く所の智性と意性が萬般に發作するを見て明かなるべし。そは人、その意に決する所あれば、皆自らにして此形式の上に發作すればなり、又人苟も思惟するところあれば、その想は最初の發足點よりその末端に及びて、神経纖維の上に周流せずと云ふことなく、これよりして

此に感覺なるものあり、而して是形式はやがて想念と意志との形式なるが故に、亦智恵と證覺との形式なりとすべし。天界の形式に相應するものは即ち是なり。故に知るべし、天人の情動と想念とは悉く此形式に従ひて自ら延長するものなることを、又彼等、此形式中にある限り、智恵と證覺とに在るものなることを。天界の形式は主の神的人格よりすることは、上來既に述べたり（七八より八六）。今此等の事を記せるは、天界の形式は、其大體の原則すら、充分に探求すべからざるものなることを示さんがために、従ひて天人と雖、亦之を會得せざるは、既に述べたるが如し。

○天界に於ける統治制度のこと。

二百十三。天界は諸團體に分れ、團體の大なるものは數百千の天人より成り、（五〇を見よ、）又各團體中のものは、善に在ること相同じけれども、其證覺は則ち様々なるが故に、（四三を見よ、）必然の理として、天界にはまた統治の制度なかるべからず。そは順序は守らざるべからず、順序に關する萬般の事項は破るべからざればなり。されど天界における統治の制度は一樣ならずして、主の天國を構成せる團體には一種の制度あり、主の靈國を構成せる團體には又別種の制度あり、且又各團體の職掌の異なるに従ひてその制度も亦同じからざる所あり。されど天界には相愛の制度を外にして、別に制度なるものあることなく、此相愛の制度を以て天界統治の制度となす也。

二百十四。主の天國に於ける統治制度を正道と云ふ、何となれば天國の天人は皆主に對する愛（こは主よりする也）の徳にをればなり。此徳に住して行ふ所を、すべて正しと云ふ。天國における統治は只主のみに屬するものにして、主自ら天人を導き、又之に處世の事を誨へ給ふ。公義上の理法と云ふべき諸真理に至りては、彼等の心中に明記せらるゝを以て、天人として之を識り、之を知覺し、之を看得せざるはなし。故に公義上の事件は決して爭議の種とならざれども、正道上の事件、即ち各人躬行上の事件のみ、疑問となることあり。是の如き事件につきては、證覺少きもの、或は之を己れに優れるものに糺し、或は之を主に糺して、その決答を受くるものとす。天國における諸天人は只正道に従ひて、主の導き給ふまゝに生息するを以て、自己の天界となし、又極秘の歡喜となせり。

二百十五。主の靈國に於ける制度を公義と云ふ、そは靈國の諸天人は靈善にをればなり。靈善とは、隣人に對する仁の徳を云へるにて、其實性は眞なり、而して眞は公義に屬し、善は正道に屬す。此國土の諸天人はまた主の導き給ふ所なれども、間接なるが故に、（二〇八）こゝには統治者あり、其數の多寡は、各所屬團體の必要に従ふものとす。又こゝには律法ありて、天人はこれに遵ひて群居せり。統治者はこの律法に由りて諸事を統制す、彼等は證覺あるにより律法の何たるを能く解せり、もし疑ふ所あれば、則ち主之に明決を與へ給ふ。

二百十六。主の天國にある如き善によりて行はるゝ統治を正道と云ひ、主の靈國にある如き眞によ

りて行はるゝを公義と云ふが故に、聖言の中に天界と教會の事を説くに當り、其記事、正道と公義とに及ぶことあり。正道とは天國の善を表はし、公義とは靈國の善を表はすものにして、而して此靈國の善の、その實性において、眞なることは、既に上に述べたる如し。次に聖言中の句を引用するを見よ。曰く、「平和は窮りなかるべし、ダビデの位にすわりて、其國を治め、今より後、長へに公義と正道とをもて、これをたて、これを保ち給はむ」と。（以賽亞書、第九章、七。）ダビデとは主のことなり、その國とは天界なり、そは次の文句にて明かなり。曰く、「わがダビデに一ツの美しき枝を起す日來らむ、彼れ王となりて世を治め、道を行ひ、公義と正道とを世に行ふべし」と。（耶利米亞記、第二十三章、五。）曰く、「エホバはいと高し、高き處に住み給へばなり、彼はシオンに公義と正道とを充たし給ひたり」と。（以賽亞書、第三十三章、五。）シオンとは天界と教會とを曰へる也。又曰ふ、「われはエホバにして世に公義と正道とを行ふ、そはわれこれを悦ばばなり」と。（耶利米亞記、第九章、二四。）曰く、「われ汝を娶りて永遠にいたらむ、然り、正道と公義とをもてわれ汝をめとらむ」と（何西阿書、第二章、一九。）曰く、「エホバよ、天にある汝の正道は神の山に似たり、汝の公義は大なる淵なり」と。（詩篇、第三十六章、五、六。）曰く、「彼等正道の公義をわれに求め、神に近づくことを願へり」と。（以賽亞書、第五十八章、二。）尙他處を見るべし。

二百十七。主の靈國における統治の制度は一樣ならず、各團體によりて異なれり。かく一樣ならざ

る理由は、各團體が司るところの職掌一ならざるによる。この職掌の猶ほ人身中における諸事物の職掌に似たるは、彼と此と相應すればなり。而して人身中の各機關が掌る所の相同じからざるは、人能く知る所なるべし、即ち心臓には心臓の所掌あり、肺臓には肺臓の所掌あり、其他肝臓、脾臓、脾臓、及び各感官、皆その掌る所を別にせり。かく人身中諸機關の官能相異なるが如く、巨人體中、即天界における諸團體も亦其官能を一にせず。何となれば是等の團體の、人身の諸機關に相應することは、其の章下にて既に見たる所なればなり。(八七より一〇一)統治の制度なるものは、其形式の何たるを問はず、すべて公衆の福利を以て其目的となし、又これを通じて各個人の福利をすゝめんとせざるはあらず。天界にありて、能く此事の行はるゝ所以は、天界を擧げて皆一切を愛し給ふ主の指導の下にあればなり。又主は神愛によりて、天人をして全般の福利を標準となさしめ、この福利を愛する度に比例して、各其福利を全からしめ給へばなり。蓋し何人も其所屬の集團を愛する限り、一切を愛し、各人を愛すと云ふべく、而して此愛は主よりするものなるが故に、彼はまたそれだけ主の愛し給ふところとなり、その福利を享有し得べし。

二百十八。是等の事情によりて、統治者とは如何なる人物なるかを知り得べし、即ち是人は善と證覺とに居ること他に勝れるが故に、その愛よりして、一切の爲に福利を欲し、又その證覺よりして、此福利を如何に衆人の間に施行すべきかを知れり。此の如き統治者は其の威力によりて他を制し、他

を令することなく、却て之に事へ、之に使はる。何となれば福利を愛して他の爲に之を施すは、之に使はるゝなり、此福利を如何に施行すべきかを圖るは、之に事ふるものなればなり。統治者は又自ら尊大にすることなく、却て卑下す、それは團體の福利と隣人のことを第一位に置きて、自己の福利を最後に置けばなり、最後にあるものは是れ卑下するなり。されど彼等は名譽と光榮とを有てり、即ち彼等は團體の中位に住みて、其地位他に勝れて高く、又その住む所の宮殿は崇大なり。而して其光榮と名譽とを受くるは、自らの爲にあらずして、服従の故なりとす、それは彼等は其名譽と光榮とを主より享くることを知り、又他の己れに服従するは、之が爲めなることを知ればなり。主が諸弟子に次の如く告げ給ひたることあるは、此義に外ならず、曰く、「汝等のうちに大ならむことを願ふものは汝等の召使となるべし、人の子の來れるも人を使ふためにあらず、反て人に使はれんためなり」と。(馬太傳、第二十章、二六、二八)又曰く、「汝等のうち至大なるものは至小なるものゝ如くなれ、首なるものは事ふるものゝ如くなれ」と。(路加傳、第二十二章、二六)。

二百十九。此の如き制度は、至小なる形式において、亦各天人の家内に行はれをれり。即ち主人あり、家僕あり、主人は家僕を愛し、家僕は主人を愛し、愛によりて互に相事へり。主人は家僕に如何にして生を送るべきかを誨へ、又何事をなすべきかを告ぐ、家僕はその命を奉じて自らの務めを果たす。凡そ用を成就するは、すべて生あるものゝ樂しみとなす所なるが故に、主の國土は用の國土なる

ことを明むべし。

二百二十。地獄界にも亦統治の制度あり、統治なければ、之を制裁すべからざればなり。されど地獄における統治制度はすべて自愛より来るが故に、天界の統治と正に相反せり。地獄界にては、何人も他を制役して、自ら高からむことを願はざるはあらず、故に己れを喜ばざるものは之を憎みて必ず之に報のんと思ひ、又残忍を加へんと圖る、之を自愛の相となす。故に地獄にては、兇惡の甚きも統治者となりて他を凌駕す、而して他の之に従ふは、之を怖るればなり。この事につきては、尙地獄界の事情を記すに當りて、之を述べべし。

○天界における禮拜のこと。

二百二十一。天界における禮拜は、外面上、地上に於けるものと相異ならず、その相異なるところは内面にあり。即ち天界に教説あり、説法あり、殿堂あるは地上における如し。教説は、其主要なる點に於て、相同じけれども、天上のは地下のに優りて内秘の證覺より來れり。説法はこれらの教説を基として行はる。天人は家屋及び宮殿を有するが如く、(一八三—一九〇)亦殿堂をも有するが故に、説法は此處にて行はるゝなり。何故に天界に此事ありやと云ふに、天人は常にその證覺と愛との上において、具足圓滿ならむことをつとむればなり。蓋し天人に智性と意性とあるは、猶ほ人間の如くに

して、此智性も意性も共に益、圓滿になり得べきものなり。即ち智性は智恵に屬する諸眞理に由り、意性は愛に屬する諸善に由りて、常に圓滿の域に進みて止まざる也。

二百二十二。されど天界における禮拜そのものは、殿堂に詣て説法を聴くと云ふことにあらず、教説に遵ひて、愛と仁と信とを體せる生涯を營むこと是なり。殿堂内の説法は只處世の事項につきて教誨を垂るゝに止まる。われ嘗て此問題につきて天人と語れるとき、われ曰ふ、世人の信する所にては、禮拜とは、只殿堂に詣で、説法を聴き、一年三四回の聖餐式に列り、教會の條規に遵ひて、自餘の禮拜行事を行ふこと、及び別に祈禱の時なるものを設けて、其行動を敬虔ならしむることなりと。天人曰ふ、是等の事固より爲さざるべからず、されどこれは外面の所作に過ぎず、もしこれをして内分より出で來らしむるにあらざれば、皆これ等閑の事なり、而して此内分とは、教説の箴誡に遵へる生涯を云ふ也。

二百二十三。殿堂内における天人の集りとは、如何なるものなるかを知らむため、われは時に許されて其中に入り説法を聴くを得たることあり。説法者は東方に据ゑたる法壇の中に立ち、其面前には他に勝れて證覺の光明を得たるもの座わり、其左右には、しかく光明を得ざるもの座せり。聽衆はすべて説法者の視線内に入るやう、圓形を成して座を占む、説法者の兩側は其視線外に出づるを以て此には何人も居らず。新參の者は殿堂の東方、法壇の左方に當り、戸口に近く立てり。法壇の背後には

何人も座するを許さず、若し然らむには説法者之によりて其心亂るれば也。聽衆中にその説法と相稱はざる見解を有するものあるときも亦此の如くにして、此際彼は其面を背けざるを得ず。説教の證覺にて充てることは世上之と比すべきものならず、そは天界にては何人も内分の光明に住すれば也。靈國における殿堂は石造の如く見え、天國のは木造に似たり、そは石は眞に相應して、靈國の天人は此に居り、木は善に相應して、天國のものは此に居ればなり。天國における聖殿は之を殿堂と云はずして、神の家と云へり、その建築は崇大ならず、されど靈國のには多少の崇大あり。

二百二十四。われ嘗て殿堂内における聽法者の聖境涯せいぎやにつきて、一人の説法者と相語れることありき。彼言ふ、皆各、その内分に從ひて信に厚く、敬虔にして神聖なり、而して此内分とは愛と信とよりせるものにて、此中に神聖の自性を存せり、是れ即ち主の神格しんかくなるが故に也。彼又曰ふ、このほか別に外的神聖なるものを知らずと。かく彼れは愛と信とを離れたる外的神聖のことに思ひ到れるとき、又曰ふ、此の如きは技巧又は偽善によりて、神聖の外相を模擬せるものなるべし、自愛と世間の愛とより來れる一條の偽火に犯されて、此の如く神聖に似たるものを現出するなるべしと。

二百二十五。一切の説法者の來るは、主の靈國よりして、天國よりせず。その靈國よりする理由は、靈國の天人は善より出で來れる眞のうちにをりて、而してすべての説法は眞よりするものなれば也。説法者の天國より來らざる所以は、天國の天人は愛の徳に居り、此徳によりて眞を看得し、知覺すれ

ども、之につきて言説することなければなり。かく天國の天人は眞を知覺し、見得すれども、而かも猶彼等の中に説法あるは、何故かと言ふに、彼等は説法によりて己が既に知れる所を益、明かにし、又その未だ知らざりし數多の諸眞を得て、益、圓滿ならむと欲するに由る。彼等一たび眞を聞くことあれば、直ちに之を認識し、從ひて之を知覺す。その知覺する所の眞は、彼等之を愛して措かず、之によりてその生涯を營み遂に之をおのが境涯中に同化する。彼等云ふ、眞によりてその生を送るは、即ち主を愛するなりと。

二百二十六。説法者は皆主の命じ給ふ所なるが故に、彼等には説法の才あり、而して此以外の者は殿堂にて説法するを得ず。彼等と呼ばひて説法者となして、祭司となさざるは、天界の祭司を行ふものは、天國のみなればなり。祭司の職掌は、主に對する愛の徳を義とするものにて、天國の人は即ち此徳にをれり。天界の王權を有するは靈國にして、王權は善よりする眞を義とし、靈國のものは此眞にをれり。(二四を見よ。)

二百二十七。天人の説法中に述べらるる教説は、すべて此生を以て究竟となし、信を以て此生を離れたるものとなすはあらず。最奥の天界における説教は、中天のよりも一層證覺に充ち、中天の説教は最下天のよりも一層智慧に充てり、そはすべての教説は、各天における天人の知覺に順じて説かるればなり。而して諸教説の主眼とする所は、何れも主の神的人格しんじんかくを承認するにあらずと云ふことなし。

○天界における天人の力のこと。

二百二十八。天人に力あることは、靈界の事を知らず、又靈界より自然界へ内流あることを知らざるものと會し得ざる所なり。彼等以爲く、天人には力なし、何となれば天人は靈的なり、其精純にして形骸を離れたる、眼を以て見るべからざればなりと。されど事物の内面の道理に一層徹底したる者は、此の如く思惟せず。彼等は人間が有する力は、すべてその智性と意性とより來るを知れり、そはこれなくば、人は其身中の一塵をも動かす能はざればなり。智と意とは人の靈的人格にして、其身體と肢體とを左右して、心の儘なるを得るは之に由れり、その思ふ處は、之を口と舌とに説くべく、その欲する所は、之を其身に行ふべく、又その好む所にまかせて、自ら強ふするを得べし。人間の意と智とは、主が天人及び精靈に由りて、之を制御し給ふ所にして、而して人體中一切の事物は、すべて意と智とよりせざるはなきが故に、これらも亦主の制御し給ふ所なり。汝たどひ之を信することなからんを欲するも人は天界よりの内流なくしては一步をも動かさず得ざる也。その果して然ることは、多くの經驗によりて、わが見たる所とす。嘗て天人、主の許を得て、わが歩み、わが行動、わが舌根、わが言語をば、其好むに任せて制御せることあり、こは内流によりて、直ちにわが意と智との中に入りて、之を左右するものにして、而してわが經驗したる所は、われ自らは何事をもなし得ざりしと云ふこと

也。其後、彼等曰ふ、人間みな此の如くにして制御せらるることは、教會における説法及び聖言によりて人の知るところなるべし、何となれば人は神に禱りて、われを導き、わが行歩を向け、われを教へ、又何を考へ、何を言ふべきかを默示せんため、われに天人を遣はし給へと求むればなり。此の如き祈禱、尙此外に少なからず。されど教説の外に出で、自ら思索するものは、其言ふ所及び信する所は、之と異なれり。今是等のことを言へるは、天人は人間に對して如何なる力を有するものなるかを示さんためなり。

二百二十九。靈界における天人の力の大きなることを説かんに、わがこれに關して見たる一切の事物を此に提出することも、人はわれを信せざるべし、もしこゝに天人に反抗して、神の順序に逆ふ一事ありて、之を除く必要あるときは、天人は只一意力と一瞥とのみにて、之を投げ倒し、之を覆すを得る也。かくてわれは凶しきものゝ住める山の投げ倒されて覆へるを見、又時には此山の地震の如く一方より他方に震ふを見たり。かくてわれは又岩の裂けて淵に陥り、其上にをれる凶しきものゝ、水中に呑み込まるゝを見たり。われは又數百千の悪しき精靈が天人のために打散らされて地獄界に投げらるゝを見たり。天人に對しては、數の多少の如きは言ふに足らず、技巧あり、狡智あり、團結力ありと云ふも、亦その力を施す處なし。天人はすべてを一見して、之を打散らすこと瞬時にあり。パピロンの破滅を記すとき、尙此事につき言ふ所あるべし。實に此の如きを靈界における天人の力となす。

彼等若し主の許を受くるときは、自然界においても亦同一様の力を示し得ることは、聖言の中に明かなる所にて、即ち全軍を擧げて之を破滅したる時、又疫病を起して七萬の人之に死したる時の如し。此天人につきては、尙次の記事あり、「天の使その手をエルサレムに伸べて、これを滅さんとしたりしが、エホバ此害毒を悔いて、民を滅す天使にいひけるは、足れり今汝の手を住めよと。ダビデ民を撃つ天の使を見たり」と。(撒母耳後書、第二十四章、一五、一六、一七。)尙此外にもあり。天人には此の如き力あるが故に、亦彼等と呼ばれて力あるものと云へり。ダビデに曰ふ、「汝等エホバの天人よ、主をいはへよ、汝等力いと強きものよ」と。(詩篇、第百三章、二〇。)

二百三十。されど此に知らざるべからざるは、天人は自らの故に、力を有するにあらず、彼が有する一切の力は、皆主より出て来るものにして、彼等が力あるものとなり得るは、この事を認識するのみに由ること、是なり。若し自らの故に、かくの如き力ありと思ふ天人あらば、彼は忽ちに弱くなりて、一個の凶靈にだも抵抗し得ざるべし。故に天人は何等の功徳をもおのれに歸することなく、總てを主の力に歸し、其の所爲に對して、賞讃と光榮を受くるを嫌へり。

二百三十一。天界に於けるあらゆる力は、主より出て来る神眞の中に具はれり、そは神眞と神善と合一せるもの、即ち是れ天界における主なればなり。(一二六より一四〇。)而して天人の力を有し得るは、此眞を攝受するに由るものとす。又各人の各人たるを得る所以は、各自特有の智と意とに由

ものなるが故に、各人は自家所有の眞と善との上に出づること能はず。蓋し智性は眞に屬せり、智性の一切は諸眞より成ればなり、而して意性は善に屬せり、意性の一切は諸善よりなればなり。蓋し人はその會得するところを稱して眞となし、その欲する所を稱して善となすが故に、人は各そのをる所の眞と善との上に出づる能はずとなす。是を以て天人は神格よりする眞、及び神格よりする善なる限り、彼は力なり、彼はこのとき主と共なればなり。而して人は皆同一の善、同一の眞に居ることなきが故に、(天界には、世間における如く、無限の差別あり、二〇を見よ、)天人各自の力は決して同一様ならず。かくて巨人、即ち天界に在りて、その双腕を成せる天人は、最大の力を有せり、その故はこゝにある者は、他に勝りて眞の中に在るが上に、全天界における善、此の眞の中に流れ入り來ればなり。人身全體においても亦、その力は双腕に集り、全身は之によりてその力を運用するを得る也。故に聖言には手と腕とを以て力をあらはせり。是の故を以て、天界においては、時に赤裸の隻臂、現はるゝことあり。其甚大の力ある勢は、たとひ地上の岩石なりとも、其途に横はることあらんには、一撃に撃碎せられんばかりなり。此隻臂臂てわが方向に動けることありしが、われは其儘かにわが骨を碎きて粉末となすべきことを覺えたり。

二百三十二。主より出て来る神眞は、あらゆる一切の力を有し、天人は此神眞を攝受する度に順ひて、力を有することは、上來の所述にて明かなるべし。(一二七。)されど天人の神眞を攝受するは、

唯神善を攝受する時に限り、それは眞の力は善より來るものにして、善なければ、眞嘗て力あらざればなり。此と同じく、善に力あるは、眞によるものにして、眞なければ、善も亦力あることなし。力は實に兩者の和合より來るものとす。信と愛とにおけるも、亦此の如し、眞と云ひ、信と云ふも同じ事なり、それは信の一切は眞なるが故に。又善と云ひ、愛と云ふも同じことなり、それは愛の一切は善なるが故に。天人が善より來る眞の故を以て、大力を有することは、次の事情にて明なるべし、即ち一凶靈の嘗て天人のために一瞥を加へられたるだけにて昏倒して、また人間の相を粧はざりしことありき、而してこは天人がその眼を背くる迄、相續しき。天人の一瞥にて、此の如き結果を生ずるは、その眼に天界の光あるに由る、天界の光は、即ち神眞なり。上を見よ(一二六より一三二)。又眼は善よりする眞と相應せり。

二百三十三。善よりする眞に、一切の力あるが故に、惡よりする虚偽には毫しも力あらず。地獄にあるものは、皆惡よりする虚偽に在るが故に、眞と善とに對しては何等の力をも有せず。されど彼等は相互の間に在りて、如何なる力を有し、又地獄に投げ入れらるる以前、凶靈は如何なる力を有するかは、下章にて之を述べべし。

○天人の言語のこと。

二百三十四。天人の對話は、世上に於ける人間の對話の如くにして、その主題とする所も様々なり、家事あり、政事あり、道德及び精神上の事あり。されど天人の對話は一層內的なる想念より出で來るが故に人間の比して一層智慧に富めりと謂ふべく、此外兩者間に差違あるを見ず。われは屢々その許を受けて天人の間に交り、之と語ること朋友間の如くなるを得たり、又或るときは未知の人の如くにも語れり、其時わが情態は天人のご相似たりしにより、われはたゞ地上の人と相話する心地するに過ぎざりき。

二百三十五。天人の言語は人間の言語の如く、一々の言葉より成り、之をあらはすに音を以てし、之を聞くに音を以てす。天人には人間の如く口あり、舌あり、耳あり、又空氣の中に住めるが故に、此の空氣によりて其言語の發音曲折分明となる。されど此空氣なるものは靈的にして、靈體なる天人の生涯に順適せることをわするべからず。彼等は此氣を呼吸し、其呼吸の工合によりて、其言葉を發音すること、人間が人間の言葉を發するに異ならず。

二百三十六。全天界を通じて同一の言語あり、如何なる團體より來るも、その遠近に拘はらず、天人は互に其意を通じ得べし。彼等は之を學得することなく、自然にして、彼等が情動及び思想そのものより中より流れ出づ。言語の發音は其情動と相應し、言葉をなす所の發音の曲折は其想念の諸概念と相應せり、而して此等の概念は情動より來れる也。此の如く天人の言語には相應あるが故に、言語を

のものも亦自ら靈的なりと謂ふべし。即ちこれ情動の聲に發し、想念の口舌の間に出でたるものなればなり。凡そ觀察に周到なるものは、すべての想念は愛の情動より來るものにして、この中にある諸概念は一般的情動が自ら分派して現はるゝ差別の相なることを知れるならむ。情動なくしては一片の想念も、概念も有ることを得ず、其心靈と生命と皆實に情動より來ればなり、故に天人は他の所言のみによりて、其誰なるかを知り、又其音調によりて其情動を知り、發音の曲折、即ち言葉によりて其智性を知る。證覺に富める天人は、一聯の言葉によりて、如何なる情動が其人の心を統制せるかを悟るべし、そは彼等主として此處に留意すればなり。各人に様々の情動あること、即ち喜ぶとき、悲しむとき、忍辱、慈悲なるとき、率直、眞實なるとき、愛と仁とに在るとき、熱實、又は憤怒のとき、假裝、詐偽のとき、名譽、光榮を追ふ時など、様々の情動あるは、人の知る所なるが、是等の諸情動を通じて、其中に主となれる情動、即ち愛ありて存せり、而して證覺ある天人は、之を知覺するが故に、他の言語をききて直ちに其人の情態全般を知る。これわがために多くの經驗によりて證せられたるところなり。われ嘗て天人が人の言ふところを聞くのみにて彼が生涯を看破したるを聞けり。彼等亦曰ふ、他の想念中にある二三の概念を知れば、之にて其人一生の事物をすべて知り得べし、そは此等の概念によりて、かれが所主の愛を知り得ればなり。一切の事物は此の所主たる愛の中にありて一定の順序を亂さず、而して人の一生を書き記せる巻物と云ふは、實に此愛の外に出でずと。

二百三十七。二三の言葉を除くの外、天人の言語と人間のとに共通せるはあらず。此言葉は或る一個の情動より來る發音なり、されどその相同じきはその意にあらずして、たゞ音聲のみにあり。そは尙下に述べべし。天人の言語と人間との間に共通せるものなきは、天人が人間言語の一句をも發音し得ざるにて明かなるべし。彼等は之を試みたれども、能くせざりき。何となれば天人は自己の情態と全然相和するものにあらざれば、何事をも之を言葉の上に表はし得ざればなり。その情動と相和せざるものは、彼等の生涯にとりて、如何にも厭はしき所以は、彼等の生涯は情動より出で來るものにして、その言語は此生涯より發すればなり。われ嘗てきく、吾地上における最始の言語は天人のと一致しきと、蓋し彼等は之を天界より得たる也、又聞く希伯來語は之に似たるところなきにあらずと。二百三十八。天人の言語は、愛よりする情動に相應し、而して天界の愛は、主に對する愛と、隣人に對する愛となるが故に、(二三より一九)天人の言語の如何に精鍊にして、又如何に和氣を含めるかを明むべし、そは常に聽覺を動かすのみならず、亦實に之を聞くものゝ心の内分をも動かせばなり。嘗て一個の天人ありて、物の情を解せざる精靈に對して、もの言ひたることありしに、彼は其言語に動かされつ、涕を流して曰ひけるは、愛の言に發したるものなれば、抵抗せん力あらずと、又曰ふ、彼は嘗て涙に咽びたることあざりきと。

二百三十九。天人の言語は内的想念より發し來るにより、亦證覺に充てり、内的想念とは證覺なり、

猶は内的情動の愛なるが如し。而して言語に現はるゝは此愛と證覺と合したるもの也。これを以て其言語の證覺に充てるや、人間の十百言を費して尙ほ言ひ現はし難きことをも、天人は一言にて之を盡くすを得べし。又彼等が想念の中にある諸概念には、人間の會得し得べからざる事物を含めり、まして之を言語に發するにおいてをや。是故に曰ふ、天界にて見聞する事物は言説すべからず、耳の未だ嘗て聞かざるところ、目の未だ嘗て見ざる所なりと。われは其許を得、多くの經驗にて其然ることを知り。われ嘗て天人が居れる情態に導き進められ、此情態にありて彼等と相語れるとき、われよく一切を會し得たりしに、復わが舊態に歸り來りて、人間本來の自然的想念中に入るや、さきのことを憶ひ起さんと願ひたれど、われは遂に能くせざりき。何となれば天界には自然的想念の中にある概念と相適合せざる數千の事物あるが故に、かくの如きは、従ひて人間の言句にては、とても言ひ表はすべからず、只天界における光の色彩いろざねによりてのみ説き盡くすを得べければなり。天人の言葉をなせる天人の想念中にある諸概念は、亦之と同じく天界における愛の變態にして、言葉の音聲を起す所の諸情動は天界における熱の變態なりとす、その故は天界の光は神眞、即ち證覺にして、天界の熱は神善、即ち愛なればなり（二二六より一四〇）、而して天人は神愛よりして情動を有し、神的證覺よりして想念を有するものとす。

二百四十。天人の言語は、その情動より直ちに出来り、又さきに云へる如く（二二六）、想念中の

諸概念は一般的情動が自ら分派して現はるゝ差別の相なるが故に、天人は、人間が半時間にても言ひ得ざる所を、一分時中に説きて、猶ほ餘りあるを得べし、又人間が數頁を費して記し得たるところをも、天人は二三の言句にて説きあらはすを得るなり。こはわがために多くの經驗にて證明せられたる所とす。彼等が想念中の諸概念と、其言語中の諸語と合して一となること、猶ほ有力原因とその結果の如くなるが故に、即ち想念中に原因として存せる諸概念が結果となりて現はれ出でたるもの、やがてこれ天人の諸語なるが故に、天人の一語中には頗る多くの義理を含めるを知るべし。天人の想念中、従ひて其言語中にある個々の事物、もし眼に觸るゝときは、稀薄なる波濤、又は空氣の如くなりて、四面に流れ出づるやう見ゆることあり、此裡には、證覺より來る無數の事物の、一定の順序に従ひて存せるあり、他の想念中に入り來りて、その情動を促進す。人間たると、天人たるとを問はず、其想念中にある諸概念は、主の意に稱ふとき、皆天界の光に照らされて、眼中に入ることあるものとす。

二百四十一。主の天國にある天人は、主の靈國にある天人の如く言説すれども、其言語は一層内的なる想念より出で來る。天國の天人は、主に對する愛の徳にをるが故に、其言説は證覺より來れども、靈國の天人は、隣人に對する仁の徳（その實性は眞なること、二一五を昇よ）にをるが故にその言語は智慧より出で來る、何となれば證覺は善より來り、智慧は眞より來ればなり。故に天國の天人の言語は、靜かなる流水に似て、柔かに、且綿々斷えざるに似たれども、靈國の天人のは稍々震ひて、且

つ断續することあり。天界の天人の言語には「ウ」と「オ」との母音を見ること多く、靈國の天人のは「エ」と「イ」との母音に富めり。そは諸の母音は音聲の爲にして、音聲の中に情動あればなり。さきに示せる如く(二三二八)、天人の言語の音聲は情動に相應し、言葉を成すところの音聲の曲折は、想念中にある諸概念に相應せり、而して此等の概念は皆情動よりするものとす。母音は言語に屬せずして只各人が其情態に順ひて、様々の情動を表はさんため、音調によりて其言葉を高低するとき、用ひらるゝものなるが故に、希伯來語には母音を表はさず、又母音は様々に發音せらるゝなり。天人はこの音調によりて人の情動と愛との情状を知る。天國の天人の言語には堅き子音なし、又一個の子音より他の子音に移るとき、母音をもつて始まれる言葉を、其間に見ざるは稀なり。聖言のうちに「而して」なる文字の屢、用ひらるゝことは、希伯來語にて之を讀めるものゝ知る所ならむが、何故と云ふに、此言葉は母音に始まりて、母音に終り、その音柔かなればなり。希伯來語にて書ける聖言を見るに、或る點までは其文字を見るだけにて、其天國的なるか、はた靈國的なるかを知り得べし、即ちその善を含めるか、はた眞を含めるかを知り得べし。善を含める文字は、多く「ウ」と「オ」とを用ひ、又少しく「ア」を用ひ、眞を含める文字には「エ」及び「イ」の音多し。情動は主として音調によりて現はるゝが故に、人間の言語中、天界及び神など云ふ大題目を説くときには、「ウ」及び「オ」の母音ある文字を擇ぶ。音樂上の音聲も亦此の如き主題に關するときは、「ウ」及び「オ」の音を高むれども、かくの如く

重大ならざるものには、之を用ひず。是方法によりて、音樂術は様々の情動を顯はし得る也。

二百四十二。天人の言語中には一種の諧調あり、得て説くべからず。此諧調は、言語の由りて來る所の諸想念と諸情動とが、天界の形式に遵ひて、自ら溢れ出で、自ら展開する處より起るものにして、而してこの天界の形式とは、一切の事物が由りて以て會同し交通する所の形式なり。天人は天界の形式に従ひて會同すること、彼等の想念と情動とは亦之に従ひて流溢することは、上來既に見たる所なり。(二〇〇より二二一。)

二百四十三。靈界における如き言語は、各人に賦與せられたる所なれども、そは只彼の内的、智的方面に存するに過ぎず、而して此言語は、人間にありては、天人の如く、情動に等似せる言葉となりて出で來らざるが故に、人はこの天賦の言語中にあるを知らず。されど人の他生に入るや、他の所教を待たずして精靈及び天人の同一様の言語を用ひて、如何に説話すべきかを知れり、此の如きを得るは實に上述の因縁あればなり。されど此事につきては尙下に述べべし。

二百四十四。在天のものは皆一樣の言語を有せること上に言へる如し、されど此に相異の點あるは、證覺あるものゝ言語は、内的にして情動の變化に富み、且つ想念上の概念を含むこと多けれど證覺少きものゝ言語は、外的にして、又しかく充實ならず、魯直なるものゝ言語に至りては、益々外的にして、人間相互の間における如く、語句の中より意義を推度せざるべからざる也。又面貌を以てす

る言語あり、此言語は概念によりて曲折の音聲を發するが如きものにて其終局を結べり。又天界の表像を概念に和合せしめたる言語あり、又概念を目に見ゆるやうなしたる言語あり、又情動に相應したる身振りを以てする言語あり、此身振りは亦その言句にて表はせる事物と相似せるものを表はせり、又諸情動及び諸想念の一般的原義を以てする言語あり、又雷の如き言語あり、其外種々あり。

二百四十五。陰府に住める凶靈の言語は、亦情動より來るが故に自然なれども、その情動は凶惡にして、其概念は穢る、これ天人の最も嫌惡する所なり。故に地獄界の言語は天界の正に相反せり。凶惡の徒は天人の言語に堪ゆるを得ず、天人は亦陰府の言語に堪ゆるを得ず。陰府における言語は、天人より見れば、惡臭の鼻孔を衝くに似たり。偽善者は光明の天人の相貌を摸し得るにより、其言語だけにては天人のに似たることあらんも、其情動と、それより來る想念中の諸概念に至りては、天人のと全く相反するが故に、證覺の天人ありて、その内質を看破するときは、其言語はさながら齒を咬むに似たり、彼等をして恐怖の念を抱かしむ。

○天人と人間との談話のこと。

二百四十六。天人の人間と相語るときは、天人自らの言語を用ゐずして、其相手の言語及びかれが知れる所の言語を用ゆ、その人の知らざる言語は之を用ゐず。これは天人の人間と物言ふときは、自己

を轉じて人間に向ひ、之と相和合すればなり。而してこの和合は兩者をして相似の想念状態中に入らしむ。而して人間の想念は其記憶に附着して、其言語の根源となるがゆゑに、兩者は共に同一の言語中にありと謂ふべし。且つ又、天人或は精靈の、人間に來るや、自ら轉じて彼に向ひ、彼と和合するに至れば、その人のすべての記憶は、天人の前に現出すべし、此記憶中には彼の言語をも含みをりて、天人の深く自らその裡に入るや、その人の知る所を以て悉くわが自ら知る所なりとのみ思ふに至るなり。われ此事につき天人と語りて曰ふ、外見によりて判断するときは、天人はわれと物言ふに、わが母國の言語を用ゆと思へるなるべし。されど其實、この言語を用ゆるは、天人にあらずしてわれ自らなりき、そは天人は人間言語中の一字をも發音し得ざるに見て明なるべし、(二三七)人間の言語は自然的なれど天人のは靈的なり、而して靈的なるものは少しも自然的を會するを得ず。天人之に答へて曰ふ、天人が人間と談話するに當り、其人と和合するは、其人の靈的思想と和合するものなれども、其靈的想念流れて自然的想念中に入り、その記憶に附着して離れざるにより、其人の言語は、天人の如く見え、其人の知識も亦爾か見ゆるなり、こは主の特恵によりて、天人と人間との間に和合あらしめ、恰も天界を人間のうちに投入したる如くならしめ給ふに由る也。されど人間の情態は今や昔日の觀なく、天人との和合役あらず、却て天界以外の精靈と和合するに至れりと。われ又此事につき精靈と物語れるに、精靈はかく物語るものゝ人間なることを信せず、此人の中にある自分どもなり

と信じき。又彼等は人間を以て自ら知れる所あらず、知る所あるは只精靈自らなりとなし、従ひて人間が知る所の一切の事物は精靈より來れるなりと信じき。われは辯論をつくして其然らざることを説き、精靈を服せんとしたれども、その益なかりき。精靈とは誰か、天人とは誰か、後章精靈界の事を言ふに當り、これを説明すべし。

二百四十七。天人及精靈は何故に人間と和合すると爾かく密接にして、人間の所屬をすら彼等のものゝ如く思ふかと云ふに、今一の理由あり。そは人間にありては、靈界と自然界との和合、頗る密にして殆んど兩者を一と見做し得べき程なるに由る。されど人間は天界より自ら遠離したるにより、主は天人と精靈とをして各個の人間と共に居らしめ、此ものを経て人間を統制する方法を作りおき給へり、靈界と人間との間に、此の如き密接の和合あるに至れるは是を以てなり。人間若し自ら天界より遠離することなかりしならむには、此の如くならざりしなるべし。即ち人間は主によりて天界より出て來る一般的内流の統制する所となり、天人と精靈との同行を必要とせざりしなるべし。されど此事は天界と人間との和合を説くとき更に其細目を講せん。

二百四十八。人間と天人又は精靈との談話は、人間相互の間における如き音聲にて聞ゆれども、之を聞くものは、只其人のみにして、傍のものは預らざるなり。この理由如何と云ふに、天人又は精靈の言語は、まづ人間の想念中に流れ入り、内面の途を傳はりて其人の聽音器内に出づ、即ち内より此機關を動かせばなり。然るに人間相互の談話は、先づ空中に洩れ出で、それより外面の途をたどりて聞者の聽音器中に入る、即ち外より之を動かすなり。故に人間の天人又は精靈と談話するや、之を聞くこと内よりすと謂ふべし、されど其聽音器を動かす點に至りては、彼も是も同じきが故に、音聲も亦二様の曲折あるわけなり。天人又は精靈の言語は、内よりして耳に流れ下ることは、下の如くにしてわがために證據せられぬ、即ち天人又は精靈の言語は、口舌の間にも流れ入りて、少しく之を震ひ動かすこと、是なり、されどこの動き方は人間が自ら音聲を屈曲して、之を言語に發するときの如くならずと知るべし。

二百四十九。精靈と談話せんは危険なるにより、今日極めて稀に許さるゝところなり、そはもしかくするときは、精靈は人間と同伴せるを知るべく、かくせざるときは彼等此事實を知るの由なく、且つ凶靈の人間を憎惡するの刻甚なる、其靈魂と肉體とを併せて、之を滅ぼし盡さんとのみ願へばなり。而して此事の甚しく妄想に耽るものゝ間に行はるゝ所以は、彼等をして自然的人間に本より所屬せる歡樂より自ら遠ざからしめんためなり。又孤獨の生涯を營めるものにして、往々精靈の談話を聞くことあり、これには危険伴はず。又主は時々精靈を人間より取離し給ふ事あり、そは彼等をして人間と同伴せるを知らざらしめむ爲なり。何となれば大抵精靈は自己以外に世界あることを知らず、即ち人間なるものゝ彼等以外に存在するを知らざればなり。是の理によりて人間もし精靈に物言ひ返すを

許すときは、精靈は自己以外に人間あるを知るが故に、此事許されず。深く宗教上の事を考へ、専ら心を之に注ぐときは、その心の中におのが思惟せる所を見る事あり、此の如き人は亦精靈の談話を聞き始む、そは宗教の事は何たるを問はず、人若し己が心の中より之を考へて、世間における諸物の用によりて之を修正せざるときは、その事その人の内分に入り込みて、其處に居を定め、その靈魂を全然占有し、かくして此處に在住せる諸精靈を動かすに至るべければなり。此の如き人は空想に富み、又熱情に熾んなるが故に、その聴く所の精靈の何たるを問はず、悉く之を以て聖靈なりと信ず、而して其實彼等は僅かに熱狂なる精靈に過ぎざることを知らず。此の如き精靈は虚偽を以て真理となす、而して彼等は自ら之を看取るが故に、之を真理なりとして自ら疑はざるのみならず、亦兼て己が流入する所の人間をも説き勸めて之を信せしめんとす。然るに彼等は遂に人に悪事をも教へ、その之に従はむことを勸め始めたるにより、彼等は次第に他に移さるゝに至れり。熱狂なる精靈の他と異なる所は、彼等自ら精靈なりと信じ、又自ら言ふ所を以て神的なりとするにあり。是等の精靈は人間と往來するも其人を害することなし、そは人間は彼等を尊崇禮拜すること神の如くなればなり。われ折にふれて彼等と物語れるとき、われは彼等が悪事をその崇拜者に吹き込むを發見したることあり。彼等は左方に當り、荒原中にありて共同的生涯を營めり。

二百五十。天界の天人と相語ることを許さるゝものは、唯善よりする眞のうちに居るもの、殊に主

を承認し、主の人格中にある神格を承認するもののみなり、その故は諸天のある所以は實に此眞によればなり。何となれば主は天界の神なること(二一より二六)、又主の神格は天界を作ること(七より一二)、又天界における神愛とは之に對する愛、及び隣人に對する仁なること(二三より二四)、又天界全般を擧げて一個の人間に似たること、天界の各團體も亦然ること、各天人は圓滿なる人間の相好を有すること、而して此は主の神的人格よりすること(五九より八六)は、既に述べたる如くなればなり。故に天界の天人と物語るを得るものは、其内分神眞によりて、主に向ひ啓くるもののみなることを明むべし。蓋し主は其人の内分に流れ入り、而して天界はまた主と共に流入するによる、神眞の能く人の内分を啓く所以は、人は、其内的人格において、天界の肖像となり、外的に於ては世間の肖像たるやう造られたればなり。(五七)而して此内的人格の啓くは主より來る神眞にのみ是れ由ると云ふは、神眞は天界の光明にして、又天界の生命なるが故なり(一二六より一四〇)。

二百五十一。人間における主自らよりの内流は、其前額より始まりて遂に全顔面に及ぶ、そは人の前額は愛に相應し、其面は其内分一切に相應すればなり。靈的天人よりの内流は各方面より其頭中に入る、即ち前額及び顛顛より大脳の所在全部に至るまでなり、そは此局部は智恵に相應するが故に。されど天的天人よりの内流は頭中小脳の所在なる後脳と云へる局部、即ち耳より始まりて頸部全體にまで至る處より入る、そは此局部は證覺に相應するが故に。天人の人間と物語るとき、其所言は

此の如くにして人間の想念中に入るものにして、わが天人と話せるとき、その性格を知覺したるは此の如くにしてなりき。

二百五十二。天界の天人と物言ふものは亦天界の光によりて、そこに在る事物を見る。こは彼等の内分は此光の中にあればなり、而して天人は亦此内分を通じて地上の事物を見る、即ち此内分によりて、天界は世間と和合し、世間は天界と和合す。上に言へる如く(二四六)、天人自ら轉じて人間に向ふときは、此に天人と人間との和合あり、而して此和合によりて天人は人間所屬の事物、嘗に彼の言語のみならず、彼が視覺、聽覺をも天人のものと思惟するに至り、又人間の側にありては、天人を通じて流れ来る事物をば、自己のものゝ如く思惟するなり。地上における太古の人は始め天界の天人と和合せること此の如きものありき、故に彼等の時代を呼びて黄金時代と云へり。彼等は人間の相好をとれる神格、從ひて主を承認せるが故に、天界の天人と物言ふこと朋友の如く、天界の天人も亦人間を見ること朋友の如かりき、而して天界と世間とは彼等のうちに一となれり。されど此後人間は次第に天界より遠ざかりて、自己を愛すること主に勝り、世間を愛すること天界に勝り、終に自愛と世間の愛とよりする歡樂を以て、天界の歡樂より分離するに至れり。而して其極まる處は自己の愛と世間の愛とよりする歡樂の外、何物もなしとなせり。嘗てはかれの内分、天界に啓け通じたれど、今や塞がりて、その外分の世間に通ずるのみとなれり。此に至りて人間は世界の萬事にこそ明かになり行

きたれ、天界の事につきては、黑暗々の中に包まれ去りぬ。

二百五十三。是より以後、人間が天界の天人と物言ふことは極めて稀なり、但天界外の精靈と物言へることは之れあり。何となれば人間の内分と外分とは主を其共通の點として之に向ふか(一二四)、又主に背きておのれに向ふかの二途を出でざればなり、主に向ふものは初天に向ひ、己れに向ふものは亦世間に向ふ、而してこの後者を引き上ぐるは難事なれども、主は出來得る限り其愛を轉回して之を高きに至らしめんとし給ふ、即ち主は聖言より來る眞の力によりて之を成就し給ふなり。

二百五十四。われは主の如何にして豫言者と物語り、聖言を之に傳へ給ひたるかを聞けり、主は太古の人における如く、其内分に流入して之と語り給へるにあらず。主はまづおのが化相をもて精靈をみたし、之を豫言者に遣はし給へば、この精靈、主の靈にみちて、其言葉を豫言者に傳へたり。こは流入にあらずして傳達となすべし。而してこれらの言葉は主より直接に出で來れる所なるを以て、一神格にて充たされずと云ふことなく、其裡には皆内義を含めり。天界の天人は此内義を知覺するに、天的及び靈的意義を以てし、人間は自然的意義に従ふ。かく主は天界と世間とを和合するに聖言を以てし給ひたり。精靈は如何にして化相によりて主より來る神格の充たす所となるかは、わが示しを受けて知る所なり。主の神格に充たされたる精靈は、自ら主なること、又その所言の神格より出づることを知るのみにして、その他を知らず、而して彼はその言ふべき所を盡すまでは此く信すれど

も、一旦その使命を終ふるに至れば、自らは精靈に過ぎざりしこと、其所言は己れよりせずして、主よりせることを知覺し、又承認すべし。豫言者と物語れる精靈の情態は此の如くなりしにより、彼等は「エホバ曰へり」と言ひぬ。彼等また自らエホバなりと云ひし事あるは、聖言中の豫言的並びに歴史的部分に見て明なるべし。

二百五十五。人間と天人及び精靈の和合の何たるかを知らんため、此に一事の記述すべきことあり、此によりて和合の性質を解明し、且つ推測するを得べし。天人及精靈の自ら轉じて人に向ふや、彼等は人間の言語をもつておのれの言語となし、此以外にわが言語なしと思ふ。その理由はこの時彼等は人間の言語を用ひて、おのが言語を用ひず、且つ之を想ひ起すことなければなり。されど彼等また轉じて人間に背けば、再び天人的、靈的言語に還りて、人間言語の何ものたるを知らざるなり。われ嘗て天人の群に入り、彼等と同様の情態に居れるとき、亦此の如きことありき。當時われは天人の言語を用ひて、おのれ自らは知らず、又憶ひ起すこと無かりしが、一旦其伴を離るゝに及びてや、直ちにまた己のが言語中の人となりぬ。又此に注意すべきは、天人及精靈の轉じて人間に向ふや、如何なる遠距離にありても之と談話し得ることなり。われ彼等と物言へるとき、彼等は遠方においてたれど、其聲の大きさは、近きときと同じかりき。又彼等轉じて人に背くときは、たとひわが耳根に接して相互に物語りすることあらむも、われはたえて其何を言へるかを聞き得ざるなり。故に靈界において

る一切の和合は、彼等如何に其身を轉向するかによることを明ひべし。又此に記述すべき一事は、多數のもの同時に一個の人間と談話し、人間亦彼等と談話し得ること、是なり。そは彼等まづ其物言はんと思ふ人に對して一個の精靈を送る、かく送られたる精靈は、自ら轉じて人に向ひ、残りのものは此精靈に轉じ向ふ、彼等かくしてその想念を凝中すれば、此精靈之を説き出すべし。その時彼は只自ら之を言ふを覺ゆるのみにて、嘗て他を知らず、残りのものは亦彼等自ら之を言ふを覺ゆるのみにて、嘗て他を知らず。かくて多數のもの一個人との和合は、彼等皆轉じて此人に向ふとき成るものとす。此傳令者たる精靈を呼びて亦主者となす、されど此の精靈、及び彼によりて行はるゝ交通に就きては、後來尙説く所あるべし、

二百五十六。天人又は精靈は自家の記憶を基として人間と談話するを得ず、只人間の記憶を基とすべし、蓋し天人と精靈とは人間と同じく記憶あり。若し精靈にして自己の記憶によりて人間と談話せんには、人は其時思惟する事物を以て、其實精靈のものなるに拘はらず、只管之をおのれのもののみ思ふべし、こは其人が未だ嘗て見聞せざりしことを想ひ起すにひとことなすべし。其果して然ることは、わが許されて、親しく經驗したる所なり。是によりて太古の人の中には、數千年の後、またその過去の生涯に還り、其行爲を一切繰返すべく、又實に此く還れりと思へるものありき。彼等が此の如き結論に至れるは、その未だ嘗て見聞せざりし事物を記憶せるが如きこと、折々ありたるを以て

なり、而して此事の實にありしは、精靈嘗て自己の記憶を基として、人間想念中の諸概念に流入したることありたればなり。

二百五十七。此に又自然的、肉體的精靈と云へるものあり、此精靈人間に来る時は、他の精靈の如く人間の想念と和合せずして、其體中に入り來り、其諸感官を占有し、其口舌を以て語り、其手足を以て動作す、而して彼等は此等人間のものを以て、すべてわが物とのみ思へるなり。これを人間を魔魅する精靈となす。されど主は既に之を地獄界に投げ去りて、全く人間界より除き退け給ひたれば、此の如き魔魅は今日またあるを得ず。

○天界における文字のこと。

二百五十八。天人に言語あり、而して其言語は語字より成るが故に、彼等にまた文字あり。彼等は其心に起る感情を表はすに文章を用ひ、亦言語を用ひ。われは時に残ることなく文字をかける紙片、猶ほ手稿の如きもの、或は世間の印刷物に似たるものを受領したることあり。われは之を讀み得たること、世間の文字の如くなりしも、此中にて推考するを許されたるは、僅に一二の想念に過ぎざりき。その故如何にと云ふに、聖言の外は、天界より文字によりて訓誡を受くるは、神的順序に従へるものにあらざればなり、天界と世間と、及び主と人間との間に交通及び和合あるは、只此聖言にのみ

よるべきものとす。天界にて記されたる紙片は、豫言者の亦嘗て見たる所とす、エゼキエルに曰く、「時にわれ見るに、わがかたに精靈が伸べたる手ありて、其中に巻物あり、彼これを吾前にひらけり、其裏と表とに文字ありき」と。(第十一章、九、一〇。)又約翰の黙示録に云ふ、「われまた寶座に坐するもの、七つの印にて封印せる、内外に文字ある巻物を、その右の手に持てるを見たり」と。(第五章、一。)

二百五十九。天界に文字あるは、聖言の爲に、主が設け給へる所なり、こは、其實性において、神眞なり、而して人間と天人と共に、之によりて一切の天的證覺を獲得す、そは主の傳達し給ふ所なればなり。主の傳達し給ふ所は、次第を逐ふて諸天界を通過し、人間に至りて止まる。此の如くにして聖言は天人の證覺と人間の智慧とに適應するものとなれり。故に天人に聖言あり、彼等の之を讀むは猶ほ地上に於ける人間の如し。彼等の教説もまた此聖言より來り、説法之によりて行はる(二二二)。聖言は即ち相同じ、されどその自然的意義、即ち人間より見たる如字的意義なるものは、天界にあらず、天界には只靈的意義のみあり、是れその内義なり、此内義の何たるかは、「黙示録中の白馬につき」と云ふ小冊子によりて之を見るべし。

二百六十。嘗て天界より一小紙片のわれに來ることあり、其上には只二三の文字あり、希伯來語にて記されき、それに云ふ、おのくの文字に證覺の密意を藏す、而してその密意は文字の曲折及び

彎屈のうちにある、従ひて又聲音のうちにある。これによりて、われは主が宣^{のたま}へる次の言詞の意を明むるを得たり、曰く、「誠にわれ汝に言ふ、天地の盡きざるうちに、律法の一^一畫も遂げ盡さずして廢ることなし」と。(馬太傳、第五章、一八。)聖言は其一小畫に至るまでも神格ならざることなきは、教會の中に知れわたりをれども、神格は各畫中、何れの處に密藏せるかに至りては、未だ知れをらざる也、故にわれはこゝに之を説くべし。

最奥の天界にては、其文字の形状様々に屈折し、彎曲す、而してこの屈折と彎曲とは共に天界の形式に従ひて然るものなり。天人は之によりて其證覺上における密意、並びに亦言句にては説き得べからざる多くの密意をも洩らす。而して此に稀有なるは、天人は何等の習練を假らず、又教ふるものなくして、此の文字を知ること、これなり。こは彼等の言語の如く、天賦の能より出づるに由る、(二二〇一) 此文字は即ち天界の文字なり。その天賦の能より出づると云ふわけは、天人の思想及び感情の延長、従ひて其の智恵及び證覺の交通は、すべて天界の形式に従ひて發し來るものなればなり、(二〇一)。故に此文字も亦その形式中に流れ入る。われ聞く、わが地上に文字の未だ發明せられざりし以前、最太古の人は此種の文字を用ひたりと、又此文字、希伯來語の文字中に移り來り、古代にありては、その文字皆屈折して、今日の如く直線に終ることなかりしと。聖言は、その一小字、一小點、一小畫に至るまで、悉くその中に神的事物と天界の密意とを藏せざるなきは、此の如き次第に由るものとす。

二百六十一。此文字は天界の形式を具へたる字形より成り、最奥の天界にて用ひらる、此天界の所住者は其證覺自餘一切のものに優れり。彼等は此の文字にて主題の如何により一定の順序に従ひて諸情動を露はし、此の情動よりして諸想念流れ出づるが故に、此等の文字には、如何なる想念にても盡し難き密意を藏すと知るべし。われは嘗て許されて此文字を見たることあり。下方の天界には此の如き文字なし、そこにあるは世間のに似たり、字畫また然り、されど言語は天人の言語にして人間の共通せる所なければ、人間能く之を辨することなし。(二三七) 何となれば天人は母音にて其情動を露はし、子音にて情動よりする想念中の諸概念を露はし、是等より成れる言葉にて、その事の義を證ればなり。(上を見よ、二三六より二四一) われ亦此文字を見たるに、僅かの語辭の中に人間が數頁を費して尙ほ盡し難き想念を含みき。下天にありては此の如くして聖言を記し、最奥の天界にありては天界の形式によりて之を書せり。

二百六十二。此に記るしおくべきは、天界にて想念の自ら文字の上に流れ出で、少しも力を費やしたる痕なきは宛然想念そのものが溢れ出で來たるが如くなること、是なり、又天人は語句を撰ばんとてその手を止むることあらず、そは彼等が言ふ所、並びに書くところは、正にその想念中の諸概念に相應して少しもあやまらず、一切の相應は自らにして意を用ふるところあらざればなり。天界にはま

た手の媒介をからず想念の相應のみによれる文書あれども、それは永久ならず。

二百六十三。われまた天界よりの文書に、只數字を並べ續けたるさま、一字一語より成れる文書に似たるものを見たることあり。教ふるものわれに告げて曰ふ、こは最奥の天界より來る文書にして、(上に云へる所、二六〇、二六一)その天書中の想念下天の天人中に流れ下るときは、その文字は數字となりて見ゆ、而して數字的文書には密意を藏し、その中には亦思索の及ばざるもの、語字の表はし得ざるものありと。すべて數字には相應ありて、其相應に従ひて意義あること、猶ほ語字の如けれど、數字に寓する所は全般的にして、語字に寓する所は個體的なるの相違あり。而して一個の全般的は其中に無數の個體的を含藏するが故に、數字的文書は文字より成れる文書に比して、一層多數の密意を藏せりと謂ふべし。是等の事より、道における數字は、語字の如く亦事物を表はすことを明かにせり。二、三、四、五、六、七、八、九、十、十二の如き單數、及び二十、三十、五十、七十、一百、百四十四、一千、一萬、一萬二千など云ふ複數は何を意義するかは「天道密意」の中にてわが説きたる所なれば、つきて見るべし。かの天界における文書にば、一個の數量を劈頭に置けり、此列に従ひ續く所のものは、皆此數に所屬すること、猶ほその主格におけるが如くにて、此劈頭の數字は、此に所述せる主旨の見出しに似たるものなり、即ちその後に従ひ來る數字は、此先頭の數によりて、主題に對する特別の意義を定むるものとす。

二百六十四。天界につきては何事をも知らざるもの、天界を只純然たる氣體的のものに過ぎずと思ひて、其外を知るを願はざるもの、而して天人なるものは此氣體中にありて、視覺なく、聽覺なく、只智的心靈として飛翔すと信せるものは、すべての存在を物質界裡におくが故に、天人に言語あり、文字あることを到底思ひ得ざるなり。されど天界における事物の如實なることは猶ほ此世におけるが如くにして、天人は其生涯と證覺とに用あるものは、すべて之を所有せずと云ふことなきなり。

○天界の天人が有する證覺のこと。

二百六十五。天人の證覺の何たるかは、殆ど人間の會得する能はざる所とす、其人間の證覺を超越する、物の比すべきなればなり、而してかくの如く人間を超越するものは、虛無の如く見ゆるを常とす。之を説くべき事物なきにあらざれど、そは猶ほ不知に屬せり、而してその未だ知得せられざるに當りては、このもの智性中に在りて陰影の如く證覺そのもの體を蔽ひて見るべからざらしむ。されど是等の事物は可知のものなるが故に、之を知得し、亦會得すべし、但此裡に心の歡喜あらむを要す。歡喜心は愛よりするが故に、その中に光あり、而して神格と天界的證覺とよりする事物を愛するものには、その人のために光ありて天界より來り、此に開悟の状態あり。

二百六十六。天人の證覺の何たるかは、天人は天界の光明中にありと云ふ事より推論せらるべし。

天界の光明とは其實性において神眞なり、即ち神的證覺なり、この光明、天人の内視と外視とを同時に照破す、内視は心にあり、外視は眼にあり。天界の光明は神眞、即ち神的證覺なることは、既に見たる所なり（一二六より一三三）。

天人は又天界の熱に居れり、此熱は其實性において神善、即ち神愛にしてわれらが益々證覺に入らむとの情動及び願望を有するは此より來るなり。天界の熱は神善、即ち神愛なることは、亦既に見たる所なり（一三三より一四〇）。

天人は證覺に在ること、故に又彼等と呼ばれて直ちに諸證覺となし得べきことは、彼等一切の想念と情動とは天界の形式、即ち神的證覺の形式に従ひて流るるより推し得べし、又證覺を攝受する天人の内分は、此形式に従ひて排列せらるると云ふことより推し得べし。天人の想念及び情動は天界の形式によりて流るること、従ひて天人の智恵及び證覺も亦然ることは、上來見得たる所なり（二〇一より二一一）。

天人が卓越せる證覺を有することは、其言語は證覺の言語なるを見れば明かなるべし。何となれば其言語は直下に且つ意を用ゆることなくして天人の想念中、従ひてその情動中より流れ出づるものなればなり。是の故に此言語は情動よりせる想念を外に現はしたるものと謂ふべし。されば何者も天人を動かして神的内流と相離れしむることなく、又其言語中には人間の談話における如く、他の想念より

來れる外物あることなし。天人の言語は彼等が想念及び情動の言語なることは、是亦既に見たる所なり（二三四より二四五）。

又天人が眼にて見、感官にて知覺する一切の事物は、皆相應なるが故に、其證覺と一致せり、故にその對境となる事物は皆證覺に關係ある諸事物を表像する形態ならざるはなし。是事實によりて天人の證覺は益々超卓するに至る。天界に現はるる一切の事物は天人の内分と相應して、彼等が證覺の表像なることは既に見得たる所なり（一七六より一八二）。

且つ天人の想念は、人間の如く、空間及び時間よりする諸概念によりて束縛せられず、制限せられず、そは空間と時間とは自然界に屬し、自然界に屬するものは人の心をして靈的事物と相離れしめ、又智的視力をしてその延長性を失はしむればなり。天人の概念は時間及び空間の外にあり、故に人間の概念に比すれば無限なることは、既に見得たる所なり（一六二より一六九、一九一より一九九）。

又天人の想念は世間的、物質的事物に牽引せられず、又日常生活の要求に關する憂慮によりて其心を亂すことなきが故に、世上における人間の想念の如くならず、彼等は證覺上の歡喜に住してこれと相離ることなし、そは一切のもの、みな主の施與し給ふ所なればなり。主は彼等に衣類を施し、食物を施し、家屋を施し給ひ（一八一より一九〇）、又之に加ふるに、彼等は主より證覺を攝受するに従ひて、歡喜悅樂の賜を享くるなり。わが今是等の事を言へるは、天人は何處よりその卓絶せる

證覺を得たるかを示さんためなり。

二百六十七。天人が此の如く卓絶せる證覺を攝受するを得る所以は、彼等の内分啓けを以てなり、證覺の増進は、一切の圓滿性の如く、内分に向ひてするものにして、此内分啓けをれば、それだけ増進せるなり。各天人の生涯には、天界の三級に相應して三度あり（二九より四〇）、第一度の開け居るものは、第一即ち最下の天界にあり、第二度の開けをるものは、第二即ち中間の天界にあり、第三度の開けをるものは、第三即ち最奥の天界にあり。此度に従ひて諸天界に於ける天人の證覺に等差あり、最奥の天界にある天人の證覺が、中間の天界にあるもの證覺を越ゆること絶大なるは、是を以てなり。又中間のもの證覺が、最下級の天界における天人のに比して絶大なる所以も亦是を以てなり。（二〇九、二一〇、及び度につきては三八を見よ。）

此の如き等級ある所以は、高度にある事物は個々のにして、低度なるは全般的なればなり、而して全般なるものは、その中に個々なるものを包有せり。個々を全般に比すれば猶ほ數千又は數萬なる數と一とを對するが如し。而して上天の天人の證覺と下天の天人のとの比例は亦此の如し。されど下天の天人の證覺を人間のに比すれば、その優劣の度は亦此比例の如くなるべし。そは人間は形體の中にあり、形體に屬する感覺的事物のうちにあればなり、而して人間の形體的、感覺的事物は最低度に屬するものとす。故に感覺的事物によりて思索するものは、如何なる證覺を有するかを明むべし、是等

は所謂塵欲の人にして、その有する所は證覺にあらずして知識なり。されど其想念、感覺的事物を超絶し、殊に其内分、天界の光に向ひて啓けをるものに至りては、之と全くその趣を異にせり。

二百六十八。天人の證覺の如何に大なるかは、又次の事實によりて明かなるべし、即ち天界には萬物の間に交通ありて、何人の智恵、證覺と雖、他に傳通せずと云ふことなし、そは天界は萬善の集まる處なればなり。その理由は、天界における愛の性質たるや、己れにある所を亦他にもあらしめむと願ふが故に、天界にあるものは、すべて己にある善を以て善となさず、必ず之を他にもあらしめむとすればなり。是又天界における幸福の由りて起る所以にして、天人は實に之を主より獲來れり、主が神愛の性相、正に此の如くなればなり。天界に此の如き交通あることは、經驗によりて、わが知るを許されたる所なり。時に魯直なるもの、天界に導き上げらるることあるとき、彼等は此處にて亦天人的證覺を得、未だ嘗て會得せざりし事物をも知り、以前の境涯にては云ひ得べからざりしことをも語り出づるに至りき。

二百六十九。天人の證覺の何たるかは言語の能く盡くす處にあらざれども、大體にわたれる觀察によりて、之を説明せんは難からず、即ち天人は人間の一言を費して尙悉くす能はざる所をも、一言にて之を蔽ふことをよくす。其外天人の一言句中に無量の事物あることは、到底人間の言語に屬する文字にて、言表はし得る所にあらず、何となれば天人が説ける一箇の單語中にも、證覺の密意の重疊

連貫するありて、人間の知識の及び到る所にあらざればなり。天人は又その言語に用ゆる語字を以て充分顯はし得ざる處は、音調を用ひて之を補ふ、而してこの音調の中には諸事物の情動、序を逐ひて存せり、そは上來述べたる如く(二三六、二四一)、天人は音調によりて情動を現はし、情動よりする想念中の諸概念は語字にて之を現はせばなり。天界所聞の事物を以て不可説なりと云ふは、之がたとへ知るべし。

天人は又如何なる書卷中に載する所と雖、之を數言の中に説き悉し得ずと云ふことなく、而して各語の中に人をして内的證覺に登らすべき事項を含蓄せしめ得る所以は、天人の言語は情動と一致し、その各語は概念と一致すればなり。天人の語字は又其想念中に包含せる事物の連接如何によりて無窮に轉變するものとす。尙又内邊の天人は言者の音聲、及びその言ふ所の僅少の語字によりて、その人の一生を洞見し悉くすを得、何となれば天人はその語字中に含める概念によりて音聲の様々に變化するを察し、之によりて其人の所主たる愛の如何なるものなるかを知ればなり、而して其所主たる愛の中に、その人の一生は恰も銘記せられたる如く讀み得らるゝなり。

此等の事物より見て、天人の證覺の何たるかは明かなるべし。此證覺を人間のと比較するに萬と一との如し、又全身の諸動力の數は計り難きほどなるに、之より起る所の動作は、一物の如く人間の眼に映するが如し、又完全なる顯微鏡にて見るときは、物體を構造せる分子數千なれども、肉眼にて之

を見れば一個朦朧たる物體に過ぎざるが如し。

われ今一例を借りて之を説明せんに、嘗て一個の天人あり、其所覺に基づきて復活の事を説きたるに其中の密意を一々その順序に従ひて示すこと數百に及びき、而して一々の密意を充たすに更に内的密意を具へたる諸概念を以てし始より終に至れり、何となれば天人は如何にして靈的人格の新たに懷孕し、胎内に運ばれ、誕生し、成育して、而して次第に圓滿となるかを説きたればなり。彼曰ふ、密意は之を増して數千にも至り得べし、彼が今言へるは只外的人格の復活に止まれり、もし内的人格の復活を説かむには又其外に無數の事項ありと。われ天人より此等の事、及び其他此に類する事を聞きて、天人の證覺の如何に大なること、之に對して人間の無智の如何に深きかを明め得たり。何となれば人間は殆んど復活の何たるかを知らず、又その復活するに當りて、おのが經歷すべき道筋の一段階をも知らざればなり。

二百七十。第三天、即ち最奥の天界にある天人の證覺につきて今少しく説くべし、又その如何ばかり第一天、即ち最低の天界にある天人の證覺に優れるかを説くべし。第三天、即ち最奥の天界にある天人の證覺は最低の天界にあるものすら會し得ざる所なり、そは第三天の天人の内分は第三度迄開け居れども、第一天の天人の内分は僅に第一度に止まり、而して一切の證智は内分に向ふに隨ひて増進し、その啓けたる度に従ひて圓滿を加ふればなり。(二〇八より二六七。)

第三、即ち最奥の天界にある天人の内分は第三度迄開け居るが故に、神眞此に銘記せらる。そは第三度の内分は第二及第一度の内分よりも天界の形式に違ふこと一層完全にして、而して天界の形式とは即ち神眞より起り来るもの、故に又神眞の證覺に隨順するものなればなり。神眞が是等諸天人の上には銘記せらるゝこと、即ち本來彼等に賦與せられて、自ら然るが如く見ゆるは是がためなりとす。故に彼等一たび至純の神眞をきけば直ちに之を承認し、之を知覺し、その後之を看取すること、おのが心の上のものを見るが如し。

第三天の天人は此の如くなるが故に、彼等は決して神眞につきて論究することなし、まして「これは果して然るか、將た然らざるか」などゝ眞理を争ふに於てをや、又彼等は「之を信じ」又は「之に信をおく」とは何の義なるかを知らず、彼等曰ふ、「われ其然るを知覺し、之を見得す、それ何をか信と云はん」と。彼等は譬喩をとりて之を説く、曰く、例へば此に人あり、其友と共に一個の家屋及び其内外にある様々の物件をば、親しくその目を以て見たりとせよ、彼は其時其友に向ひて、「汝は此に是等の物件あり、而して汝の見る所の如く然りと信せざるべからず」と云ふべきか。又此に人あらんに、庭園に行きて其樹木及び果實を見、其友に向ひて、「汝は此處に庭園あり、此に樹木及び果實あることを信せざるべからず」と云ふべきか、彼は即今おのが眼を以て明かに之を看取せるにあらずや。是故に第三天の天人は決して信を説かず、又信の何たるを知らず、又神眞につきて論究せず、まして

「こは果して然るか、はた然らざるか」などゝ眞理を争ふをや。されど第一、即ち最底天界の天人の内分は、僅かに第一度まで啓けをるに過ぎざれば、神眞は此の如く其心の上に銘記せられず、故に彼等は眞理につきて論究することあり、而してかく論究する者の常として彼等は直接論究の主題となれる事柄以外には殆んど一物をも見るることなし、若しその主題以外に出づることあれば、そはある事物に據りて、今論究しつゝある事項を確定せんとするときなるべし、かくて之を確定し了れば、彼等曰ふ、「こは信上の事なりかく信せざるべからず」と。

われ此事を天人と語れるに、天人曰ふ、第三天の天人の證覺と第一天の天人の證覺との區別は、なほ明と暗との如しと。彼等は又第三天の天人の證覺を以て宏麗なる宮殿に比せり、而して此宮殿中一切のものは悉く其用あらずと云ふことなし、之を回りに四方に花園あり、此花園を回りにて宏麗なる様々の事物あり、而して是等の天人は證覺の眞理中にをるを以て、自由にこの宮殿の中に入ることを得て一切のものを見、又諸の花園に遊行して、東西南北可ならざるはなく、見る所一として其心を悦樂せざるはあらず。されど眞理につきて論究するもの、殊に眞理を争論するものに至りては然らず、何となれば彼等は眞の光によりて眞を見ることなく、或は他より傳へて之を攝受するか、或は聖言を內的に會得せずして只僅に文字的意義に之を解するかに止まればなり。故に彼等は云ふ、「こはかく信せざるべからず。こは信の力によらざるべからず」と、而して彼等は別に内觀の力を得んと願はざるな

り。天人曰ふ、此の如きものは證覺殿上の第一關にすら近づくを得ず、まして之より進みて花園に徘徊するをや。彼等は第一步にて止まれるものなり。されど眞其ものゝ中に在るものに至りては之と異なり、何ものも彼等が窮りなき進路を阻むことなし、彼等が見たる所の眞は、彼等何處に行くも彼等のために嚮導とならざることなく、彼等は遂に曠濶なる田野のその眼前に展開せるを見るに至るべし。蓋し一々の眞理に無限の延長あり、又自餘無數の眞理はこれと和合一致しをればなり。

天人又曰ふ、最奥の天界における天人の證覺と云ふは、主として一切の事物の上に神的、天的なるものを觀じ、又數個の連續せる事物の上に希有不思議の相を觀するにあり。何となれば彼等の眼に映する一切のものは悉く相應ならずと云ふことなければなり。即ち彼等の宮殿及び花園を見るや彼等の視力は只其目前に横はる事物に限られずして、其ものゝ由て來る所の内分にまでも徹底し、從ひて此等の事物の何ものに相應するかを見るなり、而して彼等の之を見るや、そのものゝ形相に從ひて之より來る一切の變態を盡くすが故に、彼等は同時に無數の事物を、其の次第と關係とに従ひて瞥見するものとす、而して彼等は之が爲めにその心を動かすこと甚深にして、歡喜の情措く所を知らざるものあり。天界にある一切の事物は、主よりして天人と俱なる神的事物と相應するものなることは、上來既に記せる所なり（一七〇より一七六）。

二百七十一。第三天の天人の此の如くなる所以は彼等主に對する愛の中にをればなり、此愛は心の

内分を開きて第三度に至らしめ、又證覺に屬する一切のものを受くる器となる。又次に知りおくべきことは最奥界の天人と雖、その證覺において尙圓滿ならむとすること、是なり、されど彼等が之に進まんとする方法は最低界の天人のと異なれり。最奥界の天人は神眞を記憶の中に蓄へず、從ひて之を知識上のものとなさず、彼等一たび之を耳にすれば、直ちに之を知覺して、之をおのが境涯中のものとす。故に彼等にとりては神眞は其心の上に銘記せらるゝが如く爾り、蓋しその境涯中に入るものは永く此處に住すべければなり。

最低界の天人は然らず、彼等はまづ神眞をその記憶中におき、之を知識として貯蓄し、其後之を呼び起して以て其智性を圓滿ならしめんとす、而して彼等は必ずしも其眞なることを內的に知覺したるにあらず、只之を願ひ、之を其生涯中に收めんとするものなるが故に、彼等は比較的蒙昧の境涯にありと謂ふべし。

又此に注意すべきは、第三天の天人が視覺によらず、聽覺によりて、其證覺を圓滿ならしむること、是なり、彼等が説法にて聞く所は其記憶に入らずして、直下に其智と意とに入り、其生涯の上に同化せらる。されど彼等の眼にて見る所のものは、その記憶中に入り、彼等が論究及び説話の主題となる。故に知るべし、此天人にありては、聽覺は即ち證覺に到るの道なることを。而して是亦相應よりする也。何となれば耳根は隨從と相應し、隨從は即ち生涯に屬すれども、眼根は智恵と相應し、智恵は教

説に屬すればなり。此等天人の情態につきては聖言のうち處々に記述せり、耶利米亞記に曰ふ、「われわが律法をかかれらの衷におき、その心の上に記さん。人おのゝ其隣と其兄弟に教へて、汝エホバを知れとまた言はじ、そは少より大に至るまで悉く我を知るべければなり」と(第三十一章、三三、三四)。又馬太傳に曰ふ、「爾曹たゞ然り／＼否々と言へ、これより過ぐるは惡より出づるなり」と(第五章、三七)。これより過ぐるは惡より來るなりとは、主よりせざるを云ふなり。何となれば第三天の天人は主に對する愛に居るが故に、彼等のうちにある諸眞は主よりすべければなり、此天に在りては、神眞即ちその主なるが故に、神眞を志し且つ之を行ふを以て、此天における主に對する愛となす。

二百七十二。何故に天人はかゝる卓絶なる證覺を受くるに足るか云ふ理由、今一ツあり、而してこは實に天界にありては最も首要とする所なり、曰く、天人は自愛を離る、何となれば人は自愛を離るゝに比例して神的事物の上に證覺を増長するものなればなり。人をして主及天界に逆向して其内分を塞がしめ、これと同時に自我に對しては、その外分を開きて之に向はしむるものは、實に此自愛なり、故に自愛を所主とするものは、いかに世間の事物に通曉することあらむも、天界の事物に關しては黑暗々の裡にありと云ふべし。天人は之に反して自愛を離るゝにより、證覺の光明中に在り。蓋し彼等が居る所の天界の愛、即ち主に對する愛と隣人に對する愛とは、主よりするものにして、天人の内分を啓かしむ、而して主自らは此裡に居ませり。是等の愛は、全般的に見て、天界を作り、個體的

に見て、各人のうちに天界を作成することは、既に見たる所なり(一三より一九)。

天界の愛は内分を開きて、主に向はしむるが故に、一切の天人は亦其面を主に向はしめすと云ふことなし(四二)、何となれば靈界にありては、各人は愛によりてその内分を轉じて之に向はしめ、又如何なる方向にその内分を轉ずることあるも、愛は其人の面貌をして亦之に向はしむればなり。蓋し人の面貌はその内分と一致するものにして、即ち内分の外に現はれたる也。かく愛は人の内分と面貌とを轉じて、己れに向はしむるが故に、愛は亦自ら是等のものと和合す、愛即ち靈的和合なればなり、故に又愛は自ら有する所の一切を舉げて之を他に交付せんとす。天人が證覺を有する所以は、此の如き轉向と、之よりする和合及び交付とによるものとす。靈界における一切の和合が、此の轉向によりて生ずることは、既に見えたり(二二五)。

二百七十三。天人は絶えず其證覺をして益々圓滿ならしめんとす、されど如何に之を圓滿にして、永遠に至るとも、その證覺は到底主の神の證覺に比し得べからず、主の神の證覺は無限にして天人のは有限なり、而して無限なるものは、遂にその比を有限なるものゝ中に見出すべからず。

二百七十四。證覺は天人を圓滿にし、且つ其生涯をなすものなるが故に、而して又天界は天人の證覺に従ひて、その諸善徳と共に、各人の上に流れ來るが故に、天界に居るものは、皆證覺を願ひて之を求むること、宛然饑人の食を求むるに似たり、何となれば食物の自然的營養なる如く、知識と、智

恵と、證覺とは靈的營養にして、而してこれらのものは相互に相應すればなり。

二百七十五。同一天界中の天人、又は同一團體中の天人と雖、皆同一の證覺にをらず、其間に等差あり。中央にあるものは其證覺最も大にして、之を回りにて邊隅に在るものは之に次げり。證覺の減退が、中心を去る度に比例するは、光の次第に衰へて影に近づくが如し。(上を見よ、四三、一二八。) 人の光明はまたその證覺の度と一致せり、そは天界の光明は神的證覺にして、各人は其證覺を受くる度によりて光明中にをればなり。天界の光明及び之が攝受の様々なることにつきては上を見るべし。(一二六より一二二)。

○天界における天人の無垢なる情態のこと。

二百七十六。何を無垢と云ひ、何を無垢の性相となすかを知れる者、世に少なし、惡にをるものに至りては全く之を知らず。こはわれら、特に小兒の面、言葉及び身振りに現はれて、われ等が眼前に見る處なれども、人は無垢の何たるかを知らず、况して天界は此のうちにありて、人間の内面に住するものなることをや。されば今その何たるを知らむため、われは次第を逐ひてまづ嬰兒の無垢を説き、次に證覺の無垢、終りに無垢の點より見たる天界の情態を説くべし。

二百七十七。嬰兒又は小兒の無垢は、無垢の至純なるものにあらず、そは只無垢の外相にして其内相にあらざればなり、されど之によりて無垢の何たるかを學び得べし。何となれば無垢は小兒の面門及び其身振りの一部、及び當初の言葉遣ひより輝き出で吾等を動かせばなり、而してこは彼等其内に思ふことなきによる、即ち彼等は未だ善惡の何たるを知らず、又眞偽の何たるを知らざるによる、而して之を知るを以て想念の起りとなす。故に小兒には我執より來る裁智なく、企圖なく、又有意の目的なし、從ひて惡意の計算あらず、彼等には自己及び世間の愛より獲來れる我相なるものなし。彼等は一物をも自己の有と思はず、其攝受するところのすべてを舉げて其兩親に歸せり。彼等が受くる所の事物は微にして且つ少なけれども、彼等は之に満足し、之を悦樂す。彼等は食物、衣服の事を憂へず、又未來を思ふことなし。彼等は世界をながめて、此にある無數のものを自家の所有となさんと願はず、只其愛するところは兩親と、乳母と、相共に嬉戲する同輩の嬰兒とのみ。彼等は他の導く儘に一任し、その言ふ所を聽きて之に従ふ。彼等此の如き情態にをるが故に、一切のものを受けて之を其生涯の中に收め入れて、而して自ら之を知らず、即ち彼等は此よりして禮節を得、言語を得、記憶と知識との初歩を得るなり、而して之を受け、之を植うる媒介となるものは、即ち彼等が無垢の情態なり。されどこの小兒の無垢なるものは、上に言へる如く外的なり、只肉體に在りて心に在らず、そは彼等の心なるものは未だ成らざればなり。心とは智と意となり、及び之よりする想念と情動となり。われ嘗て之を天界より聞けり、曰く、主は殊に意を小兒に留め給ひ、彼等が受くる所の内流は最

奥の天界より来る、此天界には無垢の情態あり。而して此内流は彼等の内分を通過し、その通過するに當りて、彼等の裏に動かさるゝは、只その無垢の情態のみなり、故に無垢は其面に現はれ、其身振りの一部に現はれて、蔽ふべからず。小兒が父母の心を最も内的に動かして、其慈愛の情を惹起するものは此無垢に外ならずと。

二百七十八。證智の無垢は内的なるが故に、これを無垢の至純なるものとす、何となればこは心そのものゝ上にあり、従ひて意そのものゝ上、又之よりして智の上であればなり、此の如くにして、是等のものゝ上に、無垢あれば證覺亦此にあり、そは證覺は意と智とに屬するに由る。故に天界に在りては曰ふ、無垢は證覺に住せり、天人は證覺の度に比例して無垢なりと。その然る所以を確かしむること次の如し、それ無垢の情態にあるものは、一切の善を以て自己に歸することなく、すべて之を主よりの賜となして、之を主の身に歸し、又自主の行動をなさず、只主の導き給ふまゝに作爲せむと願ふ。彼等は一切の善事を愛し一切の眞實を欣ぶ、そは善事を愛して、之に志し、之を爲すは是れ主を愛するものなること、而して眞實を愛するは、是れその隣人を愛するものなることを知り且つ感ずればなり。彼等は其有する所に安じて、その多少を問はず、そは彼等を饒益するに足るものは、彼等すべて之を享有するを知るに由る、少しきを得て饒益全きものは、少しきを得て之に安じ、多きを得て饒益全きものは、多きを得て之に安ず。彼等自らは何物が果して彼等を饒益するかを知らず、そは

只主のみの知り給ふ所なればなり、一切萬物の中に永遠の目的を定め給ふは主の聖智なり。

故に彼等は未來を憂へず、未來の憂は彼等之を呼びて明日の心配と云へり、而して曰く、こは其生涯に用なきものを失はんことを思ひ、又受け納めざらむことを思ふるなりと。彼等の同輩と共なるやその行爲の背て惡意より出でたるはあらず、常に善と義と誠とを旨とせり。彼等は惡意より起れる行動を呼びて譎詐となし、之を避くること毒蛇の如し、そは全然無垢と相反するに由る。彼等は主によりて導かれんことをのみ欣び、又自ら有するものをすべて主に歸するを欣ぶが故に、彼等は我想を離る、而して我想を離るゝに従ひて、主は彼等のうちに流入し給ふ。故に彼等は主より聴くところ、その聖言によると説法によるとを問はず、之を記憶に置くことなく、直下に之に順ふ、即ちその意志直に是れ其記憶なるが故に、彼等はきくがまゝに、之を志し、之を行ふなり。是は其外に見はるゝ處より看れば、大抵は單簡なる如くなれど、その内より看れば、證覺あり、聖智ありて、此の如き人は主の所謂「汝蛇の如く智かれ、鳩の如く馴良かれ」なるものなり。(馬太傳、第十章、一六。)此の如き無垢を證覺の無垢と云ふ。

無垢なるものは何等の美事をも己れに歸することなく、萬善を主に歸して、只主の導き給ふを欣び、かくして證覺の由りて来る萬善萬眞を受け納むるが故に、人間の創造せらるゝや、その幼時は外的無垢の情態にあるも、老ゆるに隨ひて漸く内的無垢の境に向はむとするなり、こは前者によりて後者に

遷り行き、後者よりして復た前者に遷らんが爲めなり。此の如くにして人間は老ゆるに従ひ、其體力衰へて復た小兒の如くなれども、此老人の小兒には證覺あり、彼はかくして亦遂に天人とならんとす、そは天人とは向上の義に於ける小兒の證覺あるものなればなり。故に聖言には小兒を以て無垢なるものを表はし、老人を以て證覺ありて無垢なるものを表はせり。

二百七十九。復活をうるものもありても亦然り、そは復活は靈的人格の再生なればなり。復活の人はまづ小兒の如き無垢の情態に導き入れらる。此状態にあるものは、眞につきては何等知る所あらず、又主を離れて自ら善をなす力なし、而して其眞と善とを願ひ、且つ之を求むるは、只眞なるがため、善なるがためなり。主は亦人の齡進むに従ひて、之に善と眞とを與へ給ふ、主はまづ彼を導きて善と眞との知識に入らしめ、これより進みて智慧に入り、最後に智慧より證覺に進ましめ給ふ、而して無垢は常に之に伴なへり、何となれば、前に言へる如く、眞の果して何ものなるかを知らず、又主を離れて自ら善を爲すを得ずと云ふ自覺、即是れ無垢なればなり。此信なく、又之より起る知覺なきものは、何ものをも天界より受くるを得ず、證覺の無垢とは主として此の如きものを云ふ也。

二百八十。主の導くまゝにして、自ら用ゐざるを、無垢となすが故に、天界にあるものは、皆無垢の情態にありと云ふべし、そは天界にては何人も皆主の導き給ふを欣べばなり。彼等は自ら用ゆるを以て我想到使役せらるゝもの、而して我想とは自己を愛するものなることを知れり。自己を愛するも

のほ他の導くまゝなるを欲せざるものなり。この故に天人は無垢の境涯に在る限り、天界に在り、即ち神善と神眞とに在るものと謂ふべし、そは此に在るは即ち天界に在るものなればなり。故に天界は無垢の度によりて分割せらる。最低即ち第一天にあるものは、無垢の第一度、即ち最下級に在り、中間、即ち第二天にあるものは、無垢の第二度、即ち中級に在り、されど最奥、即ち第三天に在るものは、無垢の第三度即ち最高級に在るが故に、彼等は天界における無垢そのものゝ權化なりとすべし、何となれば彼等はすべて他の天人に優りて、主の導く所となるを欣ぶこと、小兒の父におけるが如くなればなり。是故に彼等は一たび神眞を聞けば、その或は直下に主より來ると或は間接に聖言又は説法に由るとを問はず、直ちに之を志し、之を行ひ、かくして之を自己の境涯中に入れ收む。彼等の證覺が最下天の天人のに比して頗る大なるものあるは、これがため也(二七〇、二七一)。是等の天人は此の如き性相を有するが故に、主より無垢を得て、主に最も親近し、兼ねて我想を離る、彼等は主によりて活くと謂ひ得べきものあり。彼等は、之を外より見れば、率直にして、下天の天人の眼には小兒の如く見え、即ち小さきものゝ如く見え、又甚だ證覺を缺くが如く思はるれども、その實彼等は在天天人中の最も證覺あるものとす。何となれば彼等の證覺は一も自家より出づるものにあらざること、又誠に證覺ありと云ふは此事を承認すること、又その知る所を知らざる所に比すれば、九牛の一毛に過ぎざることを知れば也。彼等曰く、此事を知りて、之を承認し、之を知覺するは證覺の第一歩